
真・恋姫無双 2人の御使い

デイラミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 2人の御使い

【Nコード】

N1958W

【作者名】

デイルミ

【あらすじ】

普通の生活を送っていた主人公、鷺島暢介。しかし、ある日目が覚めると見た事が無い場所、そして首が180度後ろを向いてこちらを見る人の視線だった。

オリ主、そして主人公陣営はオリキャラ（実際にいた武将）などで、その辺りが苦手な方は戻るボタンを押していただくべきかもしれません。

また、作者は恋姫プレイ経験はありますが、キャラの性格などを上手く掴めていない所もありますのでもしかしたら性格が変わって

しまう可能性もあります。

三国志に關してもそこまで詳しくなく、同時進行での筆者の勉強次第で大きく変わるかもです・w・;

ちなみに一刀君は蜀✓にありますが、アンチ要素がすこしだけ入るかもしれません。

〽キャラ紹介〽（前書き）

少し思う所があつて、主人公のみの紹介に変更です。

オリキャラはある程度、人が集まったらにしますです。
（9月1日）

～キャラ紹介～

【主人公】

名字：鷺島さぎしま

名前：暢介ようすけ

服装：ここに来た当時は一般的なスーツ姿。（色は黒）

髪型：短髪で色は黒

身長：170cm

体重：67kg

年齢：21歳

本作の主人公。

現代からこの世界へ来た人物。

基本的には真面目で怒りにくい性格。

ただし、相手が調子に乗ったりすると露骨に嫌な顔をする。

また、理想を押し付けてくる人間が一番苦手であり、嫌いでもある。

三国志に関する知識が全くない為、一刀と比べると先が見えない。

学生時代はサッカーをしていたが、特に優れた能力を持っているわけではなかったが。

努力を怠る事は決して無く、最後にはスタメンを獲得する事に成功した努力の人。

本人自身も、努力する事に楽しさを持っており、それは社会人になつてからも変わってはいない。

久遠に関して、絶賛勘違い中（3話）
その後、勘違いは解消（幕間）

ちなみに彼の身長・体重はあるサッカー選手と同じになっております。

ただ、別にモデルが彼と言う訳でなく、私が好きな選手だからという事なのですが・w・；

ゝキャラ紹介ゝ（後書き）

ついに始めてしまった恋姫SS。

やり始めた以上は完結まで進んでいく所存です。

……近くの図書館で三国志の本を探して読みこまないとな。
休日の過ごし方が大きく変わりそうです・w・;

1話 試験帰りに拾ったもの（前書き）

せめてスタートの時ぐらいは誤字脱字が無い様にしたいなあ。
そんな感じで書いていました。

1話 試験帰りに拾ったもの

ここは、河内郡温県孝敬里。

ある家で親子と思われる2人が向かい合って座っていた。

く久遠sideく

「それで、どうだったのかしら？」

母のその質問に、僕は視線を母から逸らし返した。

「えっと……今回は縁が無かったという事でと言われまして……」

やっぱりかという感じで母はため息をつく。

（今回の仕官先はいい噂を聞かない所だったから、噂の真意を聞いたら凄い怒られたんだよなあ）

そう思い、僕は頭を掻いた。

ただ、あの反応だと恐らく噂は本当なのだろう。

ならば、あのような所に仕えるのは止めておいて良かったのだらうと結論に達した。

もちろん、母には絶対に言えない訳だが。

それに、どうせ仕えるならば、一生をかけてその人物に仕えたいと思うのは当然の事。

ただ、未だにその主も見つけられないまま、現在も実家のため息をつく母を見ている。

「仕官を断られる度に言ってると思うけど、あなたは私の子供達の中で最も優れていると私は思っているわ」

「はい……わかっています」

僕には1人の姉と6人の妹がいる。

ちょうど僕は2番目の子なのだが、下の子はまだ小さいし比べるのはどうなのだろうかと思っている。

もしかしたら、数年後には僕以上の逸材が出てくるかもしれないのだが、母は。

「いや！ あなた以上は出てこないわ！」

と、胸を張って宣言していた。

ここで断っておきたいのだが、僕自身は早く主を見つけて自分の力を発揮したいと思っている。

別に、一生家に居てもいいじゃん？ って考えではないのであしからず。

「そんなあなたが未だに仕官先が見つからないとは、相手が眼が節穴なのか、あなたが真剣じゃないのか」

「ぼ、僕はいつでも真剣にやっています。ですが、まだ出会えていないだけで……」

「主を見つけられずに、変な服装の子を見つけて連れ帰ってくるとはねえ、で、彼はまだ？」

苦笑しながら言う母の言葉に僕は頷く。

「はい、まだ眼を覚ましてはいません」

実は今回の断られた仕官先での試験帰りに倒れていた男性を保護していた。

普段ならば賊に襲われた被害者かと思い、「あ、またか」という形で通っていたかもしれない。

ひどい話かもしれないが、現在の大陸の治安状態を見れば納得する事だろう。

では、なぜ助けたか。

それは彼の服装にあった。見た事もない服に興味が湧き、僕は彼に近づき、彼が生きている事を確認した。

死人を調べるわけじゃないしと彼の服を触ったり、近くに落ちていたよくわからない入れ物らしきものを調べたりしていた。

ただこの光景は、見る人が見たら、遺品漁りにしか見えない光景だった気がする。

そんな最中に彼が呻き声をあげたのを聞いて、僕は驚いていた。

「いや、別に怪しい事は」と思わず答えてしまったのは僕だけの内緒だ。

しかし、彼は目覚めたわけではなくただ声が出ただけであった。

よくよく考えれば、こんな所で何をしてるんだろうと思った僕は

乗ってきた馬に彼を乗せ家まで帰る事にした。

調べるなら、こんな場所じゃなく家で調べた方がいいたろうという判断だった。

家に帰った僕を待っていたのが、びつくりした表情を見せる母と妹達の姿。

彼を妹達に任せて、僕は母に事情を説明した。

彼を見つける前、彼のいた辺りに流星が落ちるのも見たと伝えると母は思い当たる節があったのか一人納得し僕にある事を話した。

母曰く、管輅という占い師が、流星に載って天の御使いがやってくるという占いの結果が出たらしい。

もしかしたら、僕が見つけてきたそれが天の御使いかもしれないわね、と母は笑いながら言っていた。

「早く眼がさめてくれれば、確認ができるんだけど……それに早く寝台に戻りたいでしょ」

「まあ……寝台以外で寝るのは慣れてるから」

笑みを浮かべて話す母に僕は苦笑しながら答える。

連れてきた彼は今、僕の部屋の寝台で眠っていた。

これは当然なことで、この家には空き部屋が無い為、誰かの部屋に連れて行かなくてはいけない。

誰かの部屋というか、連れてきたのは僕なので自動的に誰の部屋かは決まっていたわけだが。

母への説明を終えた僕が部屋に戻ると寝台で寝てる彼と、彼の近くに落ちていた入れ物を調べる妹達の姿。

妹達と言ってもいたのは2人だけで、残りはどこかへ行ってしまったようだ。

残っていた妹達と一緒に中身を再び調べていたのだけれど見た事無いようなものばかりだった。

結局、彼が目覚めてから教えてもらうつという結論に達したわけだが。

あの日から彼が眼を覚ます事がなく、僕の部屋の寝台は未だに占領されたままだ。

まあ、寝る場所としては椅子に座ったままでも十分寝られるのでいいのだけれど流石に、連日は厳しいので身体が少し痛い。

「とりあえずは、次の仕官先をしっかりと探しておきなさい」

「は、はい。分かりました」

母の言葉に頷き、僕は母の部屋から出る為に席を立った。

（次の仕官先かあ……どこかあったかなあ）

そんな事を考えながら。

部屋に戻った私は本を読もうと本棚の前に立っていた。

既に何度も読んだ事のある物ばかりだったが何度も読み返せば別の面も見えるという母の教えに従い。

10回近く読み返している物もある。

「さて……今日は何にしようかな」

最近買った新しい本を読むべきか、あるいはまだ別の面が見えていない作品を読み返すべきか……悩むなあ。

そう考えている僕の背後から声が聞こえた。

「ん……」

その声と何かが動く音。

あ、ようやく彼が目覚めたのだろーと思ひ、僕は彼の方を向いた。予想通り彼は目覚めており、見覚えのない場所だからか辺りを見回していた。

そして僕の視線に気づいたのかこちらを向いてきた。

目の開いた状態の彼と会うのは初めてなのでとりあえず挨拶しないといけないと感じた僕は。

「あ、やっと目が覚めたんですね、身体は大丈夫ですか？」

と、笑顔で言ってみただけれど彼は突然震えだし僕の方を指さしてきた。

その指は震えており口はパクパクし、何かを言おうとしていたが、何を言えないまま彼は倒れてしまった。

「え？ な、なんで？」

驚いた僕は彼に駆け寄ったが彼は気絶しておりしばらくは起きなさそうだった。

なぜ彼は倒れたのか考えていた僕はすぐに結論に達した。

本棚と寝台は向い合せにある。

当時の僕は本棚の方を向いており寝台には背を向けていた。そこに起き上がる彼の声を聞いた僕は、寝台の方を向いた。そう、首だけを寝台の方へ向けて。

だから、彼には自分に背を向け首だけが真後ろを向く人間の姿だった。

彼の反応を見るに恐らく、彼のいた場所には僕のような人はいなかったのだろう。

「ああ、母上からもするなって言われてたのに…… どうしよう」

目覚めた彼をまた倒れさせた事に頭を抱えながら、彼が眼を覚ましたら謝ろつと考える僕だった。

〈暢介 side〉

見た事がない部屋で、恐らく初対面の子がペコペコと俺に対して頭を下げている。

「すいませんでした」と言いながら頭を下げており、下げる度に通称「アホ毛」と呼ばれる部分がピコピコ動く。

それを横目に見ながら俺は、今自分が置かれている状況を考えていた。

まず、今いる部屋だけど、俺には全く覚えがない。

だからだろう、目が覚めたときに「どこだよことか」「知らない天井だ」という台詞が出てきた。

やっぱりこういう台詞が出てくるのは王道なのかねえ。

次に見たのは服装だ、今の俺の服装はスーツ姿になっている。

上着は椅子に掛けてあったので、皺にならずにすんだと、一安心していたわけだが。

そこで一つの疑問が生じた。

（あれ？ 俺、昨日は家に帰ったよな）

昨日は会社が定時で終わり、俺はさつさと家に帰った。

その後は風呂に入り、飯を食って、寝間着に着換えて寝てたはずなんだ。

ところが、目が覚めてみたらスーツ姿になっていた。

テレビのドッキリとかか、とも考えたが一般人の俺にここまでする事はない。

大体、本人が何の了承もしてないのにこんなことしたら裁判ものだぞ。

「どういう事だよ……」

そう呟き、頭を下げていた子の方を見ると……まだ頭を下げていた。

「あのさ、もう十分気持ちは伝わったから、とりあえず頭を下げるのは止めてくれ」

そういつとその子は頭を下げるのをやめ、俺の方を見ると少しだけ笑みを浮かべて言った。

「あ、ありがとうございます」

そういつ……さっき、自分の事を僕って言ってたから、彼だよな、うん。

一人称が僕って男だろうし。

俺は目の前の子を彼、つまり男性だと考えた。

「いや、いいよ。いきなり倒れた俺も悪いだろうし」

と言うが、あの状況で倒れない人間がいたら見てみたいものだと思う。

目が覚める↓見た事ない場所で混乱↓視線を感じその方向をみる
↓首だけ180度回る人間と目があう

左から右なら、180度回るけど、今回は前から後ろだ。

そんな世界びっくり人間みたいな人物に会った事ないわけで。

俺は気絶して、再び目覚めると彼がさっきまで謝っていたわけだ。

「ところで、ここは一体？」

「ここは河内郡温県孝敬里で、私の家です」

先生、場所を聞いたなら聞いた事ない場所がかえってきました。
河内郡温県孝敬里……日本の地名じゃないよなあ。

俺は間違いなく、日本にいたはずなんだけど。

海外出張の予定も無いし、行ってる最中でもない。

普段通りの生活をしていたはずなのに。

目が覚めてみたら、見覚えのない場所で見覚えのない人がいて。
聞いた事のない土地の名前を教えられる。

どうなってるんだ……おい……
思わず頭を抱える。

「あ、あの……」

頭を抱える俺に彼が少しだけ明るい感じの声で話しかけてきた。

「ん？」

「そういえば、まだ自己紹介を済ませていませんでした」

「ああ、そうだね」

自分の状況が分からずに落ち込んでいたが、よく考えたらまだ自己紹介をやってなかった。

社会人失格だなあ……

「じゃあ、俺からやっておこうか、俺は鷺島暢介だ」

「鷺島暢介……姓が鷺で名が島で字が暢介ですか？」

「いや、俺には字は無いよ、鷺島が姓で暢介が名だよ」

流石に字は無い、というか今でも字って文化はあるのか？

「字が無いんですか……それに珍しい名前ですね」

「確かに、自分の親族以外で会った事ない名字だからね」

ついでに同じ名前の人と会った事もそんなに無い気がする。

「ようすけ」という名前だと、陽介や洋介とかが多いからなあ。

「えっと、次は僕の番ですね」

そついうと彼女は咳払いをし、口を開いた。

「僕は姓名が司馬懿、字は仲達と申します」

「……へ？」

司馬懿ってあの三国志時代の人だよなあ。

その辺の時代は全然知らないけど、名前ぐらいは知ってる。

凄い有名人だけど、それが眼の前にいるこの子だったのか。

やっぱり冗談を言ってる様には見えないから、本当なんだろうか。

ひょっとして俺……大昔に飛ばされたってのか。

1話 試験帰りに拾ったもの（後書き）

やっぱり文章を作るのって大変なんですよ。

ここまで考えるのに時間が凄くかかりました。

一回一回、自分の口でキャラの台詞を喋りながら確認していたので、途中で女性の台詞も言っている自分もいました。

……このまま行って恋姫キャラと絡んだら私は何役やる事になるんだろうか。

2話 どこへ行くにも準備は必要（前書き）

しっかりとキャラ設定などしているはずなのに。
実際に書いていくと徐々に変化を遂げていく・w・；

なんか、怖いです。

2話 どこへ行くにも準備は必要

（暢介side）

この世界に来て、もうすぐ一週間になろうとしていた。

「ふう……」

そういい、俺は視線を本から窓の外へと向けた。

天気は良くなり、朝から降っている雨がまだ降り続いていた。

「しかし、会話は出来るのにどうして文字になると読めないんだ」

視線を本に戻すとそこには白文の書かれた部分が見える。

最近になりようやく読めてきたのだが、ここに来た当初は全く読めなかった。

「雨……やみませんね」

その声に俺は視線を今度は右に移し隣に座る女性を見た。

女性の名前は司馬孚、字は叔達といい、仲達の妹さんで、現在の俺の文字の先生だ。

女性と言ったが子供で女の子と言った方が正しいかもしれない。

なぜ彼女が俺の先生をしているのかというと、それは目覚めたあの日に遡る。

あの日、目覚めた俺は仲達との話の後、母親である司馬防さんに会いに行った。

流星は親子という感じで2人の髪色や顔つきがよく似ていた。

ただ、司馬防さんの方が目つきが鋭い。

「……と、これが現在のこの大陸の状況かしら」

正直、この話を聞いて改めて自分が本来いた世界とは違う所に来たと実感していた。

そしてこういう状況下において、天の御使いの話も広がっており、それを希望としている者も。

決して少なくはないという事。

「天の御使い……それが俺という事なんでしょうか？」

はっきり言えば、俺がその天の御使いである可能性は高いだろう。何しろ、今から1800年も先の未来から来たわけで、この時代の人間ではない。

ただ……俺は、神様からどうしろと言われて覚えはない。

あの日だって、家に帰ってそして寝ただけで次の瞬間にはこの世界にいた。

「少なくとも、久遠は流星を見てその後、落ちたと思われる場所であなたを見つけたわ。見た事も無い服を着たあなたをね」

だから、占いの内容にあってはいる。

そう司馬防さんは言った。

ん？　ところで久遠って誰だ？

俺を見つけたのは仲達ではないのだろうか？

ただ、久遠と言った瞬間、司馬防さんの目は仲達を見ており、仲達もまた頷いていた。

ひょっとして……久遠って仲達の名前か何か？

でも、さっきの自己紹介では久遠の「く」の字も出てこなかったわけだし。

聞くべきか？　いや、なんか凄く嫌な予感がするから止めておこう。

機会を見つけて聞いてみればいいだろうし。

「ところで、あなたはこれからどうするのかしら？」

司馬防さんの言葉に、俺は久遠という名前については考えるのをやめた。

「正直にいうと、どうすればいいのか、俺自身が困っているという所です」

いきなり外に出て行っても剣とかの扱いの出来ない俺じゃすぐに狙われて終わりだろう。

かといって、いつまでもここに居る訳にもいかない、それは迷惑だろうし。

あと、先ほど分かった事なのだが。

「文字が……全く読めなくて、これは不味いですよね」

「不味いどころじゃないわね……」

司馬防さんが苦笑でそう返す。

普通に会話は出来るのだが、いざ文章になるとまるで読めない。これじゃあ、旅をするにしても誰かに仕えるにしても問題外だ。

「剣については、あとは文字だけど……」

そう司馬防さんが言っている時。

「あ、あの母上、文字は僕がおしえ……」

俺の隣にいた仲達がそういいかけたが司馬防さんが手で制した。

「久遠、あなたは自分の事を考えなさい。早く仕えて私や妹達を安心させなさい。全く……」

地雷に向かってジャンプしてしまったのか、司馬防さんは仲達に説教を始めた。

会話の流れを聞いてると、どうやら仲達はどこかに仕官したのだがそれが上手いからにきているらしい。

……この時代にも就職難つてあるんだな。

しかし、仲達ほどの人物でも仕官が出来ないってどんだけハードル高いんだろうか。

「とりあえず、彼に文字を教えるのは永遠とわに任せるわ」

「と、永遠にですか……あ、でもあの子なら安心かあ」

どうやら説教が終わったらしく、文字を教えてくれる人が決まったらしい。

しかし、仲達、かなり絞られたのかぐったりしてるな。

「聞こえたと思うけど、教えるのはこの子の妹の司馬孚に任せるわね」

「あ、ありがとうございます」

まただ、司馬孚さんという名前が出てきたが、2人の会話では永遠という名前が出ていた。

淒く気になるなあ……

「久遠、永遠を連れてきなさい」

「はい」

司馬防さんは仲達にそう指示をし、仲達は部屋から出て行った。

「気になるかしら？」

「え？」

不意に司馬防さんから、そう聞かれ俺は答えに困った。
何の事だろうか。

「真名の事よ、さっきから久遠や永遠の名前が出る度に反応してたから」

どうやらバレバレだったようだ。

俺は素直に頷くと、司馬防さんは丁寧に教えてくれた。

曰く、真名とはその人物自体を示す名であり誇りである。

それを許可していない人間が呼べば最悪、首を飛ばされても文句は言えないらしい。

（……あ、あぶねえ、これは誰かに会う度に名前を聞かないとうっかり真名で呼んでサヨウナラってありえるわけだし）

もちろん、そんな死に方はご免だ。

うっかり真名を呼んじゃって首と胴体が永遠の別れって笑えないし、絶対成仏できない。

「どうやら、久遠はあなたに真名の事を教えなかったようね」

そついうと司馬防さんは額に手を置き、やれやれと首を左右に振った。

確かに、これを教えてもらわなかったら俺は挨拶するたびに命をかける必要があったという事に気付いた。

仲達よ……命にかかわる事は教えていただけると有難かったかなあ。

（久遠side）

僕は永遠を探している最中にふと、大変な事を思い出していた。

（あ、そついえば暢介に真名の説明をするのを忘れていた）

どうも先ほどの会話で、真名が出る度に、暢介の表情が変わっていたので何でだろうと思っていたのだけど。
そういえば、忘れていた。

（ま、まあ……母上が教えてくれてるだろうから……また説教かなあ、説教だよなあ）

と、少し暗い気持ちになりながら私は永遠の部屋の前に立った。

「永遠くいるかい？」

そう言いながら部屋に入ると、永遠はそこにいた。
椅子に座り、本を読んでいた。

「あ、どうしたんですか？ 久遠姉様」

僕に気付いたのか永遠は本を閉じると僕の方へ近づいてきた。
何というか、トテトテって音が似合いそうな歩き方だ、小さいから余計に可愛いんだろうなあ。

少しうらやましい、でも僕ぐらいの年でもそうになったら逆に恥ずかしいし、やっぱり年相応が一番だよな。

それと、多分誤解されてるかもしれないけど、僕……女性だからね。

一人称が「僕」とか、胸が無い（ちょっと巻いてるんだけど）とかで男と誤解されるんだけど。

世の中に一人称「僕」で女性っているからね。

「うん、母上が呼んでるから呼びに来たんだよ」

「母上がですか？ 分かりました」

そう頷く永遠を連れて僕は部屋を出た。

「そうですか、御使い様の文字の先生を私にですか」

「ええ、永遠なら大丈夫だって母上がね」

母上の部屋に向かう途中、僕は永遠に説明をしていた。
ある程度説明をし、特に会話らしいものは無かったのだが。

「あの……姉様、一ついいですか？」

不意に永遠が話しかけてきた。

「うん？ どうしたの？」

どんな質問が来るのかも考えていなかった僕は気軽に返した。
だから、永遠の表情が少し赤くて、恥ずかしそうだったのに気付
かなかった。

「姉様はどうして……その……む、胸を巻いているんですか？」

「へ？」

予想を超える質問に僕は歩を止めて呆然と永遠を見ていた。

永遠は頑張つて質問したんだろう、顔が真っ赤になっていた。

「えっと……な、何でそんな質問を？」

質問の意図が分からずに、僕は間抜けさ全開で聞いた。
質問に質問を返すつて良くない事なのだけど。

「以前の姉様は特にそういう事をしなかったのに、突然、胸を隠し始めたので何かあったのかなと思ひまして」

多分、あの時の事を聞いてるんだろう。

僕はそう確信した。

以前、ある所に仕官しようと試験を受けたのだが、最後の面接において。

面接官の視線が胸をチラチラ見ている事を感じた僕は激怒し、さつさとそこを後にしたわけだ。

もちろん、結果は不採用。

もしかしたら、それを気にしなければ採用もあったのかもしれないが、それは僕自身、嫌だなあと思っていた。

何というか、女性の武器を活用しましたと思われる事が嫌で仕方がなかったから……

という事で、一度試しに胸を包帯の様なもので巻いて試験に行ってみたのだが。

試験管の視線は全く胸にいかず、面接も大変いい形で終わったのだが……

（落ちてちゃ意味ないよね）

やがて試験の時だけそういう準備をするのも面倒になってきたので普段の生活からそうしていたのだが。

今度は初対面の人から男性に間違えられる事が、時折あった。

母上や姉、妹達は「久遠（姉様）って、凄く女性らしい顔つきだよね」と言われるのだけだ。

やっぱり、一人称、そして胸なのだろうか。

そういえば、暢介は僕の事を女性だと思っているのだろうか？

対応などを見ると、恐らくは勘違い中だと思う。

どこかで誤解を解かないといけないのだろうか、どこで解くべきか。

まあ、今じゃなくてもどこかで言えばいいだろうし。

そう、僕は気楽に考えていた。

（暢介 side）

「母上、永遠を連れてまいりました」

しばらくして仲達が司馬孚さんを連れてきた。

え？ もう真名を知ってるんだがら、久遠って書けばいいんじゃない

ないかって？

いや、真名預かってるわけじゃないし、それに何かこの辺の文章も悟ってきそうだからさ。

「暢介、その考えで正解です」

うん仲達よ、ここの文章は読まないでください。

「いえ、その辺りもしっかり出来ているのでよかったなあと」

そう言っつて、仲達は笑みを浮かべる。

あれ？ 何か可愛いなっと思って思ったけど……あれ、男だよな？
だって、「僕っこ」なんて俺、実際に見た事ないし、あれって空想のものだと思ってるんですが。

そう混乱している際に、パンパンと手をたたく音が聞こえ、俺は考えを止めた。

「何を言ってるのか分からないけど、この子が司馬孚よ、ほら永遠、挨拶をなさい」

そう司馬防さんに促され、トテトテという効果音が似合いそうな歩き方で司馬孚は俺の前まで来ると、ペコリと頭を下げた。

「はじめまして、私は姓は司馬、名は孚、字は叔達と申します。よろしく願います」

なんというか、守ってあげたいって感じのオーラが出てる気がするなあ。

「ああ、俺は姓は鷺島で名は暢介、字は無いんだ。好きに呼んでくれればいいから」

「では、鷺島様と」

何というか……礼儀正しい子だなあ。

こういう子って俺のいた世界でもあんまりいないような気がするなあ。

「あの鷺島様、早速今から勉強しましょうか」

「ああ、そうしようかな」

司馬孚、かなりやる気みたいだ。

こっぴどくを見るのと教えてもらっ側も嬉しいし、やる気も上がる。嫌々引き受けたってのが見えると、やる気落ちるしね。

「それでは母上、私は鷺島様の勉強を教えてまいりますので、失礼いたします」

「ええ。基本的な文章を読む程度の知識を教えればいいから」

「分かりました。それでは行きましょうか」

「ああ」

そう言っつて、俺は司馬防さんの部屋から出て行った。出る際に一緒に出ようとしていた仲達に。

「久遠、残りなさい」

という言葉が聞こえ仲達が、がっくりしたのが感じ取れたのは内緒だ。

「そういえば、仲達って今日帰ってくるんだっけ？」

回想を止め、俺は司馬孚の方を見る。

「そうですね、確か今日だったと思います」

そついい司馬孚は頷く。

仲達は数日前から別の仕官先の試験があるという事で家を出ていた。

いろいろな所で、試験があつてるんだなと呟いた際に。

「それだけ、人材が足りないって事ですな」

と、仲達は言つて試験に向かつていったのだけれど。

（人材が足りないけど、落ちてるんだよな……仲達って）

そう思ったが言わないでおいた。

「それでは続きを始めましょうか。私の予想だと、今日中には全て終われそうですよ」

「そっか、なら司馬孚の予想が当たるように頑張らないとね」

そう言って、俺は再び勉強に戻った。

勉強が終わり、俺は司馬孚と共に司馬防さんの部屋へと向かった。司馬孚が司馬防さんに勉強が全て終わった事を報告し、2人で部屋を出ようとした際に入れ替わりで仲達が入ってきた。

その表情は明るかったので、ひょっとして採用になったのかと思ったのだが。

「いやゝ、駄目でした」

その言葉に全員がズッコケました。

ええ、どこかの喜劇の様な見事な転びようでしたよ。

司馬防さんなんて机に頭ぶつけてたからなあ。

そして部屋に響くは、司馬防さんの「またか……」という声だった。

2話 どこへ行くにも準備は必要（後書き）

見事に暢介君は勘違い中の状態です。

しかし、筆者自身も「僕っこ」ってリアルで知り合った事ないんですが。

皆さんの知り合いにはおりますでしょうか？

さて、次の話辺りで旅立てればいいのですが……何か引き延ばしちゃうかなぁ（汗）

3話 旅立ち（前書き）

旅立つまでの時間に3話分。
ペース的にどうなのだろうか。

さて、これから中国の地図を見て、2人をどのあたりまで進めるかを考えないと。

どこかで馬を手に入れたとしても距離を見つけないといけませんね。

あと、剣と暢介の決意の部分はもっといいのが浮かんだら訂正するかもです。

3話 旅立ち

笑顔で「落ちました」という答えで場をズッコケさせた仲達。その代償は母である司馬防さんの拳骨一発だった。

〈暢介 side〉

一日振り続けると思っていた雨は夜になると上がり、俺は外に出ていた。

見上げれば星が綺麗に見えており、それは今までいた場所では見れない風景でもあった。

「……昔、じいちゃんの家に行った時ぐらいだよな、こんな星が綺麗に見えたのって」

そう呟きながら、俺はさっきの司馬防さんとの会話を思い出していた。

「まだ、旅立つ決意は出来てないのかしら？」

そついう司馬防さんの表情は真面目で、先ほど仲達の頭に拳骨を落としていた人には見えない。

ちなみに仲達は司馬孚に引きずられながら部屋から出て行った。頭に大きなコブを作って。

「恥ずかしいですけどまだ……この勉強が終わる頃には旅立つつ

もりでいたのですが」

俺の言葉に司馬防さんは小さく頷き、そして言った。

「恥ずかしい事ではないわよ。中途半端な決意ではこの大陸では生き残れないのだから」

「……」

「それに、誰かに仕えるにも旗上げするにも決意無き者に場所は無い」

中途半端な決意で王に仕えたり民を導く事は出来ない。
それは分かっている。

「だから、ここでその決意が出来るまでいても構わないわ。娘達もあなたに懐いているしね」

最後の方は笑みを浮かべながら話す司馬防さん。

「いえ、決意というか漠然としたものはあるんです」

「あら、ちゃんと考えてたのね。話してみて」

「はい。俺にはこの大陸全部の人々を幸せにするなんて事は決して出来ない……そう思っています」

司馬防さんの表情から笑みが消える。

分かっている、今の俺の言葉は守れない命もあると宣言しているのだから。

「多分、俺は人々から天の御使いと呼ばれると思います。だけど、俺は武と知も無い普通の人間です。決して神様じゃない」

「だから、俺に出来るのは多分……近くに居る人達だけなんだと思います」

「それは、領内の人間ということね。」

「勿論です。誰かに仕えるにしても旗上げするにしても、俺はその領内の人間を守りたいと思っているんです」

「……」

司馬防さんは顎に手を当て、考え始める。

「あなたの言うそれは、領土が広がればその分、守る人間は増えていくという事になるわね」

「はい」

「やがて、それが大陸全てに広がれば、あなたは大陸に住む全ての人達を守る……大きな夢ね」

「確かに夢です。だからでしょう、俺はその決意をしっかりと持てないんです」

夢を語るだけならいくらでも出来る。

そう、問題はそれを実現するための道が見えるかどうかなのだが。

「その決意が持てないのは1人だからよ」

「1人だから？」

俺の言葉に司馬防さんは頷く。

「ええ。あなたの言うその夢は1人で背負うには重すぎるのだから決意も出来ないし、進む事も出来ない」

「だけど、こんな夢の様な話に乗るような人が」

俺の夢は明らかに大きく、実現なんて出来るかも分からない。領内の皆を幸せにという段階でそれは綺麗事に聞こえるだろうし、それを大陸全部に広げる。

そんな理想論に付いてくるような人間が……

「どうかしら、久遠を連れて行ってみては」

「仲達を？」

司馬防さんの提案に俺はびっくりした。

自分の子供をこんな夢物語に付き合わせようとしているのだから。

「あの子もいい加減、誰かに仕官しないといけないと思っていたから丁度いいわ」

「そ、そんな事で自分の子供を……」

「あら。天の御使いの右腕なんて言われたらあの子だって嬉しいわよ」

そういう司馬防さんは笑顔だ。

思ったけど、この人って間違いなくSだよなあ。

「それにあなたならあの子を導けると私は思ってるわ」

「え？」

「なぜ、あの子が色々な仕官先から断られてるか分かるかしら」

「断られる理由？」

仕官先から断られる理由、それは色々な要素があるよなあ。

例えば、面接時の言葉使いとか服装、あるいは思想の向きとか。

あるいは面接官との相性とかだろうか。

ああ、案外緊張して「君、表情暗いね」って言われてパニックになつてボロボロになるってそりゃ俺だ。

「それはね、あの子の才、それを恐れているから」

「恐れる？」

「ええ。誰だつて凶暴な虎を飼いたくはないでしょ」

それは当然だろう。

ある程度の地位にいる人間ならそれを死守したい。

そこに自分よりも明らかに上の能力を持っていて扱う事が困難だと思えばどうする。

簡単だ、それを採用せずに扱いやすそうな奴を雇えばいい。

「仲達は、だから落とされているんですか？」

「まあ、あくまでも私の予想よ。案外、あの子は試験とか面接を手を抜いてるかもしれないし」

本当にそうなら説教ね。

そう司馬防さんは言うけど、その表情はそれはないわねという子を信じる親の表情だった。

「だけど、俺にその虎を預けるんですか？」

正直俺は猛獣使いじゃないし、どこかの動物王国の主でもない。そんな虎を預けられても一口で終わりですよ。

「大丈夫よ。あなたの前なら虎も猫になるから……私を信じなさい」

そんな司馬防さんの言葉も信じられないのだけど。それに何で俺の前だと虎が猫になるんだよ。ただ、いくら親が認めても。

「仲達本人が俺に付いてくると言ってくれたら一緒に行きます。でも強制しないでください」

本人が嫌だといえ、それまでだ。

俺だって嫌がる人間を無理やり連れていく気は無い。

「ええ。分かってるわ」

そついう司馬防さんの表情は笑っていた。

先ほどまでのやりとりを思い返して俺はため息をついた。

「はあ……司馬防さん。仲達を脅してるんじゃないだろうな」

そんな事はないだろと思う自分と、大いにありうろと思う自分がいる。

それに……場面も想像できるから厄介だ。

「確かに、仲達と一緒に来てくれたら助かるのは事実だよ。それに……」

仲達の様な、歴史に疎い俺でも知ってる大物が一緒に来てくれるなら有難い。

それに、おぼろげだった夢の景色が仲達と2人並んでみると少しだけ見えた気がした。

「俺は仲達が来てくれる事を期待してるのかな」

「嬉しい事を言ってくれるね、暢介は」

呟いた声に仲達の声が聞こえたので俺は視線を左右に振った。すると、俺の左側に仲達が俺に背を向けた状態で立っていた。

「い、いつからそこにいたんだ？　というか、どこから来たんだ」

「ん？　いつからっていうと、『司馬防さん。仲達を脅してるん

じゃないだろうな』って所からで。どこから来たかは僕の部屋の窓から」

最初からいたのね。

あと仲達よ、窓は玄関じゃないぞ。

「司馬防さんとの話は終わったんだ」

「うん。すぐに終わったよ」

「そ、そっか」

結果が気になる俺は仲達の方を見る。
仲達は依然、俺に背を向けたままだ。

「あのさ、暢介」

「ん？」

沈黙を破ったのは仲達の方だった。

「暢介のしたい事。母上から聞いたよ」

「ああ、どう思った」

「正直、大きすぎる夢だと思うよ」

「だよな」

「ただ、最初から大陸全員と言わなかったのは合格。流石にそれ

を言われたら僕は、がっかりしてたよ」

「だろうな。俺だって最初からそんな夢は言わないさ」

そうだ、最初から大陸全員なんて無理なんだ。

それなのにそれを追いかけるのはただの理想主義者だ。悪いけど、俺はそれには乗れない。

「それに、その先には必ず他勢力との戦いがある」

だから、一呼吸入れて仲達は言った。

「もし、戦いになった時。暢介は相手を、殺す事が出来ますか？」

「……」

「即答は出来ませんか……」

少しだけ仲達の声に寂しさが含まれた気がした。

「勿論、誰も傷つかないのが一番いいさ。でもそれは無理だろ……
…互いに譲れないものがあるのだから」

「そうですね。そもそも、簡単に折れるものでは仕える人間が困るわけですね」

「ああ、だから俺は戦う。戦って逝った人達に、俺の目指したものが正しかったと認めてもらえるように、そして残った人達が笑顔で入れるようにね」

「……」

俺の言葉に、仲達は返答は無かった。
俺の思い、仲達には届かなかったかな。
そう、俺が思った時だった。

「……うん。決めた!」

「え?」

そう言って、仲達は俺の方を振り返った。

振り返った仲達は笑顔で思わず俺はドキッとした。

(おいおい、俺はノーマルだろ。何で男にときめいてんだよ。ア
ッー!な関係はごめんだぞ)

無理やりそれを抑えた俺は仲達の方を目線だけじゃなく身体も向
けた。

「決めたって。何を?」

我ながら馬鹿な質問だよな。
今の状況で決めたなら、1つしかないだろうに。

「僕は君と一緒に行くよ。君の夢を叶える為にね」

仲達は笑顔のままだ。

「いいのか? 君ぐらいの人なら……」

もつと、天下に近い人間に仕えられるだろうに。
そう言おうとした俺に仲達は首を横に振った。

「いいんだよ。僕が決めた事なんだから」

仲達は笑顔のまま、それでいて少しだけ頬を赤く染めて言った。

「僕は君と一緒に行くよ、だって僕は……」

（おいおいおい！！ この流れはどうみても「僕は君が好きなんだ」って流れだよな。俺はノーマルなんだよ！！）

まさかの展開予想に俺の頭は混乱状態。

ただ、仲達の答えは。

「僕は君を拾ったんだからさ。最後まで面倒みないとね」

ズッコケましたよ。ええ。

良かったと思う反面、何か複雑な気分にもなってます。

あと仲達よ、顔を赤くして言わないでくれ。

「何だ。保護者って事ですか」

「まあね、それにさ……」

「ん？」

「2人で協力しながら、進んでいくのって凄く楽しいと思うんだ。
僕が出来ない事は暢介がやって、暢介が出来ない事は僕がやるから」

「それだと……殆どの事を仲達に任せないとな」

「うんうん。任せてよ、僕がちゃんとやってあげるよ」

笑顔で頷きながら仲達が言う。

おお、頭のアホ毛もピョンピョン跳ねてるよ。

頷きが終わると、仲達は真面目な表情で俺に告げる。

「僕の姓は司馬、名は懿、字は仲達……そして真名は久遠。これをあなたに預けます」

真名を預かる。

それがどれだけ大変で名誉な事が、それを受け取らない訳にはいかないよな。

「ああ、確かに受け取った。俺には真名は無いから、今まで通り、暢介でいいよ」

「ええ。よろしく願いしますね、暢介」

「こちらこそ、久遠」

久遠 side

「久遠、あなたが彼と共に行くというなら、私は母として喜んで送り出すわ」

「母上」

暢介との話の後、僕はもう一度母上の部屋に向かった。
そこで、暢介と一緒にいくという事を伝えた。

正直に言えば、告げた時に母上が喜ぶのだろうかと思っていた。
母上の言葉を借りれば、僕は娘達の中で一番の才能を持っている
と言っていた。

それが天の御使いなんていう、最近になってようやく文章が読め
てきている人と一緒に行くというのだ。

本来なら、それなりの勢力の王に仕えてほしいと思っているはず
なんだ。

「私が考え直せとでも言うと思ったかしら？」

「正直、思っていました。 僕が母上の立場なら少し考えないかと
言うと思います」

「そうね。私も、普通ならそういう所なんだけどね」

そう言っ母上は、少し考えるそぶりをみせた。

「今思えば、あなたが彼に会うのはちょっとした運命なんじゃないか
かと思ってね」

「運命……ですか？」

「そう、彼に会うまであなたは仕官に失敗し続けた。そしてあの

日も試験に落ちて家に帰っている途中で彼に出会った」

「まあ、確かに出来すぎてる感じがしますけど」

「そうね。あまりに出来すぎてるわね」

暢介を助けて、彼の旅立ちに同行する。

そこまでの流れはあまりにも出来すぎている、まるで初めからの流れが決められていたかのように。

だけど。

「例え運命でも、僕は暢介と共にこの乱世。くぐり抜けて見せます」

「しっかりと決意を持ってるわけだし。私が何を言っても駄目でしょうから」

それぐらいの決意を持っていれば、すぐに仕官できたでしょうに。そう母上は苦笑しながら言った。

「それはそうと久遠、もしかしてとは思っけど、まだ彼は」

「ええつと……多分、勘違い中だと思います」

彼、暢介はまだ僕の事を男性だと思っているようだ。

どうやら彼の世界では一人称を「僕」と名乗る女性に会った経験がないのだろう。

だから、僕＝男性という式が出来ていると思う。

「その巻いているものをとってしまえば、すぐに分かるでしょう」

に」

「そうなんですが、取る機会を逃してしまい」

本来なら最初の段階で伝えておくべきだった。

ただ、「僕女性なんですよ」なんてどこで言つべきなのか分からなかったんです。

「なら、明日からは取って行けばいいと思うわよ。彼の目が飛び出すかもしれないけどね」

悪い笑みでそう言う母上。

「流石に、旅立つその日に暢介を驚かせるのはどうかと思うので……落ち着いたら伝えます」

今は無理でもどこかで伝えればいい、当時の僕はそう思っていた。

ただ、この考えはあっさり壊れる事になる。

その原因を作ったのは僕自身なので、何とも言えないのだけれど

……

＼暢介side＼

翌日、旅立つ事になった俺と久遠を見送るのは司馬防さん1人だった。

その際に俺は、司馬防さんから一本の鞘に入った剣を手渡された。

「これは？」

「あなたへの私からの餞別です。気にしないでください。その辺に売ってたものですから」

そう言われ、俺は剣を見る。

ちよつと重いそれは、簡単に人の命を奪う事が出来るものだ。

「別にそれで、多くの者を殺せと言ってるわけじゃないわよ。ただね、長く戦場にいれば感覚はどんどんおかしくなっていくわ」

「……」

「それこそ、人を殺す事に慣れてしまう。命の重さも分からず、ただ己の欲望の為に殺してしまう……そんな人になってしまっわ」

「その剣は命の重さを感じる為のものよ。それを決して忘れてはいけませんよ」

「はい……ありがとうございます」

「いいのよ。私も自慢の子をあなたに預けるのだから、これぐらいはしないかね」

そう言って、司馬防さんは笑った。

ただ、なぜか隣に居た久遠はちよつと苦い表情を浮かべていた。

「久遠、しっかりと鷺島様を支えなさい。彼にとってこの場所で見せる事は全てが初めての事。彼の苦しみ、それを理解するのも大事な事よ」

「分かっています」

「鷺島様、久遠をよろしくお願いいたします。この子は精神面でまだ弱さを見せる時があります。その時には支えてあげてください」

「はい。俺も久遠に支えられてばかりじゃなく、支える、そのつもりでいます」

その答えに満足したのか司馬防さんは頷くと微笑み、別れを告げる。

「2人の活躍、この地から祈っておきましょう。……行つてらっしゃい久遠、鷺島様」

「さあて、久遠。どっちに向かうか？」

「とりあえず、南に行きましょう」

昨日の雨が嘘の様な晴天の中、2人は南に向かって歩を進める。

『番外』

「いいのよ。私も自慢の子をあなたに預けるのだから、これぐら
いはしないかね」

(母上、何でそこで自慢の娘って言わないのですか……)

3話 旅立ち（後書き）

次の話では暢介君の勘違いを解消してあげましょう。

と言う事で、幕間という形になるかと思えます。
なので、更新は早いかなあ。

幕間 何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね（前書き）

さて、暢介君にはここで勘違いを解いてもらいましょう。

現在の筆者

地図確認↓「ここまで行くと不自然じゃないかな」

と言う事で、場所を探しております。

幕間 何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね

〈暢介 side〉

旅立ちの日からひたすら歩いていると、自分がどれだけ恵まれた世界にいたのかが良く分かる。

遠くに行くなら、バスや列車、飛行機だつてあつた。
それに乗ればすぐに目的地についていたわけだから。

もちろん、この時代にそんなものは無いし、無い物ねだりをする訳にはいかない。

だけど、これだけは皆に言いたいんだ。

（人間って……歩こうと思えば歩けるもんだね）

そう、ある程度の距離になればそこで一步も動けないぐらいに疲れ果てる所なのだが。

いつもある程度の余裕がある状態で宿に泊まっていた。

そして今日も余裕を持って宿に着いたわけだ。

常に余裕があるのは学生時代の走りこみでスタミナ強化を続けていた結果なのか。

それとも、久遠の距離配分が絶妙なのか。

（……どっちもだろうな。っていうか、このバッグ）

そう思い、俺は足元に置いてあるバッグを見る。

久遠が言うには俺が倒れていた場所のすぐ横に落ちていたらしい。

このバッグは俺の物であるのは間違いない、見覚えがあるしね。
ただ、こいつは実家に置いてきているから。

（俺をここに連れてきた奴は、実家に入り込んだって事か）

親父、お袋……どうやら家のセキュリティは不完全らしいぞ。

バッグの中にはボールペンとノート、そしてスニーカー。
スニーカーは大変役立っている。

何しろ、それまで俺が履いていたのは革靴だからだ。

いや、革靴で長い距離を延々と歩くのはどうかと俺は思うんですよ。

そして音楽プレイヤーとイヤホン……そして、実家に置いている、
ヘッドホンが入っていた。

イヤホンかヘッドホン、どっちか1つでいいじゃんとその時、思
ったのは内緒だ。

ただ、2つあって良かったとその後、思ったのだが。

まあ、後は色々だね、下着とかも一応入っていた。

連れてきた奴は、実家に入り、一人暮らしの俺の家にも入って色々入れていったらしい。

ちなみに久遠にはボールペンとノート、そして音楽プレイヤーの説明はしておいた。

「うわゝこんな綺麗に書けるんですね」

ノートに自分の名前を書く久遠。

その様子を見ながら俺は、やっぱりここは自分がいた、現代と違うんだなと再認識した。

ボールペンでノートに文字を書くという当たり前の行為を久遠は珍しい物を見る目で見て。

今は、それを自分がやってみるという事で緊張していたからだ。

困ったのは音楽プレイヤーの説明だった。

音を楽しむという事で、この時代にも楽器はあるようで、その音を楽しむものだと言明したのだが。

久遠はいまいち、理解できなかったようで……いや、俺の説明力不足なのもあると思う。

社会人生活で培ったトークスキルは、まるで役立たずなようです。

しょうがないので、実際に聞かせようと思い、イヤホンを久遠の耳に入れようとしたのだが。

「いや！ 入ってくる……」

という、声だけ聞いたら凄く誤解を受けそうな言葉を言う久遠。ええ、その時の場所が宿で、久遠の部屋で良かったですよ。これが街中とかだったら間違いなく俺、スケベ扱いですよ。

ただ、曲を楽しんだ久遠は気にいった曲があったのか、時折それ

を口ずさんでいる時がある。

ちよつと待ってね、久遠さん、その曲1回しか聞いてないのに全部覚えたの？

歌詞カードもなしで……凄いわぁ。

と、感心してしまったのは内緒だ。

そんな事を考えていると、部屋が取れたのか久遠がこちらに向かってくる。

ただ、その顔は何やら複雑な表情を浮かべていた。

「どうした？ そんな顔して」

「いえ……実はですね。一部屋しか取れなくてですね」

ん？ 部屋は取れているんだから別にそんな複雑な表情しなくても。

「それも、寝台が1つしか無くてですね。いや、普通よりは大きいらしいんですが」

「ああ、そう言う事か。でも、俺は構わないけどなぁ」

「構わないって……」

「まあ、そういう所で並んで寝た経験はあるにはあるからなぁ」

「そ、そうなんですか……」って暢介、何で遠くを見る様な目をす

るんですか？」

「いや、思い出したら自然と視線が遠くに」

思い出すべきじゃなかった、あれは高校生の時の合宿ときだ。

チームメートの1人がベッドを壊してしまい、なぜか俺のベッドに入ってきた。

気付かなかった俺は、翌日、視界一杯に入ってきたそいつの顔に思わず悲鳴をあげてしまった。

あれと比べれば、今回は何倍もマシだ。

あいつはどうみても野郎だったけど、久遠は中性的……っていうか女の子に見えるし。

うん、大丈夫だろう。

って……今度は表情が暗くなったぞ久遠のやつ。

久遠 side

ここまで暢介に自分の性別の事を告げなかったのは僕のせいだという事ははっきり分かっている。

ただ、言い出す機会が未だに見つからない。

というか、どこでこの事を言えればいいんだろうか。

今は部屋で既に暢介は寝台で横になっている。

先ほどまで話をしていたのだけれど、そこでも言い出せなかった。

「勘違いしてると思うけど、僕、女性だよ」

そう、この一言でいいんだ、なのに言えない。

そうしていつも通り、言い出せずに一日が終わってしまう。

この繰り返しだ、もう終りにしないと……

そう思いながら僕は暢介の方を見る。

既に眠りに入っているのか、規則正しい呼吸が聞こえるだけだ。

「……寝よう、今日はもう言えないし」

そう考え、僕は暢介の寝る寝台に横になった。

暢介とは背中合わせの状態をとる。

目をつぶるが、全く眠る事が出来ない。

ここ数日は伝えられなかった自分に嫌気がさして寝れない時が続いていた。

（いい加減、寝ないといけないのに）

そう思っていた、僕の脳裏に母上のあの言葉が出てきた。

それは旅立つ寸前に母上に引きとめられて言われた言葉だ。

「いい久遠、もしも彼に女性だと告げるのが難しいなら行動で示

しなさい」

「行動ですか？」

「そう……最悪、襲うしかないわね」

「襲うって何を言ってるんですか母上」

「最悪の場合よ。でもそうね……寝てる彼に抱きつくというのはどうかしら？」

「いや、どうかしらって……」

「彼が起きたら、自分にはそういう癖があるとでも言えばいいのよ……実際、あるみたいだし」

「な、無いですよ」

「あんたね、理遠（司馬朗の真名）が言ってたわよ、一緒に寝てたらいきなり抱きつかれたって」

「……あ」

「立派な物を持って抱きつくとは、無い自分への嫌味か！ って」

「立派な物って……」

「兎に角、方法はあるわ、後はあなたが何を選ぶかよ」

（何で、これを今思い出すんだろ）

それだけ切羽詰まってる状態という事なのだろう。
そう思った僕は、一旦寝台から降りた。

そして、胸を巻いていたそれを取り、再び寝台に横になり、暢介の方を向いたのだが。

（……だ、駄目だ。恥ずかしくてこれ以上は）

余計に恥ずかしさが増してしまい僕は背を向ける。
しかし、色々と考え、動いたおかげで、眠気がきてる事を感じた。

（もう寝よう、それに胸も取ってるし、明日になったら説明できるだろうし）

そう考えて僕は目を閉じた。

明日になれば自然と説明も出来ると考えて。

そして忘れていた。

母上が言っていた、僕の寝ている時の癖を。

（暢介side）

気持ちよく寝ていたのですが、目が覚めてみると誰かに抱きつか

れている状態でした。

ええ、抱きついているのは久遠でしょう。
そうじゃなかったら、逆に凄く怖いです。

ただね、久遠でもおかしいんですよ。

だって、背中にさつきから当たってるんですよ。

何が当たってるかって？

背中に柔らかいのが当たってるんですよ。

分からない？ 分からないならそれでもいいんですけど。

（おかしいだろ、だって久遠って男せ……って久遠本人は一言も言っていないよな）

そう、久遠は一度も「僕は男です」とは言っていない。
勝手に俺がそう思って、一人で納得していたわけだ。

（俺の勘違いか……って事は俺、今、女の子と一緒にベッドで寝てる）

そう考えると突然、体中が熱くなった気がした。
否、確実に熱くなってる。

（落ち着け俺、そうだ……昔、妹と一緒に布団で寝てたじゃないか……ってあれは肉親じゃ……）

今寝てるのは、肉親じゃない……それにだ、ここまで密着したのは初めてで。

完全に混乱していた俺は、久遠を起こす事も忘れて一人で慌てふためいていた。

「本当にごめん！ 勝手に男性だと勘違いしてました」

朝になり、今の俺は久遠に向かって土下座をしていた。
久遠は顔を真っ赤にしていたが。

「い、いえ、僕の方こそ、こんな行動をとってしまい」

と、決して怒っているわけではなく恥ずかしさの赤だった。

「いや、久遠が寝てる時に何かに抱きつくってのは癖なんだろう」

「らしいです」

「まあ、こういう形で俺の勘違いが解けたのは良かったかどうかは疑問だけど……」

早い段階で知れて良かったよ。

そう告げると久遠はクスツと笑った。

「そうですね、まさか僕もこんな形で疑問が解けるとは……って
そもそも暢介が僕を女性って思えば良かった話じゃないの？」

「そうですね」

某番組のお客さんみたいな返しになってしまった。

「ねえ、どうして僕を男性だと思ったの？ やっぱ、僕に女性

の魅力がないから?」

そんな事はないと、俺は首を横に振る。

久遠に女性の魅力がないなんて、ありえない。

特に何がという訳じゃなくて、全体的に女性らしいです。

では何で、俺は男性だと思ったのか。

単純に、「僕っ子」なんているわけないよね。

という思い込みがあまりにも強かった。

ただ、今ではリアルでもいるんだなぁと考えを改めました。

「暢介、僕が女性だからといって、付き合い方を変えないでよね」

その言葉に俺は頷く。

「ああ、変える気は無いよ。そもそも俺は男女って事で付き合い変えられるほど器用じゃないんでね」

「そっか、なら行こうか。今日も歩くよ」

そう言つて久遠は腰かけていた寝台から立ち上がり荷物の方へ歩く。

(そもそも、女性との付き合いだつてよく分からないからな)

思わず苦笑する俺。

女性との付き合いなんて、クラスメイトとか妹とかお袋ぐらいだ。親密な付き合いなんて無かった。

見ると、今まで腰の所で纏めていた髪を、今は首の所で纏めている久遠の姿が。

「あれ？ 位置変えるんだ」

そう言った俺に久遠は振り返り、笑顔で言った。

「うん。こうすれば女性っぽいと思ってね」

その後、宿を出る際に亭主が久遠を見てひっくり返ったのは内緒だ。

ああ、亭主も久遠を男と思ってたのな。

幕間 何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね（後書き）

リアルで「僕っ子」に会ってみたい僕です。

次の辺りで義勇軍、そして2人目のキャラを出したい。

しかし、このキャラ、原作で名前だけ出てるっばい。

これはオリキャラになるんか……

4話 守る為に……（前書き）

最近の出来事。

図書館にて三国志の本を探す。

「見つける」↓「うわぁ〜武将がイケメンの絵だ」↓o r z

俺が読みたいのはこういう本じゃないのに……

他の本も似たようなものばかりで困ってます。

ちなみに作中で久遠が口ずさんでいる歌ですが。

特に決まって無いので、皆さんそれぞれでどうぞ。

4話 守る為に……

（暢介side）

義勇軍を募り、最初は300人という数が集まった。
多いなあと思っていた俺に久遠が言った一言は。

「うーん、少ないなあ」

300人が少ないとは、俺はそう思ったのだが。

思えば、人の単位も俺の時代のそれとは違ってくるわけで。
時代によつては1000人単位とかもあるわけだし……

それに、この300人が全員入ってくるわけではなかった。
体力や実技、それにほんの少しの面接で少しばかり落とす。

面接にてこの300人は2つのタイプに分かれる事になった。

一つは、「飯が食える」とか「御遣い様に付いて行けば何かいい
事あるかも」と考える者。

もう一つは、真剣にこの世を憂い、乱世を終わらせたいと強い思
いでいる者。

中には「御遣い様のお手伝いをしたい」と言ってくる者もいた。

この2つに分かれており、人数は後者が少し多く200人、前者
は100人だった。

これをどうするか久遠との話し合いになったわけだが。
結論はすぐに出た、俺と久遠は同じ事を考えていたから。

全員採用ではなく、後者の方を取り、前者は落とすという方針だ。

これは2つのグループを一緒にしてしまえば後者グループに悪影響が出るだろうという予想からだった。

後者グループは訓練などを行えばどんなにきつくてもやり遂げようとするだろう。

しかし、前者はどうだろうか。

彼らの目的はあくまで飯を食ったり御遣いに付いて行く事で何か貰えたりするんじゃないかというもの。

よって、前者グループは訓練はまともにやらないだろう。

戦いにおいてもそうだ。

前者グループは、命の危機ともなれば武器を捨てて、さっさと逃げ出すだろう。

別に上官に忠誠を持つてゐる訳でもないし、金の切れ目ならぬ米の切れ目が縁の切れ目ってやつだろう。

後者グループは逆になるだろう。

彼らは命の危機になったとしても自らの命をかけて上官を守ろうとするだろう。

それが自分の役割であり、そうする事で上官が生き延び、それが自分の土地。

ひいては自分が守りたい身近な人達を守ってくれと信じ。

その2つを一緒にすれば、間違いなく不満が出る。

後者グループからすれば、物欲の連中と一緒に戦うのも不満だろ

うし、訓練も適当になって力にならない。

それでは賊との戦いで大きな被害になってしまっただろう。

そうして後者グループの方を採用する事になったわけだが。
その際に……

「まあ、彼らに上に立つ者として信頼されてくださいね」

と、久遠に言われた。

上に立つ者としての信頼……

うーん、社会人になってもまだ昇進とかしてなかったし……

部活でもキャプテンじゃなかったからなあ。

上に立つ者ってどういう事をすればいいのやら……

その後、俺の取った行動は久遠を咂然とさせたわけだが。

その行動のおかげか、俺は兵士達に信頼され「この人の為なら死ぬる」という形になり。

上に立つ者という事では成功したというべきなのだろう。

さて、300人中200人という少ない人数からスタートした訳だが。

別にこれ一回きりという訳でなく、何カ所かの街や村に寄った際に義勇軍を募っていた。

ただ、あくまで飯欲しさに来るものなどもあるために、増え方はあまり良くなく。

現在の所、600人という人数になっている。

ただ、移動中に賊との戦いもあり、死んでいった者をいる。

この戦いの際に、俺も賊を殺しており、初めて人を殺すという経験をした。

正直、身体の震えは止まらなかったし嘔吐も止まらなかった。人間ってここまで震えて、出す物も無いのに吐くんだなって思ったよ。

「大丈夫ですか……暢介」

心配そうに声をかける久遠に俺は右手を挙げて大丈夫だという意思表示をした。

声をかけてもらったただけだが、俺は少しだけ落ち着き、久遠の方を見た。

大分、辛そうな表情をしているんだろう、久遠や兵の皆の心配する表情が見える。

「……悪い、覚悟はしてたはずんだけどな……」

人を殺すという覚悟を持って、旅に出たはずなのに実際に殺してからこんな感じた。

いかに俺の覚悟が甘かったのか……自分自身に苦笑せざる得ない。

「いえ、その反応が当たり前ですので、暢介は大丈夫ですよ」

「当たり前？」

「ええ、人を殺しておいて、震えて吐いて、自分の覚悟の弱さを知る事です」

それに、久遠はそこで一旦言葉を切り、再び口を開いた。

「何の罪悪も無く、人を殺す人間に僕は仕えたくないですし、皆もそうだと思いますよ」

そう言つと、久遠は兵士達の方を振り向く。

兵士達は頷き、久遠はそれを確認すると俺の方をもう一度見た。

「暢介、その感情がある限り、あなたは大丈夫」

そういう久遠の表情はまるで、母親が子供を見る、そんな優しい表情だった。

さて、そんな事があつたりして現在は南郷という所に来ています。度々、賊との戦闘があり、それを撃破しているという事でこの辺りでは名前がそれなりに売れてきているらしい。

もともとは天の御使いが率いている義勇軍という事で少しは名があつたようだが。

ただし、賊の立場からすれば名の売れている義勇軍を倒せば自分達の名も上がる。

なんていう考えの集団もいるらしく、名声のある分だけ戦闘も増

えていた。

戦闘が終われば敵味方関係なく供養する。

その行動がまた、名声を与えて色々な人に注目されるというわけだ。

しかし、そんな事は関係ないとばかりに俺達の移動は、まあ緩い。

「
」

「ん？ 久遠、その曲ばかり口ずさんでるな、気に入ってるのか？」

隣で歌を口ずさんでいる久遠に俺は言った。

その曲は、俺の音楽プレイヤーに入っていた曲で、有名な曲だった。

久遠は一度だけ、それを聞いて、次の日には歌詞を全部覚えている状態で口ずさんでいた。

まあ、英語とか無かったから覚えやすかったのかもしれないけど。

「気に入っているというか、これしか知らないから、それで暢介、どうでしたか私の歌は？」

「ああ、とても上手だったよ」

それを聞いて、久遠は笑顔で再び口ずさみ始めた。

そうして歩を進めていくうちに街が見えてきた。

ようやく着いたかと俺達は安堵したのだが……

「ん？ 何か騒がしいような……」

耳を澄ますと、街の方から人の声が聞こえてくるのだが様子がおかしい。

言い争っている感じの音が聞こえてくる。

「そうですね、すいませんが確かめてきてくれませんか？」

「はっ」

久遠の指示で、1人の兵士が入口へ向かっていった。

「それで、どうでしたか？」

「はっ。どうやら大規模な賊が来るという事で、県長が逃げ出したとの事で人々が混乱して」

兵士の報告に俺は久遠に聞いた。

「県長が逃げるって、それ不味いよな」

「不味いどころじゃないですよ。治める人間がいない訳ですから、何を出来ませんよ。このままだと」

「賊の侵入を許して略奪か？」

俺の答えに久遠は首を横に振る。

「それだけで済めばいいですが、それ以上の被害も考えられます」

「それって……」

俺の答えに久遠は頷く。

最悪の出来事が起こる、それを知っていてどこかに行く気はない。俺は皆に告げる。

「ここの人達を助けよう」

「おお！」

俺達は街へ向けて進軍を開始した。

街に入ると口論している集団に出くわした。

「本当に申し訳ありません、私のせいで……」

右手に帽子を持って、女の子が頭を下げていた。

ただ、他の人々はその女の子を責める様子は見られなかった。

「いや、あんたの責任じゃない。ただ、相手が悪かったんだ」

「そうだな……それより、これからどうするんだ？」

「そりゃあ……逃げるしかないだろう」

どうやら、人々は逃げるつもりでいるらしいが、何があったのかを聞く必要があるそうだ。

「何かあったんですか？」

俺は近くに居た男性に話しかけた。

「賊の奴が2人、この街に来て暴れてたんだが、あそこにいる嬢ちゃんが叩きのめしてな。それに怒った賊が仲間連れて攻めてくるって事で逃げよう話になってるんだが」

「そんな事が」

「ああ……ん？　ってか、あんた誰だ。見た事ない服着てるし」

「えっと、俺は」

自己紹介を始めようとした瞬間、間に久遠が入ってきた。

「この方は鷺島暢介様と申しまして、こちらの義勇軍を率いている方で更に、噂されている天の御遣い様です」

「て、天の御遣い！」

男の声に周囲の視線が俺に集まる。

人々は「あれが天の御遣い様か」とか「見た事ない服だあ」と言

っている。

(……俺、服を着てなかったらどんな風に見られたんだろ)

ちよつと泣けてきた。

そんな時、恐らくこの人々のまとめ役なのだろう初老の男性が一人、俺の前に立った。

「わしはここで長をさせてもらっているものじゃが。あんたは本当に天の御遣い様なのかのお?」

「天の御遣いに関しては、皆さんに信じてもらう他ありません。ただ……」

「……」

「育った場所から離れたくない、そう本心では思っている人々を見捨てる訳にはいかないんです」

そうだ、彼らは逃げるつもりでいるが、それは本心じゃない。

本当はここから離れたくないんだ。

自分が生まれ育った場所、自分の思い出の場所。

そこから離れるという事は、自分の思い出をも捨てるという事になるから。

そして、自分達が逃げてしまえば思い出の場所は賊によって壊されてしまう。

それはあまりに残酷だ。

「そうじゃの……自分の育った場所は自分の手で守る……当然の事じゃのお」

老人は頷くと、人々の方を向き、言った。

「わしらのこの生まれ育った街、守るぞ」

「で、ですが長老……逃げた方が」

「確かに逃げれば命は助かるじやろうな、じゃが逃げた先でも賊が来たらどうする？ 命ある限り逃げ続けなければならぬかもしれない」

それに……長老はそこで言葉を一旦切り、一呼吸入れて言った。

「ここに天の御遣い様が来たのも何かの天恵かもしれぬ、勿論、強制はせぬ。逃げる者は逃げて構わぬ、怨む事もない」

「……」

人々は考える。

長老の考えに乗り、ここにいる俺達と共にここを守る戦いに参加するのか。

それとも、この街を捨てて近い街でも村もいいからそこに逃げるのか。

ある程度の時間が経ったが、誰一人逃げようとはしない。

「……皆、この街が好きなんじゃな」

そう言った長老の言葉がすべてだった。

好きな場所を守る、何と単純でそれでいて素晴らしい事か。

「さて、御遣い様。指示を与えては下さいますか」

長老の言葉に俺は久遠の方を見る。

久遠は頷くと前に出て叫んだ。

「では、まずは賊の規模が分かる方と、このあたりの地形に一番詳しい方がいたら、僕の所に」

「それと、若い男性は武器になる物を探してきてください。女性の方は負傷者の手当てが出来る様に準備をお願いします。子供は、老人と一緒に安全な場所に避難を」

テキパキと指示を出す久遠。

そして、指示を受けた人々が一斉に散らばった。

……うん、俺の立場って一体何なんだろう。

こういう指示って本来は俺がやるべきなんだろうね。
やらないといけないんだろうな……

俺がやれる事っていえば……手伝いだな。

「よし、久遠。俺は街の人達の手伝いをしてくる」

「了解。戦闘前に張り切りすぎて怪我しないでよ」

「分かってるよ」

そう言っ、俺は街の人達の手伝いに走った。

「現状の戦力だと、600人の義勇軍に街の人達が400、そして賊が1500か」

数字だけで見ればその差は500。

その差に街の人達の表情は暗くなった。

「ただ、500という差はそこまで無い……ですよね」

久遠に話しかけたのは先ほど、街の人達に謝っていた女の子。今は手に持っていた帽子を被っている。

うん。その帽子はどこかで見た事あると思ってたんだよ。ようやく分かった。

その帽子はあの有名な考古学者で冒険家のあの人が被ってるのだね。

鞭を自由自在に使い、トロッコに乗ったりなんかするあの。だっ、色まで一緒だし。

テーマソングが頭の中で鳴っています。

「そうですね、賊の戦法は人数任せで正面に突っ込んでくるだけと考えられます」

「策とは言えませんが、それなら手の打ちようはある。」

「ただ、もしかしたら敵に軍師がいれば話は変わるし、それに…」

「敵の中に武に長けた者がいる可能性もある」

その言葉に暗かった街の人々の表情が更に暗くなる。

ただ、そんな中でも「やっぱり逃げよう」とかそういう事にはならないのは。

既に覚悟を決めたという事なのかもしれない。

「今回の俺達はただ、勝つっただけじゃ駄目なんだ」

今まで黙っていた俺が口を開いたので皆の視線が集まる。

「ただの勝利や痛み分けじゃ、賊は何度でもここに来る、今回の俺達は大きな戦果が必要になるはずなんだ」

またここで生活をしたいという人々の願いを叶えるには ただの勝利ではいけない。

大きな戦果を手に入れて、賊を牽制する必要がある。
完全勝利。それが今回の俺達の勝利条件だ。

「その通りです暢介、僕が言おうと思ったんだけどな」

久遠が笑いながら、その中で感心しながら言う。

「それぐらいは分かるさ、ただね。詳しい作戦は、久遠。君に任せよ」

戦術面についても俺は久遠に度々聞いてはいるのだが、まだ実践で使えるレベルじゃない。

未熟な状態で戦えば被害が大きくなってしまふ恐れがある。

まだ、俺は久遠に全権を任せるしかない。

隊列・部隊分けなどが終わり、それぞれが持ち場について行く。
久遠は伏兵部隊の指揮を取る為に俺とは離れて動く事になる。

そして俺は賊が止まる事無く向かって来る様に正面に展開される部隊に配置となった。

義勇軍の中でも上位に入る人達を周りに置いてもらってはいるけども。

かなり危険な位置になる事は間違いなかった。

それと、あの帽子を被っている子とも少し話をしたんだけど、名前を単福と名乗っていた。

……うん、誰の事だか分かりません。

今までの戦いとはまるで違う、皆を守る戦いが始まる。

4話 守る為に……（後書き）

はい、2人目のオリキャラになるんでしょうか。
単福さん登場です。

彼女の被っている帽子はスポーティーソフトと呼ばれているもので、
某考古学者であり冒険家の彼が被っているので有名ですね。

他に帽子が思いつかなかったのは内緒です。

次の話で賊戦は終わって、勧誘ターンになればいいなど。

流石に今度は更新が遅れるかもしれないです。

5話 2人目の仲間（前書き）

勧誘の仕方が分からない。

そして戦闘描写が上手くいかない；w；

経験を重ねていくうちに上手くなっていけばいいのですが

5話 2人目の仲間

賊の立場からすれば。

いつも通りの楽勝な仕事だと思っていた。

いつも通り、街を襲って物を奪う。

そして、自分の産まれた場所を守る為とかでわざわざ残った者達を殺す。

あとは、逃げ遅れた女子供を奪って売りさばく。

まあ、女の方は売らずに自分達の物にする集団もある。

ああ、流石に老人には買い手がつかないから殺しておくんだが。

現在の大陸では子供などはそれなりの額で売買がなされており、賊にとっての収入源の一つになっていた。

そんないつも通りのはずだったのに。

……なんだ、この目の前に広がる光景は。

見渡せば、死んでいるのは殆どが賊で、義勇軍や街人なんかに追いかけてまわされている。

今まで見た事も無い光景に他の賊達も恐怖からか逃げ出そうとしているのも見える。

義勇軍を率いているのは天の御遣いらしいという話は伝わっていた。

ただ、正直な所……「だからどうした？」というのが賊の中での

答えだった。

むしろ、そんな天の御遣いを殺してしまえばいいんじゃないかという話になっていた。

きつと高値で売れる物を多く持っていたり身につけているに違いないと。

彼らの中では天の御使いの存在なんてそんなものであった。

天の御使いが大陸に平穩を……それは全ての人の思いではないという事だった。

そして彼らは街に攻撃をしかけた。

攻める際に正面に見た事のない服を着た男を見て誰かが「あれが天の御使いじゃないか？」

そう言った。

彼らは攻撃対象を天の御遣いに定め、突っ込んで行ったのだが全てを跳ね返されていた。

近づく者は即座に義勇軍の兵士達に切り捨てられ、御遣いに近づく事さえできなかった。

御使いの近くにいる兵士達が義勇軍の中でも精鋭だったというのは彼らの知る由では無かった。

ただ、無意味な突撃を繰り返しては弾かれる。

もしも、賊に軍師の様な人がいれば即座に突撃を止めて下がらせるだろう。

しかし、彼らにそんな者はいない、だから走り出したら止まらない。

時間が経過するに連れて何人かは御遣いに近づけたのだが、今度は見た事も無い帽子を被った少女に止められる。

流れる様なその剣は彼女が剣に関して確かな腕を持っているという事がわかる。

ただ、御遣い自体の剣の腕もそれなりで賊相手には遅れは取っていない。

上手く行けた者もそこで終わってしまう。

やがて標的を一番弱い、街の人々に変えて行く訳だが。今度は人々の殺気に怖気づいてしまう。

彼らは自分達の街を守るという信念と同時に、賊を許さないという怒りも持っている。

街や村を捨てて行く人達は、その怒りを殺して逃げていく。残っていた人達もいるが、少数の為、その怒りが相手に伝わる事は無い。

あってもそれは弱く、簡単に消されるものであっただろう。

ただ、今回は違った。

彼らはその怒りを消す事なく、賊にぶつけている。

賊の立場からすれば、今まで襲った連中とは違うその雰囲気恐怖を感じていた。

しかも、近くには義勇軍の兵士達もいるのだからたまったものではない。

そうして前掛りになっていた賊達が逃げようと後ろ向く。そこに背後に回っていた義勇軍の別働隊が彼らめがけて突っ込んでくる。

完全な挟み撃ちに賊達は完全に浮足立ち次々と討ち取られていく。中には命乞いをする者もいたが、問答無用で斬られていた。

やがて、戦いが終結した頃には多くの賊の遺体が転がっている景色が広がっていた。

（暢介 side）

「久遠、被害の方はどうなってる？」

戦いが終わり、現在は動ける者達で遺体を処理していた。兵士達の動きは慣れたものでスムーズに動いていた。

「義勇軍の中では被害は少して亡くなった者はいません……ただ」

そういう久遠の表情は曇る。

ああ、そう言う事が……

「街の人達の被害か……」

「はい。義勇軍の人達が助けていたんですが、怪我人も多数で……」

被害0の戦いなんて存在しない。

あったとしても、それは戦力差が明らかに違いすぎる場合などだろつ。

今回の様なほぼ同じ戦力差の場合、被害は確実に出てくる。

それは分かっていたし、覚悟はしていた。

だが……

「実際に、街の人達に被害が出たと聞くと……」

「ただ、敵を圧倒しての勝利は達成されたわけなのですが……」

表情の曇ったままの俺と久遠。

勝利条件は達成し、賊は壊滅しており、狙い通りのはずなのに。
心は晴れない。

ここを割り切る……そんな事、出来る訳がないよな。

「久遠、長を呼んできてもらえないかな」

「……暢介、謝罪するつもりですね」

その言葉に頷く俺。

「申し訳ありませんでした！」

長に頼んで、今回の戦いで亡くなった者の親族、あるいは恋人などを集めてもらった。

その人達を前に俺は頭を下げた。

周りから、ざわざわと声が聞こえる。

「俺達が助力したというのに、皆さんの大切な方々を死なせてしまい……」

戦い自体は完勝と言ってもいいものだっただ。

こちらの被害は少なく、相手は大敗している。

何人かの賊は逃げだせただろうが、再結集しても戦力が整うまで時間がかかるはずだ。

ただ、死者が出てしまった事が俺に重くのしかかっていた。

これを何とかしない限り、この戦いは完全に終わった訳ではない。

「御遣い様、お顔をあげてください」

女性の声が聞こえ、俺は顔をあげた。

「戦えば死ぬかもしれない、でもあの人達はそれも覚悟の上で戦いました。それで亡くなったとしても彼らは後悔はしていないと思います」

「だけど、残された皆さんは……」

そう、死んでいった人達は死も覚悟の上で戦い、そして死んでいった。

ただ、残された彼女達はどうかだろうか。

大切な人が亡くなって、立ち直るのが簡単にはずがない。

そして、俺達は決まった勢力に属していない義勇軍。

つまりは色々な場所を転々としている存在だ。

仕官出来ればいいのだが、ここの県長は既に逃亡。
誰もいない状態なのだ。

せめて、ここが復興するまではいたいし、彼女達の心の傷を癒し。
それから次に向かおうと思っっているのだが。

「ならば、御遣い様。あなたがここを治めてはいただけませんか？」

「え？ お、俺がですか？」

その申し出は予想していなかった。

「ええ、あなたがこの地を治めて皆を導いてくだされば……私は
いずれ産まれてくる子に、あなたのお父さんはここの王と共に戦い、
皆を守ったと伝えられます」

そう言つと、女性は自分の腹を擦った。

恐らく、亡くなった彼の子を宿していたのだろう。

見れば、残された人達の腕の中には生まれたばかりの子や。

まだ小さい子が多い。

もしも、彼らが大きくなり自分の父親がどうなったかと聞いてく
る事もあるだろう。

その際に、母は胸を張つて言える。

あなたの父は皆を守る為に戦い、そして亡くなったと。

ここを治める王と共に戦ったのよと……

「久遠……」

一人で決めるものではない。

そう判断した俺は、久遠に視線を向ける。

「何をするにしても始まりがあります。暢介、ここから始めましょう」

そう言つと、兵士達も頷く。

やがて、人々から「治めてほしい」とか「前の奴よりはずつといい」などと声上がる。

街の人達からすれば、逃げようとした自分達を説得し、そして賊を殲滅し。

大切な人達を亡くして彼女達に頭を下げ、謝罪した。

今までの県長などからは考えられないその行動に彼らは信じた。

この方なら、きっと自分達を導いてくれると。

「……分かりました。よろしく願います」

暢介はそう言つて、再び頭を下げた。

荊州は南郷、この地で俺は治める者、統治者としての一步を踏み出す事になった。

く久遠sideく

「え？ 単福さんをですか？」

統治者となった暢介と共に城に入った僕。

荷物などを部屋に置き、暢介は単福さんを誘えないかと言ってきた。

「うん、何となくなんだけど。彼女、優秀だと思つてさ」

「確かに優秀だと思いますが、どうでしょう？ もしかしたら、既にどこかの勢力に仕えていて、ここへはたまたま寄つたという可能性もありますし」

恐らく、彼女は優秀な人材だと思う。

ただ、暢介は何となくと評した。

うん。これをそのまま告げたら間違いなく本人は不機嫌になりそう。

だって「何となくだけど、君つて優秀だと思うから仕えて」って事だ。

これを聞いて素直に仕えますって言う人間が珍しいと思う。

それにだ、彼女がもし、どこかの勢力の人間なら無理な引き抜きは止めておきたい。

それが理由で関係悪化で戦争になりかねない。
もっと、そうだったなら彼女の能力は本物という事になるんだけど。

「そうか……でも、どこにも仕えていないなら」

「仕えていないなら、話をしてはみますが……」

「ああ、頼むよ久遠」

「もし勧誘に失敗しても怒らないで下さいよ」

そう言つて、僕は単福さんがいる宿屋へ向かった。

その道中で、勧誘を成功させる為にどう言つてその気にさせるか文章を考えながら。

〈単福side〉

仲達さんが仕官の話を持ってきた際には私は驚いていた。

特に私自身が何かしたという実感がないからだ。

剣で何かをしたわけでもなく。

知では何もしていない。

そんな状態の自分に仕官の誘い。

「ひょつとして、既にどこかに仕えているの？」

そういう仲達さんに私は首を横に振った。

「いえ。私はまだ、どこの勢力にも仕えてはおりません」

そう、私はまだどこにも仕えてはいない。

だから、ここに仕える事は可能だ。

それにあの謝罪などを見るに彼に仕える価値はある様に思える。
上から目線になる者達と違い、彼は人々の視線まで降りる事が出来る。

「仕えていないなら、うちに仕えるというのはどうかな？」

「大変、魅力的な話しだと思います」

「なら……」

「はい、その仕官のお誘い。喜んでお受けいたします」

そういつて私は仲達さんに頭を下げた。

そうして雑談を少しした所で私は言った。

「仲達さん、私の頼みを聞いてはくれませんか？」

「ん？ 頼み？」

「はい、私は以前水鏡先生の私塾にいたのですが、そこで2人の友人がいました……」

その後の事を言うと、その2人の友人は私よりも先に仕えるべき主を探して旅に出た。

それから数日の後、私も同様の旅に出た。

「その2人がどこかの勢力に仕えているならば、どこかでぶつかるはずですよ」

「それはそうでしょうね」

「その時に私は、2人と戦い……勝ちたいと思っています」

この気持ちに嘘はない。

私は2人と一緒に過ごし、仲良しだったが、やはり負けたくないと思ってはいた。

まあ、絶対に勝てないって思いたくは無かったから。

「……その時に、力を貸してほしいって事ね。いいですよ、僕達は仲間なんだから」

「いいんですか、敵は大きな壁ですよ」

「そんな事を言われたら、余計にやる気になるよ、僕」

そう言つて、仲達さんは笑う。

私はそれを見ながら2人の友人の顔を思い出していた。

孔明ちゃん・土元ちゃん、私はずっとあなた達を支える役割を担っていた。

二人が作り出した策に穴は無いが、その策は現実的かなど。

でも、私だつていつまでの三番手にいるつもりはないよ。
天の御遣い様、そして目の前で今、笑っている仲達さん。

この3人でどこまで通用するか。

それを試したい。

だから、一緒の所に仕える事は出来ないみたい。

「あのですね、私の本名は単福では無くて……」

翌日、城に向かい天の御遣いこと、鷺島様に面会した私は偽名を使っていた事を謝罪した。

「あ、そうなんだ……それで本名は」

「はい、私は姓は徐、名は庶、字は元直、そして真名は燈と申します。私の真名を受け取っていただけますか」

「確かに受け取った。俺は姓は鷺島、名は暢介、好きに呼んでくれて構わないから」

「分かりました、鷺島様。これから先、私は鷺島様と共に歩んでまいるつもりであります」

「えっと、その真名は僕も呼んでいいのかな？」

仲達さんが尋ねてくる。

「はい、仲達さん。私の真名を受け取ってください」

「了解、確かに受け取ったよ。僕の真名は久遠、受け取って」

「はい、受け取りました久遠」

互いに真名を交換し、私達はこの地を治める事になる。
主を支え、人々を幸せに……さあ、頑張ろう。

5話 2人目の仲間（後書き）

本当はここで、燈さんにはもうちょっと苦悩をしてほしかったんですが。

書いてみたら脈絡のない文章でした・w・；

まあ、対してこっちはあっさりしすぎですね。
本来はもうちょっと葛藤とかあるべきなのに。

今回は内政メインになるかと思っています。

さあ、内政の本を探しに（ry

6話 治安って大事だよねえ（前書き）

オリキャラ紹介にしましては次のオリキャラが出たら載せようか
と思います。

ええ、こういう風に書いているという事は。
登場が近いという訳です。

6話 治安って大事だよねえ

（暢介 side）

物事を集中してやっていると、一日が早く進んでいく。

それをほぼ毎日繰り返していれば、時間の進みはとても早い。

今の俺の状態がまさにそれである。

街の統治者、県長となつてからの数ヶ月間、あつという間だった。

こつという立場になつた事のない俺からしたら何もかもが初めてだった。

兵士達の募集、城壁の修復、街の復興計画など……

だからと言って「いやあ俺、そういうの素人なんで」という訳にはいかない。

それに、俺自身もそういう言葉を言うつもりはない。

毎日が勉強という状態ながら、上手く街を立て直せてきているのは。

久遠や燈、そしてここに残っていた文官の力が大きいだろう。

その間、俺は机に向かい本を開いては勉強をしていた。

前の県長は本だけは大量に所有していたらしく、部屋の本棚は満杯だった。

それを見た燈が「ふわぁ〜」と変な声をあげたは忘れおこう。

うん、ただの本が好きなのだくと納得しておいた。

でないと、顔を真つ赤にして俺を斬り殺そうとしていた光景が思い浮かぶから……

あの時は死ぬかと思ったけど。

さて、本来は復興に向けての道筋を作るべきなのだろうが。

指示を出すべき俺が、内政とは何か？ という状態なので、現状は久遠と燈の2人に任せてしまっている。

2人には正直、悪いと思っている。

内政だけでなく、兵士達の訓練なども2人は行っている。

訓練に関しては俺もやれる事はしているのだが、新兵の体力訓練ぐらいしかできない。

陣形や武器を扱った訓練になると、兵士達よりも弱い俺では教える事が出来ない。

なので、そこから先は2人が行っている。

よって、2人は朝早くから夜遅くまで政務と軍事をどちらも対処しなくてはいけなかった。

睡眠時間も削られており、2人は時折、欠伸をしたりなどと身体面で影響が出てきていた。

やがて、優秀な文官や兵士達の中でもまとめ役の人達が出てくる様になり、2人への負担は減る様になった。

睡眠時間もそれなりに取れる様になったのか、少しずつではあったが顔色が良くなっていた。

その中で、負担が減った分なのか2人は時間を見つけては俺に勉強を教える様になった。

「暢介には早く参加してもらわないとね」

という久遠。（笑顔）

「鷺島様の努力をより良いものにするのも配下の勤めです」

という燈。（こっちも笑顔）

2人の教え方は上手く、その成果として俺は2人と政務に関しての話が出来る様になっていた。

まあ……まだ、簡単な部分っただけで、あと、陣形とかの軍事面も勉強しないと……まだまだ、勉強は山積みだな。

ああ、そういえば、どっかに流星が落ちたって噂が流れてきた。噂話で多くの人の経由があつたのか、どこに落ちたなどの情報は不明だった。

（天の御使いは俺だけじゃないって事か……）

そう思いながら、俺はその御遣いが誰に拾われたのか、気になっていた。

やがて、もう一人の天の御使いと対面する事になるのだが。それはまた別の話。

く久遠sideく

復興を進める上で、一番大切なものは何か？

そう考えた際に、僕は「安心」と答える。

いかに優秀な統治者がいても、治安が悪ければ人々はそこを離れるだろう。

喧嘩、略奪などが日常的に行われれば人々は安心して暮らせない。

そうならない為、僕は治安改善に力を入れた。

燈や文官達と話し合い、警備隊の詰所、警備経路の作成。

それらを完成させて暢介の許可を貰う。

暢介もまた、治安改善が優先事項だという認識だったので、許可は比較的楽に貰えた。

さて、机の上で作られたものは実際に行うとその通りに行く可能性は低い。

人間というのは時として、予想を遥かに超える動きをする時があるからだ。

さて、実際に警備などが始まると盗人を捕まえたとか、喧嘩の仲裁などという報告が上がってくる。

それは最初の頃は増えていたのだが、徐々に減ってきており成果は見せていた。

成果が出ている事で僕は安心していた。

これで、この街は安全という事で近くの街や村から人が移住して

くる可能性が出てきた。

人が増えればそれだけ経済面でも活発になれる。

もちろん、人が増えればそれだけ治安の悪化の原因にもなる。

だが、そうなくても大丈夫な様に話は進めているから、心配はしていない。

ただ、一点だけどうにかしないといけないなあと思っている所はあった。

それを暢介に突かれる事になったのだけだ。

〈暢介 side〉

「なあ、久遠。この警備計画って夜の警備計画が不十分だと思っただけだ」

復興計画を立てる際に久遠から出された警備計画書。

それを読み、俺はGOサインを出した訳だが。

改めて読み直すと、朝と昼に関してはしっかりと作成されていたそれに、夜の部分が殆ど書かれてなかった。

夜間警備が書かれなかった理由、その理由を俺は考えてみた。

考えられるのは人員が賃金、このどちらかだろう。

まず人員だが、不足しているならば募集をかける事で人は集まるはずだ。

移住者のおかげで人口は増えており、人には困らないはずだ。

では、賃金面か。

確かに夜の方が朝や昼と比べて高くなるだろう。

それは、俺の時代でもそうだったし。

「深夜バイトおいしい」と高校時代の友人も言っていたし

現状では俺達はそのままで裕福な状態ではない。

そこで賃金面で高い、夜の警備を削るのは致し方無いのかもしれない。

でも……

「夜に関しては、警備隊にかかる賃金の問題があつて……」

久遠の答えは賃金面での理由だった。

「そつか……」

「夜間の警備を増やす事は重要だという事は分かつてる、でも……僕らにはそこまで裕福じゃない」

裕福ではないか……ある程度の金銭があれば可能。

そして、夜の警備を行う事で人々が夜でも安心して出歩ける様に出来れば。

夜も商売をする人や商人が来る事が出来て経済面が良くなる。

そうなれば、もっと多くの人が来る事になるだろう。

そうなれば、安定して夜の警備隊の賃金が払えるはずだ……

つまり、きっかけを作る為に必要な金銭……あ……

「久遠。あるぞ……高値で売れそうな物が……」

「売れそうなもの？　鷺島様、そのような物がありましたか？」

燈が首を傾げる。

「ああ、それは……」

そこまで言った時、久遠が悲鳴をあげた。

「だ、駄目ですよ！　暢介の部屋にある本を売るおつもりでしょう、あれは売っちゃ駄目です！」

いや、久遠。

街の治安の為なら、本を売るくらい認めろよ。

それに……

「本じゃない、忘れたか。俺の部屋の右隣りの部屋に何があったか」

「……あつ」

そう、俺の部屋の右隣りには以前の県長が、買った美術品やらが置きっぱなしになっていたのだ。

調べてみると、それらは県長が税金を私的に使って購入していた物だったようだ。

どう処分するか、困った俺達はひとまず保管して置く事にした。

これらを持って逃げなかった辺り、以前の県長は命最優先だったのだろう。

選択的には間違っていないと思う、美術品とかを持って逃げてる最

中に賊に見つかれば終わりだろうから。

「あいつ、いい物持ってるみたいじゃないか」そう言って襲われていた事だろう。

それに、生き延びたとしても改めてここに来てこれらを持っていく事は出来ないだろう。

既に調べはついてるし、来たらその場で逮捕されて終わりだ。

「あれを売ろう、もしかしたら全部が偽物かもしれないけど。そうなったら俺が警備兵達に頭下げて夜に回ってもらう様に頼むよ」

「分かりました。後で商人に来てもらって見積もってもらいましょう…… ああ、何人が連れて比べてもらいましょう」

複数の商人に見積を出してもらおう。

その際に「あそこの商人は」と洩らす事で、本当に欲しい物ならば上積みをするだろう。

偽物なら、そこの商人に売るべきだという事だろう。

やる以上は少しでも高く欲しい。

そうする事でこの考えは成功に近づくのだから。

治安が復興への大きな道だ。

それがしっかりしていなければ何をやっても上手くはいかない。

夜の警備が成功すれば、次のステップへ向かう事が出来るはずだ。

上手くいくかどうかは分からない。

美術品が全品偽物で大した値がつかないならば、賃金での差がつけられずに夜の警備への志願者が増えない。

俺は、ここにはいない前県長の美術品を見る目がある事を祈った。

（燈 side）

結果を言えば、前県長の持っていた美術品は本物で高値で取引されました。

「これなら、夜間の警備編成も出来るかもしれない」

そう言つて、久遠さんは早速私と文官さん達を含めて話し合いを始めました。

話し合いが終わり、久遠さんは警備隊の人達にその旨を伝えにいました。

外は少しだけ薄暗くなつており、私は長い時間をかけて話し合っていたんだと実感しました。

そんな中、私は今、鷺島様の部屋の前に立っています。
さて……どうしよう。

私は扉の前でウロウロしながらどうしようかと考えていました。

いや、部屋の中に入った事はあるんです。

鷺島様の勉強を手伝うという事で、ただ……それは彼が部屋に入る前に声をかけたもので。

中に居る時に入った事はないので。

「……えっと、何て言って入ろう」

そんな事を考えていると……

「あれ？ 何してるの燈？」

「ひゃう！」

突然、声をかけられて私は情けない声をあげてしまいました。

声の方を見ると久遠さんが不思議そうな表情を浮かべていました。

「驚かせたなら謝るけど、それより暢介の部屋の前でどうしたの？」

「えっと……」

「用があるんだったら、こうすれば……」

そういつと久遠さんは鷺島様の部屋の扉をドンドンと叩き始めました。

あまりの展開に呆然としてしまっています。

「いないみたい……ってどうしたの燈？」

「い、今のは」

言葉の意味がわかったのか、久遠さんは「ああ」というと苦笑を浮かべた。

「そっか、燈は知らないんだっけ。これは、暢介のいた世界で部

屋に誰かいる時に確認する為の”のつく”って言うんだって」

「”のつく”ですか」

「そつ、だから燈も暢介を呼びたい時はこうやって叩けばいいから」

なるほどを頷く私は、その時、久遠さんの手に持っている物を見た。

「ああ、お風呂に行くんですか？」

久遠さんが持っていたのは洗面用具。

ここにはどういう訳か、風呂場が作られていた。恐らく、以前の県長が作らせたものなのだろう。

……美術品といい風呂場といい……前の県長は色々な物を残していますねえ。

「うん、ちょっと疲れちゃったから。あつ、そつだ燈も一緒にどうっ？」

久遠さんの申し出を断るのも悪いですよね。それに、鷺島様もないようだし……

「そうですね。では一緒に一緒に暮らしますね」

そう言って私は洗面用具を取りに部屋に戻った。

湯船に浸かり私は久遠さんの方を見た。

腰まで長い髪、どのくらいの期間伸ばしていたらあそこまで行くのだろう。

それに何というか、女性から見ても思わず見とれてしまう。

出る所は出てるし引っこむ所は引っこんでいる。

理想的な体型とはこの事を言うんだらうと私は一人で納得していた。

かく言う私は……だ、大丈夫。
で、出てる所に関しては負けていないと思う。

関係は無いが、身長に関しては友人2人と同じ私でも、ここに関しては2人に勝っている。

それが原因で一回、目の焦点のあっていない友人2人が。

「私達の……取ったんだよね……返して」

い
……
と言ってきたので、私塾内を逃げ回ったのもいい思い出です、は

「何遠い目をしてるの？」

声をかけられ、左を見ると。

湯船に浸かる久遠さんの姿が。

「いえ、ちょっと昔の事を」

何かを察してくれたのか、久遠さんはそれ以上は聞いてこなかった。

会話らしい会話も無いまま、時間だけが過ぎた。

ふと、耳を澄ますと久遠さんが何かを口ずさんでいた。

「
♪」

やがて、それが終わると久遠さんは私の視線に気づいた。

「あちゃーいつもの感じで歌ってた」

「歌ってた？」

「うん、これは暢介が持っていた”おんがくぶれいやー”っていうのに入っててね、聞いて覚えちゃったんだ」

これ歌うと、暢介も喜ぶし……そう久遠さんは笑顔で話した。
歌か……

「まだ、その”おんがくぶれいやー”というのは、聞けるんではないか？」

「どうだろ……暢介に頼んでみればいいと思うけど」

そう言つと「そろそろ上がるのか」と久遠さんが言うので私も一

緒に上がる事にしました。

部屋に戻る途中で再び、久遠さんが鷺島様の部屋の扉を”のつく”
”しましたが反応なし。

まだ、部屋に戻っていないようです。

「……どこ行っちゃったんだろ」

不安そうで、残念そうな感じの久遠さん。

私も少し残念です、もしいればその”おんがくぶれいやー”とい
うもので聞いたものを覚えるのに。

そしてそれを鷺島様と一緒に時に歌えば。

もう少し仲良くなれるだろうに……そう考えていた。

（暢介side）

俺は真っ暗な街の大通りの真ん中にいた。

誰もおらず、人々は家に帰り、外には出てはこない。

まだ辺りは暗くなっただばかりなのにだ……

目を閉じて、俺がいたあの世界の夜を思い浮かべる。

夜遅くになっても光り輝く街並み。

その明るさは日を跨いでも続き、朝日が出る頃に消えていく。
消えた後には陽の明かりが照らしてくる。

目を開けて真っ暗な街を見る。
正直、怖いと思った。

街灯の明かりがどれだけ人に安心を与えるのかを再認識していた。

再び、目を閉じる。

今度はこの場所に露店などを並べて明るい感じにしてみた。

流石に子供達がいる光景ではないが、仕事上がりの兵士や文官達、彼らが楽しく飲んだり食べたりしている光景。

それらを思い浮かべる。

目を開ければその光景は夢でしかない。

ただ、その夢に近づけるのがここを治める者のやるべき事ではないのだろうか。

「やってみせるさ……」

そう呟き、俺は城へと戻った。

城に戻り、部屋に向かった俺の目に入ったのは俺の部屋の前でウロウロしてる燈の姿だった。

何事かと聞くと、久遠から音楽プレイヤーの話を聞いたそうで。

「わ、私も聞きたいんです!」

と、大声で言うので分かったとバッグを漁った。

確認するとバッテリーはまだ持つようで安心した。

もし、電池切れなら俺は何て燈に説明すればいいのか悩んでいただろう。

そして、燈もまた久遠と同じようにイヤホンを入れる際に妙な事、知らない人が聞いたら誤解する台詞を言ったので。

またヘッドホンに変えて聞かせました。

やがて、一曲が終わると。

「珍しい経験をさせていただき、有難うございました」

と、頭を下げると部屋から出て行った。

ああ……あなたもまた、一回聞いたら全部覚えるタイプなんですね。

正直、凄いよ。

と同時に、今度2人にデュエット曲でも聞かせて見ようかと思っ
てしまう俺なのであった。

6話 治安って大事だよねえ（後書き）

街灯の有難味は本当に知って分かるものです。

筆者の場合は父親の実家の周辺が真っ暗で、自販機の明かりが頼もしく見えました。

その自販機が故障していた時にはまさに暗闇で、子供ながらにトイレに行けずに困っていました。

さて、次回ですが。

幕間を挟むか、黄色い賊さん達との戦いになるか。

まあ、戦いになれば次のオリキャラ登場になるかと思いますが。

7話 新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人（前書き）

さて、3人目の登場となります。

今回の様な事をしたら、現実なら絶対に出来ないだろうなあ。
絶対処罰されるだろうし。

まあ、そこはご都合主義という事になるのでしょうか。

7話 新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人

〈暢介side〉

ここ最近になって、賊にも多少の変化が出てきた。

今までは特に服装などに統一感があったわけではないのだが、最近来ているのは頭に黄色い布を巻いた賊が出現している。

今までの賊とは違い、突然襲ってくるという特徴があり。

こっちとしてはいつ来るのかという予測が立てられない時がある。

ただし、強さに関して言えば一般の賊と変わらないので。

戦闘に入ってしまったえばそのまま撃破されている訳だが。

どこにそんな戦力があるんだと言わんばかりに頻繁に出てくる。そのせいで、兵士達の疲労はたまり、人々も外に出るのを躊躇してしまう。

結果として多少の街の発展が遅れてしまう。

そして、困るのがこの賊の始末である。

殺してしまえばいいのか、そのまま追放するのか。

扱いに大変困ってしまう。

放した所で、また賊になって来られても困る訳だし。

だからと言って殺すというのもこちらとしては取りたくはない手段だ。

相手の戦意を削ぐという意味合いでは処刑もやむなしなのだろうけども。

どうやら、彼らにそれは通用する感じがしない。

まあ、彼らの本拠地は俺達の場所からは離れている為か、大軍で来るという事は少ない。

ただ……少数で何度も来るので……

「ふう……」

朝議の際に、久遠と燈のため息を何度も聞いている。

復興の際には文官達の働きで、仕事が楽になったので休めていたのだが。

この賊の攻撃の頻繁さに2人は兵を統率する役割も果たしているので出陣している。

もちろん俺も出ているのだが、2人はそれにプラスして内政も見なくてはいけない。

この言い方だと、俺は内政してない様に思われそうなので、しているという事は言っておくよ。

結果として、2人は再びロクに寝れない状態が続いている。

最近では久遠が風呂場で眠ってしまい、溺死しかかったらしい。

さすがに、これ以上2人に負担をかけるのは不味いので文官・武官の募集。

また、将として採用出来る様な人を探していたわけだが。

俺は大事な事を忘れていた。

その採用を担当するのも2人で、負担が増す事を。
流石に助けますよ……ええ。

結果として言えば、文官として採用された者もいるし。

武官というか兵士として採用された者もいる。

ただ……将としての採用者は一人もいないという状態だった。

要するに、今までも何も変わらない状態が続きそうだという事だ。
内政の手は増えるので文官達に出す指示の量が増え、兵士達が増えるのでその編成の時間も取られる。

はっきり言えば、2人には休みがない状態な訳だ。

流石に俺の時代みたいに日曜は休みって事は出来ない訳で。

ただ、どこかで2人にはしっかりと休みを取ってほしいのだが……

「2人とも、大丈夫か？」

と聞けば、即座に。

「大丈夫です」

と返してくる。

顔色はかなり悪い状態なのだが。

そついう状態なので、疲れを取るにはお風呂だよね。

と思っていたのだが、そこで久遠が沈んで死にかけるという事を

やってしまっ。

俺に出来る事と言えば、その事で顔を真っ赤にしている久遠に
対して。

「今度から入る時は、燈なり他の文官を誘ってくれ」

ようするに一人で入るなと指示を出す事ぐらいだった。

俺はなんだ、久遠のお父さんかなんか？

久遠 side

ああ……思い出すだけで恥ずかしい。

まさか、お風呂に入ってて死にけるなんて。

燈が入って来なかったら本当に危なかった……こんなので死んじ
やったら一族の恥だよ。

しかし、ここ最近は復興を始めた頃以上に忙しくなっている。

最初の賊殲滅の噂も消え始めており、賊が再び出てきてみたり。

その賊達とは違う、黄色い布を巻いた賊もたまに出てきている。
どっちも戦いになれば、倒せているので気にはしていないんだけ
ど。

なにしろ、数が多すぎるのは問題なんだよねえ……

数が多く、頻繁に発生する。

そのせいで兵士達の疲労も増すし、被害も出てくる。

今の所は深刻な問題まではいつてはいないのだけれど。

それよりも、今の自分への仕事量の多さは一体何なのだろうか。

見れば、住民達からの意見書や文官達からの報告書。

部隊長などからの訓練の報告など……

同じような感じで燈にも回っている事だろう。

住民などからの意見書は暢介が「住民から意見を取ってみると、優先すべきものが分かるかも」

という事で意見箱を設置してみた訳で。

確かに、意見書の中には、なるほど、と感心するものもあったし、実際に実行した事もあった。

だが、同時に名前を書かないという事で意味が分からないものや、どう見ても自分の利益にしかないような事を書いてる者もいた。

ただ、全てを一応見ておくので量が多い。

勿論、暢介や燈、文官達にも分けているのだが……

「多すぎるよお……」

恐らくだが、住民の中に10以上の意見書を入れてる人がいると思われる。

だって……多すぎだもん。

そう思い、僕は髪に手をやった。
……ぼさぼさだ。

ここ最近の忙しさで、ろくに髪の手入れをしていなかった事を思い出した。

仕事が終わって、お風呂入って、その後には寝るって流れが固定して来てるからなあ。

この状態で朝議とか出てる事に最初は恥ずかしさもあつただけど。

別に暢介が特に何か言ってくる訳でもなかったので気にしなくなっていた。

それに、燈もぼさぼさだったし。

暢介の反応の無さにちょっと寂しくもあつた訳だけど。

そして、人材に関しても募集はしたが、将に取り立てられる者は、いなかった。

やっぱり、優秀な人材は既にどこかの勢力に所属しているのだろうか。

今回来た人達も優秀ではあつただけども……将として考えると足りない感じがしていた。

高望みなのだろうか、いや、人材に関しては妥協してはいけな点だと思う。

人材は大切な宝だ、それを考えれば厳しく見るべきなのだから。

その時、扉が”のつく”された。

「久遠さん、私ですが」

声の主は燈だった。

僕は扉を開ける為に席を立った。

「ん？ どうしたの燈」

扉を開けると多少疲れた表情をした燈がそこにいた。

ああ、確か燈も今は書類作業中だったね。

「えつとですね。実は仕官したいという方が来まして」

「え？ 仕官希望者？」

それは珍しい事だ。

こちらから募集をかける事はあっても、自ら仕官しに来る人はいなかった。

嬉しい限りだ。

聞けば、既に暢介と会っているそうで、玉座の所にいるようだ。
僕は部屋を出ると燈と共にその人物の元へ向かった。

＼？ side ＼

時間は少しだけ遡る。

「へえ、いい感じに治められてる街じゃない。警備隊の配置も理
想的だし」

私はそう言いながら辺りを見回す。

人々の笑顔は決して作られた笑顔じゃなく自然なものだ。

信じられないかもしれないが、街によつては県長などが他人の目を気にするあまり。

「常に笑顔でいろ！」なんてふざけた決まりを作っているらしい。

まあ、そういう時の笑顔はあくまで作られたものだから、違和感があつてしょうがないんだろうけど。

「夜も商店が出てて、活気があるつても聞いたけど……まだ早
いよねえ」

以前、陽は出ており暗くなるまでまだそれなりに時間がかかりそ
うだ。

「うん。早く天の御遣いとやらに会つて、どんな人物が見てみよ
うかな」

そう考え私は、城の方へ向かった。

その道中、ちよつと前の会話を思い出していた。

「お、お前……今、なんつった？」

おお、私の上司様……すごい間抜け面してますよ。

ここは上司様の部屋。

「ですから、思う所がありここから出て行こうかと」

「いやいや、お前な……そんな簡単に辞めれる立場の人間じゃないだろ」

「……その職も辞して」

「簡単に辞めれる職じゃねえだろ」

そういつと彼はため息をついた。

ここ最近は黄色い布を巻いた賊との戦いが続いており疲れているのだろ。

いつもの能天気さが見られない。

「本当に申し訳ないと思っています」

「その表情は嘘ついてる顔じゃないな……ふう……」

そういつと彼は苦笑を浮かべて言った。

「……認めるよ、説得しても聞かないからな、お前は」

「ありがとうございます」

そういつと私は彼に背を向けて、部屋を出て行くとした。
出ていく以上は早く出るべきだろう。
と、その時。

「ちょっと待て……一ついいか」

「何でしょうか？」

彼の言葉に私は歩を止めて、彼の方を見る。

先ほどのまでの苦笑ではなく真剣な表情だった。

「誰に仕えるつもりで行くんだ？」

「……」

「お前が、この職を捨ててまでどこに行くのか……実家に帰って子供達に勉強でも教えるわけじゃないだろ」

私は無言のまま、彼を見る。

こっという真剣さがいつも出てくれればいいのにと、思った。

「誰かの元で、その知を使いたいんだろ。教えてくれ、誰なんだ」

「……天の御使いの噂はご存知ですか」

「天の御遣い？……ああ、2人いるって話のか」

「はい。私はその内の1人、南郷にいる御遣いを見てみたいと思っ
つています」

「ああ、賊を殲滅し人々を救い、街を見事に復興させた話だった
か」

私は頷く。

御使いの噂が良く流れており、その殆どは南郷にいる御使いの話である。

恐らく、配下の誰かが意図的に流しているのだろっ。

「その通りです。その噂に大変興味を持って、噂が本当なら仕官したいと思っています」

「ああ……お前は興味を持つと、実際に見てこないと納得しないもんな」

よく知ってるよ、と彼は言った。

そうだ、私はその噂や興味深い話を聞くと自分の目で見なければ納得はしない。

例え、どれだけ素晴らしかったと話を聞いてもだ。

「それでは、今度こそ失礼させていただきます」

そう頭を下げて部屋から出ようとすると……

「おいちょっと待て、最後の別れぐらい、いつもどおりでいこうや。そんな固い奴じゃないだろお前は」

「……」

「こんな形で分かれるなんて嫌だぞ、さっきから身体が痒くてしょうがねえんだよ」

彼は笑顔でそう言っている。

やれやれ……

「はいはい、最後ぐらい固い感じで終わリたかったのになあ」

「んな事させるかよ」

「ちえっ」

「ったく、御遣いの所で迷惑かけるなよ」

「その言い方だと、まるでお父さんみたいだねえ」

「ふん、年齢的にはそんな感じだぞ」

「そうですね。……ああ、私の真名は預けておきますね」

「そうか、大切に預かっておくよ」

別れが近い。

私は彼に笑顔で言った。

「では、行ってきます……今までありがとうございました……何進様」

「おう、行つて来い氷花」

その声を聞いて私は部屋を出て行った。

門の所に兵士が立っている。

彼に頼んで御遣いの所まで行こう。

「すいません、御遣い様にお会いしたいのですが」

そう言われた兵士は慣れた感じで聞いてくる。

「ご用件は何でしょうか？」

その言葉に私はこう返す。

「仕官をしたいので取り次いでいただだけませんか？」

その答えは予想してなかったのか、兵士の表情は驚きになった。

〈暢介side〉

目の前に居る仕官希望者。

入ってきた時は猫耳頭巾を被っていたが俺の目の前に立つとそれを取った。

頭巾に隠れていた髪は真っ赤で長さは短め。

耳が気になるか何度も髪を触って耳が見えない様にしている。

……何かあるのか？

「す、すいません、遅れまし……うわぁ！」

そう思っている時に、久遠と燈が転がる様に部屋に入ってきた。
っていつか、実際に転んだしな。

その2人を見て、クスツと彼女は笑った。

急いで2人は俺の横に立つ。

おい久遠、燈、息が上がってるぞ。

疲労が溜まってる状態で走ったらそれは辛いだろ。

「こっちは全員揃ったよ。とりあえず、自己紹介からお願いできるかな?」

そう言うのと、彼女は頷き、言った。

「はい、私、姓は荀、名は攸、字は公達と申します。この度は面会させていただきありがとうございます」

そう言うて、彼女は頭を下げた。

その名前を聞いて久遠が少し考える様な仕草を見せる。

「えっと、荀攸さんは、どうしてうちに仕官を希望されたんですか?」

おい、俺のこの質問……就職試験の王道の1問目じゃないか。

「わが社を志望した理由」……思い出したくねえ。

「はい、それは……」

そこまで荀攸さんが言いかけた瞬間。

「あー!」

何かを思い出したのか久遠が突然、大声を上げて荀攸さんを指さした。

おい久遠、指さすな失礼だぞ。

「だ、だって暢介、荀攸って言えば何進大將軍の右腕と言われた人物ですよ」

「だ、大將軍の右腕……」

そう言われて俺は荀攸さんの方を見る。

荀攸さんは、発言を途中で止められたはずなのに、にこやかなままだ。

「えつと……荀攸さん、彼女の言った事は……」

「はい。確かに私はここに行く以前は何進様にお仕えしておりました」

「……」

右腕なんて恐れ多いと言う荀攸さんの言葉が遠くに聞こえる。

ふと、久遠の方を見ると顔が真っ青だ。

燈も同様の顔色になっている。

おいおい、大將軍の右腕がここに仕官しに来るってどんな冗談だよ。

それに、この事を大將軍は知ってるのか？

知らなかったら大変だぞ……俺、流石にそういう人を敵に回したくはないぞ。

「ああ、大丈夫ですよ。彼には全てを話し、理解してもらって去っていますので」

荀攸さんのその一言で俺達は少しだけ楽になった。

ああ、良かった……

「では、改めて理由の方を話してもよろしいでしょうか？」

「は、はい」

「何進様の所に居た際に、何度も御遣い様の噂を耳にしておりました。復興、賊殲滅など……言えばキリが無いくらいに」

「そ、そんなに……」

そう言いながら俺は久遠を見る。

あ、久遠の奴、視線を逸らしやがった。

お前、色々と噂流してるって燈が言ってたからな、ある事ない事話してるんじゃないよな。

「はい。それほどの人物とはどのような人なのか大変興味を持ち、今回こちらに来たのです」

そして、荀攸さんは一呼吸を入れて再び口を開いた。

「この街の人々の笑顔……素晴らしいものでした。人々に、ここまで安心を与えられる主君ならば私も仕えたいと思い、ここに来ました」

「その感じだと、もし俺が噂通りの人間じゃ無かったらここには来なかったって事だね」

「勿論。もし噂が偽りなら、街を出て実家に帰っていたと思いま

す」

「そ、そうだったんだ……」

変な噂とか流れてなくて良かった。

復興や賊殲滅に関しては、自信を持ってやってますって言えるかなあ。

もし、聞いた事も無い様な話を言われたらどうしようかと思ったよ。

「ですので、お願いいたします御遣い様」

荀攸さんは片膝を折り頭を下げ言った。

「この荀公達を、ぜひとも貴方様の配下にお加え下さい。必ずお役に立って見せましょう」

「えっと……荀攸さん、とりあえず顔を上げてください」

そう言つと荀攸さんは顔を上げる。

その表情は真剣そのものだ。

「仕官についてはこちらからお願いしたいぐらいです。これからよろしく願いますね」

そう言われた荀攸さんの表情は笑顔に変わった。

「はい、御遣い様の為、私の力を全て捧げます。その始まりとして私の真名を受け取って頂けますか？」

その言葉に俺は頷く。

「ありがとうございます。私は姓を荀、名を攸、字を公達、真名ひょうかを氷花と申します」

「ああ、君の真名を受け取るよ。氷花、俺の事は好きに呼んでもらって構わないから」

そう言った瞬間、氷花の表情が困惑に変わる。
ん？ 俺、変な事言ったか？

「えっと……どうしたの氷花？」

「あの、私……御遣い様の名前を知らないのですが」

「へ？」

「噂に聞くのは御遣い様の事なのですが、名前等が全然出てこなくて……」

その言葉を聞いた俺は久遠を見る。
だから、視線を逸らすな、口笛を吹くな。

「お前は、何を広めたんだ」

「えっと……御遣い様の事を中心に……名前は言ってなかったかも……」

「……」

その答えに俺は頭を抱えた。

つまりあれか、今の俺は「南郷にいる天の御遣い」って認知で「鷺島暢介」の認知は限りなく0ですか。

なんてこった…

「氷花、俺の姓は鷺島、名は暢介、字はないんだ。好きに呼んでくれて構わないから」

そう、立ちあがっていた氷花に告げた。

まあ、呼び名なんて「鷺島」とか「鷺島様」とか「暢介」とか「暢介君」ぐらいだろう。

ただ、その時に気づけばよかった。

氷花の周りの空気が変わっていた事に、真面目な空気が薄れて来ていた事に。

「それじゃあ……暢ちゃんて」

「……はい？」「」

見事にハモツタよ、俺達3人仲好いな。

いや、そういう事じゃなくて。

「ちよつと待ってよ、暢ちゃんって！」

久遠が怒った様な感じで言う。

いや、俺と燈は、まだ驚きから回復できていない。

「ええーだって、好きに呼んでくれて構わないって言うてくれたから呼んだんだけどなあ」

氷花の表情がついさつきまでとは違い、何とか悪戯大好きって感じの表情に変わっている。

あれ……これが本来の氷花なのかな？

「う……」

俺自身が好きに呼んでいいと言った以上、呼び方で文句は言えない。

それに、暢ちゃんって呼ばれた経験あるし。

親戚のおばさんとかに……

「まあ、その呼ばれ方は慣れてるからいいよ。それより、2人も彼女を配下としていいかい？」

そう2人に告げると、先ほどの驚きから回復した燈が俺の方を向いて言った。

「鷺島様がお決めた事ですので、私はそれに従うまでです」

次いで、久遠も視線を氷花から俺の方へ移して言った。

「僕も構わないよ……名前の呼び方はどうであれ、彼女は優秀だし、断る理由はないよ」

そう言って、2人は氷花の元へ行くと互いに自己紹介を始めた。もちろん、真名も互いに交換し終わると俺の方を向いた。

「暢介、早速ですが氷花に、この街の現状等を説明してきます」

「ああ、頼む。俺は新兵の体力訓練に行ってくるよ」

そう言って、俺達は部屋を出てそれぞれの場所へ分かれていった。

その後の事だが。

仕事に関して氷花の実力は予想通り高く、2人は仕事量が減った事に素直に喜んでいた。

仕事中の氷花は真面目なのだが……仕事が終わると久遠や燈をからかっていた。

まあ、その対象は久遠が9割なんだけども。

久遠は別の意味で、疲れが増す事になったようだ。

7話 新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人（後書き）

さて、3人目の氷花さん、彼女は桂花の年上の姪にあたる人ですね。どこかで絡ませたいのですが……連合軍辺りになるでしょうか。

連合軍までに後2人のオリキャラを入れて、ひと段落です。

この2名は武官なので予想はしやすいかもしれませんが。

特に1名はオリキャラアリだと、ほぼ高確率で書かれているキャラです。

次は、拠点フェイズか先に進むか。

他の筆者様の作品を見ていると、どうしても拠点を書いてみたいと思ってしまう。

また、オリキャラ紹介も載せたいと思っています。

明日は休みか……（・w・）くどうみてもフラグですね

8話 欲しい人材は予め絞っておきましょう（前書き）

はい、凄く短いです。

ごめんなさい。

もっと長く書こうとしたんですが……ネタが・w・；

8話 欲しい人材は予め絞っておきましょう

（暢介 side）

氷花が入った事で、久遠と燈の仕事量は確実に減った。

それによって2人の睡眠時間は少しずつ戻り始めた。

髪を手入れする時間が取れた様で、ボサボサだった髪は今ではサラサラになってるようだ。

まあ、気づいてはいたけども女性に髪のことを言うのはどうかも思ってたと言わなかった訳だ。

氷花は仕事中は真面目で久遠や燈を相手に改善点などを話し合っている。

今までは中心に居たのは久遠だったのだが、今では氷花が中心に居る。

やはり、経験者がいるだけで周りが変わるんだなと俺は思った。確かに久遠も燈も知識はあったが、実際の経験は今回が初めてのもの。

そこに経験者が来てくれれば2人にはとても心強いだろう。

あれだ、ベテラン選手が若手を指導するって感じなんだろう。

……まあ、ベテランと言っても氷花はまだ20代なんだけども。

俺より年上だし。

ところが、そんな氷花だが仕事が終われば今までの姿が嘘の様な感じになる。

単純に悪戯好きな子供の様になる。

まあ悪戯つてのも殆どがスキンシップのいきすぎという分類に入るやつだと思う。

例えば、久遠の背後から胸を触ったり……触ったり……あれ？
それしか出てこない……

つまりはそういう訳だ。

その後は顔を真っ赤にした久遠に拳骨を喰らう。

それを見ながら燈が「ふわ〜」とこちらを顔を赤くする。

そして、俺がため息をつく、この光景は既に見慣れたものだ。

だから、今でも……

ここは朝議などを済ませる場所。

机と椅子が用意されており、それぞれが座ってから朝議が開始されるわけだが。

そこには顔を真っ赤にして席に座る久遠、席に着いている燈、ただ顔は赤い。

そして拳骨を喰らって地面に伸びている氷花。
ため息をつく俺。

いつもの日常です、今日も平和だ。

今回は久遠が入ってきた際に。

「おはよゝ、久遠ちゃん」

と、先に来ていた氷花が素早く久遠の背後に回り、胸を触った。
その後、拳骨を喰らって地面に伸びている。

「全く……氷花は油断も隙もない」

と、久遠は真つ赤にしたまましゃべる。
燈は「ふわ〜」と声をあげていた。

パンパンと俺は手を叩き、皆の注目を集める。

「さあ、朝議をしよう。氷花、起きろ」

そう言われて氷花は起き上がり、席に着いた。
その表情は真面目で、どうやらスイッチが入ったようだ。

その表情を見て、久遠と燈も表情を引き締める。

「さて、氷花が入った事で内政に関しては楽になったと思うんだ
けど、將軍職に関してはまだ不在だ」

將軍職の不在。

それが今の俺達が置かれている状態だ。

現在の賊との戦いは久遠や燈が兵を率いているが、それは賊が相手だから出来る事だ。

これがもし、別の王との戦いになれば前線で戦える将が必要となってくる。

王じゃなくても、賊で武に長けた人間が出てくる可能性もある。

「それで、近く武官の募集をかけようと思うんだけど、どのような人材を求めるかを決めておきたいんだ」

今回の議論はそこだ。

武官で武力があれば誰でもいいという訳じゃない。
条件をあらかじめ決めておいてそれを基準とした方がいい。

「条件としては、武があるのは勿論ですが……ある程度の知も欲しい所ですね」

そう発言したのは燈。

敵の策などを見破るには武官の方にもある程度の知は必要となってくるだろう。

「確かにその2つを兼ね備えた人材が必要でしょうね」

氷花も同意する。

あとは久遠なんだけど……

「僕も燈の意見に賛成だよ。相手の挑発などにあっさりかかる様なのは不要だからね」

瞬間湯沸かし器の様なやつはいらないって事か。

確かに、すぐに挑発に乗って突撃なんてされたら兵士達の命も危ないからなあ

ふと、頭の中でどんな人材が欲しいのか考えてみる。

もちろん、戦場とかそういうのを想像するのは難しいから、俺のやってきたアレに置き換える。

そう、サッカーに。

現状のうちには司令塔が3人も存在している。

ただ、その先にいるはずのストライカーが存在していない状態だ。

攻撃の中心、つまりは戦場において武によって仲間を鼓舞する役割を果たす人物だ。

司令塔の3人にも得点力はあるが、やはりそのポジションには敵わない。

そこを獲得した場合、次に必要なのは何だろうか。
補佐役だ。

いかに攻撃に長けたストライカーを手に入れても、相手チームの作戦次第では完全消される。

それは戦場において、策略によって無力化されてしまうという事だ。

それを防ぐには、もう1人の選手が必要になってくる。

それは周囲の目を自分に向ける様に動き、ストライカーの仕事をしやすい様にする。

もちろん、自分自身もゴールを狙える様に攻撃力が必要になって

くる。

つまり、武と知のバランスがもつとも取れた人間でなくてはいけない。

バランスの取れた人間、何でもこなせる人間にそれを任せる。

俺は、3人に考えていた事を伝えた。

勿論、サッカーの部分は抜いておいた。

言ってもこの時代にサッカーは無いし……

「なるほど、敵と戦う将とそれを補佐する役割の将……」

氷花が考え込む。

「敵と戦う将はいるかもしれませんが、補佐する役割は……」

「そういう人材だと……もう、どこかの勢力に仕えているんじゃないかな」

燈と久遠はそう言った。

確かに、この条件は厳しいのかもしれない。
でも、妥協する訳にはいかない様に思える。

「……いいえ、見つけられるかもしれません」

氷花の声に俺達は氷花を見た。

「暢ちゃんが求める、人材、確かに高い能力の人ならばどこかに

仕官している可能性は高いでしょう」

ただし、そう氷花は付け加えた。

「他の人から見れば特徴が無いという評価を下された人はまだ、在野にいるかと思います」

「特徴がない？」

「はい、これと言って何かがある訳でもない人。そういう人の中に私達が望む人材はいるかもしれません」

「でも、特徴が無いというのは……」

「特徴が無い、確かに優れたものが無いという判断もありますが、その中には別の意味もあるかと思っています」

別の意味か……

「長所が無い、それは纏まった能力のせいで抜けたものが無いという判断もできます」

「抜けたものは無いけれど、高い所で纏まっているって事か」

「はい。まあ、試験官の目が良ければ見抜かれますが……賭けてみましょう」

次の募集に、実際にそういう人物が現れるのか。
現れてくれればいいが、そう俺は思った。

そして、実際に試験後に、その人材を手に入れる事になったわけだが。

それは次に語ろうか。

8話 欲しい人材は予め絞っておきましょう（後書き）

特徴が無いのが特徴です。

そういう人ってたまにいますよね。

私も、昔ある試験官にそう言われたことがありました。

それって褒め言葉なのでしょうか？

それとも、バカにされてたのでしょうか。

まあ、いいんですが・w・；

次回は残り2名の登用になります。

9話 思った事が叶う事って結構あるよね（前書き）

さて、残り2名の登場ですが。

1人は既にオリキャラ登場物では王道キャラの様な気がします。

そしてもう1名は……大丈夫ですよ。

知名度ありますよね……友人に「誰？」って言われて焦ってるんですが・w・；

9話 思った事が叶う事って結構あるよね

（?side）

「これが……御遣い様の治める街か」

目の前に広がる光景に私はただ、驚いた。

多くの店が賑わっており、その種類は食事処に留まらず。服飾や装飾などといった雑貨にまで揃っていた。

何より私の目を引いたのはその人の多さだ。

多くの人が食品や雑貨などを見て回っており、その表情は明るい。

それに、これだけの人の多さなら治安の問題が出てくるはずだが、良く見れば。

警備兵と思われる人がしっかりと見回っている。

恐らく、ここだけじゃなく満遍なく配置されているのだろう。

（やはり、噂は本当だったのか）

私は、実家に戻っていた際に人々が言っていた噂を思い出ししていた。

曰く、南郷にいる天の御使いは街の復興を成功させたいらしい。
また、優秀な部下達を使い、街を以前以上に豊かにさせたという。
そこは治安は良く、多く商人が商売をしにやってくる。
夜も明かりが照らされ、人がいなくなる事はない。

噂は流れていくと途中で色々と付け加えられてしまうものだ。
私も、この噂で本当の部分は半分……そう思っていた。

人々が集まれば治安の問題が大きくなっていく。
元々いた人達と新しく住む人達の間で争いが起こる事は多い。
それを上手く治めるのは並大抵の事ではない。
夜に関しても、治安が悪くなりやすいのは夜で街によっては人っ
子一人出てこない所もある。

とは言うものの、その答えは実際に見なければわからないもので。
……確かめに行きたいなあ……と私は思っていた。

ちよつと前まで役人だった私は、同僚の不正、民への暴力などを
見て。

「こんな所にいられるか！」とさつさと、職を捨てて帰ってきた
わけだ。

ようするに今は何の職にも就いていない。
時間はある、南郷まで行って見て、帰ってくる時間さえも。

そう思った私は、両親に南郷に向かう事を伝えた。

「南郷にいる天の御使いが治める街を見に行つてこようと思いま

す」と。

そう告げると、両親は「行つてきなさい」と言ってくれた。

その言葉に頷いた私は旅の準備を終えて、さあ行こうかとなった所でどこで聞いてきたのか、付き合ひの長い友人が家に来て私を外へ連れ出した。

本当に……どこで聞いてきたのやら。

「おい！ 天の御使いの所に行くつて本気か？」

「う、うん」

友人の剣幕に少しうろたえる私。

それに、顔が近いよ……ちょっと離れてよ。

「はあ……時々だけど、お前の行動力つて凄いよな。俺には真似出来ね」

「そうかな？ 思い立ったらすぐに行くべきだと思っただけど」

「早過ぎるだろ！ もうちょっと情報とか手に入れてから行つても損は無いと思っけどな」

そう言われ、ちよつと考える。

確かに御遣いの情報は少ない、名前も知らないし。

ただ、変に情報を手に入れるのも良くないだろうから、真っ白な

状態で行った方が良かったりする。

そう思っていた私は急いで行こうと思っていた。

まあ、時間はあるし……あんまり言いたくないけど。

「それにさ、俺もお前も推挙されるかもしれないんだぞ。わざわざ南郷まで行かなくても」

そう私と友人は、劉曄様に「君達が良ければ、曹操様に推挙したいのだが」と言われていた。

これは名誉な事ですぐにでも受けるべきものなのだろうが。

私は「少し時間がほしい」と告げた。

それを聞いた友人は「お前、何言ってるんだよ」と驚きの表情をしていたのだが。

劉曄様は「構わない。自分の主を決める事、即決するものではない」と言ってくれました。

ちなみに友人は即決しようとしていたらしいけど。

「こんな機会は、二度と無いと思うぜ」

「うん、二度と無いと思う」

友人の言葉に私は頷く。

そもそも推挙されるなんてそんな話は絶対に無いだろう。

「だろ。だったら、曹操の所に行った方が絶対にいいはずだぜ」

確かに、曹操という人物は素晴らしい人物だという話は聞いてい

る。

素晴らしい統率力、そして内政に関しても高い能力を発揮する。
民の事を考えるその姿勢。

その姿を慕い、多くの者が集うと聞く。

そういう所に行けるのは名誉な事だと思う。

だが……

「私は、平凡だから……」

そう言った。

私には何か特化しているものがあるか、そう問われると答える事が出来ない。

優れた武も知も持っていない。

全てが「それなり」という形だ。

聞けば曹操は優秀な人材を求めているという。

そんな所に平凡な私が行っても、意味が無い様な気がする。

それどころか、推挙してくれた劉曄様の評価も落ししかねない。

「おいおい、まだ言ってたのか？ お前は全てが優秀なんだよ」

その話になると、友人はいつもこう返してくる。

「お前が平凡なら、俺とかどうするんだよ？ 頭よくねえし」

「でも、楓……あなたには弓がある。それは立派な能力だよ」

友人、楓の弓の技術は確かだ。

その弓の精度は高く、森に逃げ込んだ賊や動物を仕留められるほどに。

「弓だけさ……お前の様に何でもこなせない」

「でも、個性があるっていい事だよ。私にはそれも無いから」

苦笑を浮かべる私。

自分の事とは言え、個性が無いのがとても辛い。

思えば、子供の頃から私は何でも「それなり」に出来ていた。

ただ、「それなり」なので、どうしてもそれ以上の人が出てくる。そうなれば私は存在感をなくしてしまう。

もう慣れてしまったけど……

「だからといって、どうして御使いの元へ行くって話になるんだ？」

「それなんだけど……」

私は楓に御使いの元へ行くその意味を話した。

最初の通り、噂話を確認したいという事に偽りは無い。

でも、噂通りの人物ならそれは仕えるに値するのではないだろうか。

「まあ……私の様な人を配下にしてくれるかどうか、疑問だけだね」

そう最後を締めた。

我ながら……どれだけ後ろ向きなんだろうか。

「俺は、お前と一緒に曹操軍に行くもんだと思ってたけど、お前にはお前なりの考えがあつたんだよな」

「楓……」

「何も考えないで行こうとしてるんだつたら、首根っこ捕まえて止めてたけどな」

「さ、流石にそれは……」

「まあ、幼馴染の俺から言える事は……とりあえずその後ろ向きな考えはやめとけ」

私は頷く。

「あと、自分は大した事が無いってその思考を止める。お前は凄
い奴なんだからな、俺が言っただから絶対だ」

「……」

「今度会う時は、敵かもしれんし、同盟結んで仲間かもしれん……
まあ、お前なら割り切ってくれそうだけどな」

逆に俺の方が色々考えそうだ。

そう楓は言った。

「だから、今度会った時……味方だったら、俺が曹操軍の兵士達
に自慢できる様な將軍になっててくれよ」

「あそこにいる満龍將軍は俺の幼馴染だったんだってな」

「將軍か……」

「行けるさ。お前なら絶対にな」

止めるはずが、いつの間にか送り出そうとしている事に楓は気付いているのだろうか。

その後、普段通りの会話をし、私達は別れた。
家に戻った私は、劉曄様に仕官の件の断りの手紙を書いた。

これで私は曹操の元へ仕える機会を無くした。
でも、後悔はしていない。

翌日、楓に手紙を預けて私は村を出た。
目指すは南郷にいる御遣いの城へと……

（で、遠かったから商人の人の牛車に乗せてもらった訳だけど）
ついてみれば、噂通りで街が賑わっており人々の笑顔も自然なものだ。

そして、街の人から聞いたのは……

曰く、人材が不足しているそうで、特に武官を求めているらしい。
そして、その試験が今日行われるという。

それを聞いた私は、すぐに試験の申し込みの為に城へと向かった。

城に着いて申込みを済ませると、広場に通された。そこには同じように申し込んだ人達があり、準備運動などを行っていた。

それを見た私も、同様に準備運動を始める。その際にある人物の所で視線が止まった。

腰まである長い髪、その色は青で凄く綺麗だった。私もそれなりに長いんだけどそこまではない。

背は高く、体型も出てる所は出るといった所かな。私？……それなりにですよ、ええ、体型も身長もそれなりですよ。

なんか、泣けてきた。

ふと視線が彼女の持っている武器に移る。

大斧、それが彼女の持っている武器であった。あれほどの大きさをきつと、軽々と使いこなすのだろう。それに、あの人は強いというのが初対面なのに分かる。

ちなみに、私が使っているのは剣。

この扱いもそれなりで、何ともいえない。

やがて、試験官が来て今回の試験内容が発表される。

試験内容は、まずは弓の扱いから。

これに関しては、楓から教えてもらっていた経験がいい方向に向かいそうだ。

次は模擬戦、1対1で戦い、負けたらそこで終了となる。これは……誰と当たるかで変わりそうだから運なのかな。間違っても、あの人は戦いたくない。

その後は、筆記があり終了。

うん、模擬戦を通れば何とかいけるかもしれない。頑張ろう。

私はそう、胸に誓った。

結果的に言えば、私は残れた。

弓の扱いは楓の教えを守った結果、的の中心を射抜く事が出来た。次の模擬戦もあの大斧の女性と当たる事なく進み、残れた。筆記だけど、これは一番自信があつた。

うん、武官募集の試験で筆記が一番好成績ってどうなんだろうって思いました。

だけど、そういう人がいてもいいと思うんです。

結果発表は翌日と言う事で用意された部屋で待つ私。同部屋になったのは、あの大斧の女性だった。

あの人の模擬戦は見てて凄かったなあ……私、相手が飛ぶのって初めて見たかも。

それに凄く速い動きも見せた。

あんな重い武器を持っているのにだ……

戦ったら間違いなく私も空を飛んでたはずだ……まだ飛ぶのはいいや。

先ほどからその彼女と話している。

お喋りな人では無い様で、ちょっと戸惑っていたけれど。

故郷の話や、自分の両親の事などを話していた。

何でも彼女、河東郡の出身らしく旅を続けてここまで来たらしい。

その後も話は続き「一緒に仕えられるといいね」という感じになった。

やっぱり、同部屋の人とは仲良くならないとね。

商人の牛車に乗せてもらった時も、宿屋で話が弾んだおかげだし。

……あれ？ ひょっとしてこういうのも才能って言うんだらうか？

翌日、張り出された結果を見た私は安堵した。

書かれていた名前は2名、そのうちの1名は私だった。

ほっとして、もう1人の名前を見た私はその名前の人物を見た。
同部屋だった彼女の名前だったからだ。

彼女の方も気付いたのか、私と目が合うと笑顔になった。
その笑顔に私も笑顔を返す。

その後、文官の人について行った私達は御遣い様のいる部屋へと通された。

〈暢介 side〉

時間は、昨日の試験終了後に遡る

武官募集の試験において、久遠達3人が推薦してきたのは2人。
1人は徐晃公明という人物だった。

弓の技術があり、模擬戦において相手を飛ばしたという。

筆記では多少の誤答があったようだが、そこまで問題視するものではないらしい。

「彼女の武力は確かです、また知もあるようです。ぜひ彼女を採用してください」

3人とも、彼女を採用すべきだと推してくる。

まあ、3人がそこまで推してくる人物だ、断る理由も無い。

そう思いながら、俺は他の受験者の結果を見ていた。

筆記に置いて、殆ど無回答の人もいる。

流石に武力だけの人間を取る気は無いので、スルーする。

将となる人に求められるのは何も武力だけじゃない。

軍師の考えを理解し、それを実行する。

また、いざという時は撤退もあるだろう、その判断力。

武力だけで、何は無くとも突撃だあって人は危険すぎるからね。

そしてもう1人は満龍伯寧という人物。

「何でもこなせるというのは大きな長所なんですがね」

そう、満龍さんを評したのは氷花。

ちなみに今、仕事なので真面目な氷花です。

全てが出来る人間ってかなり重宝する。

学生時代にサッカーをしていた際に、一番味方に居てほしかったのは何でも出来る奴だったからだ。

確かにスペシャリストと比べれば見劣りする。

ただ、その人が別の技術を求められた時にそれが出来るかと言えはそうではない。

そういう時に何でも出来る人物を置けば、チームとして機能するという事だ。

この世界に関しても同じだ。

何でも出来ると言う事は、訓練も出来る、そして非戦闘時には内政もこなせるという事だ。

外交だって、使者として向かわせる事が出来る。

便利屋と言われればそれまでだが、実際に一番頼りになるのはその便利屋だ。

というか、まさに俺達が求めていた補佐役にピッタリじゃないか。

「分かった。この2人を採用しよう」

そう、告げた。

そして今、採用された2人は久遠達と名前と真名を交換している。

満龍の真名は葵^{あおい}、徐晃の真名は命^{めい}というらしい。
しっかり真名を受け取ったのだが……

「あの、御遣い様の名前は何なのでしょう？」「

という、どこかで聞いた様な言葉をまた聞いた訳だが。

噂を流した本人を見ると、やっぱり顔を逸らして口笛を吹いていた。

うん、今度からは俺の名前も出してほしいよ。

その後、名前を告げ「好きなように呼んでくれていいよ」と告げると。

「はい、鷺島様」

と、燈と同じ様に呼んでくれた。

話す限り、2人とも真面目な性格をしている。

仕事中の氷花となら相性はよさそうだけど……プライベートの氷花との相性はどうなんだろうか。

何か、久遠と同じ目に遭いそうな予感がある。

……不安だ。

9話 思った事が叶う事って結構あるよね（後書き）

ちなみに、葵の回想シーンで出てきた楓さんなんですが、最初はこの人も三国志の武将で行こうと思ってたんですが……

色々あつて本当にオリキャラに。

ただ、性別的には男性です。

男性で曹操軍……はい、扱いが分かりますよね・w・；
一応、連合軍辺りで出てくるかと思っています。

次こそはオリキャラ紹介と拠点フェイズを書きたい所です。

オリキャラ紹介（前書き）

5人集まりましたので紹介文を作成いたしました。

史実での事も書いているという形になっております。

オリキャラ紹介

姓：司馬

名：懿

字：仲達

真名：久遠くおん

鷲島軍の軍師であり、暢介を保護した人物。

史実では西晋の礎を築いた人物、または孔明のライバルという方が有名なかもしれない。

非常に苛烈な性格だったようだが感情を隠す事が非常に上手かったそうで。

激しい怒りを抱いている際にも表面は穏やかに振舞っていたらしい。

また、軍師というイメージがついているが、史実では將軍としての活躍が多かったようで。

某SLGでは鎧姿のビジュアルでの登場もあったようです。

この作品においては、感情を隠す事があまり得意でない様で表情がよく出てくる。

史実と同様に首が180度回り、初対面の人は大抵目を丸くする。

髪型はロングで色は銀色。

リボンを結んでいるが場所は幕間までは背中 of 辺りで結んでいたが。

それ以降は、首の辺りで結んでいる。

第18話の段階で暢介に対して恋心を持っている最中。
それを成就させようと氷花に引きずりまわされる。

姓：徐

名：庶

字：元直

真名：燈あかり

久遠同様に軍師として仕える。

史実においては、劉備軍の軍師として活躍。

その後、偽手紙により劉備の元を去る際に、孔明を推挙している。
撃剣の使い手とされている。

また、知人の仇討ちを行うなど任侠肌の人物とも言われる。

この作品内では、孔明と土元の2人が旅だった後に。

師である司馬徽より背中を押されるという形で旅立つ。

2人と一緒の主君に仕えるという考えはあった様だが、優先順位
は下だったようだ。

それ以上に2人と戦いたいという思いを持っており、仕官を勧め
てきた暢介達と共に行く事を決めた。

司馬徽の私塾に入ってから書の楽しさを知った様で。
見た事の無い本を見ると「ふわ〜」という声を出す。

ただ、見た事ある本や興味の無い本にはその反応は示さない。
友人2名の影響か、艶本を見つけても反応は薄い。

髪型はショートカットで色は黒。

帽子を被っており、薄茶色のスポーティーソフト帽。（某有名な考古学者で探検家をイメージしてください）

服装は孔明と同じデザインだが、燈はラフな形で着ている。

料理の腕は『普通に料理店出せるよね』というのは氷花談。
何でもこなせるけど一番の得意分野はお菓子作り。

姓：荀

名：攸

字：公達

真名：氷花^{ひょうか}

元々は何進の元にいたが、去って暢介の元へ来た。

史実では董卓の暗殺を計画してみたり、蜀郡太守を自ら望むなど。
大変行動力があつた人物だったようです。

その後は、叔父である荀イクと共に曹操の元で活躍。

曹操に仕えてからは、目立たず、慎ましく生きており。

その姿に曹操は息子の曹丕に対し。

「荀攸は人の手本となる人物である。お前は礼をつくして彼を尊敬しなければならぬぞ」と教えた。

その後、曹丕は荀攸が病気になった際に見舞いに訪れ、荀攸の寝台の下で拝礼をしたとの事。

この作品内においては、御使いの噂に興味を持って何進の元を去ります。

その後は暢介の元で上の2人同様に軍師として仕える事になります。

仕事中では経験の浅い久遠と燈を引っ張り、指導する立場になっている。

ただし、仕事が終われば久遠に対して、セクハラまがいの事を仕掛けるお茶目（本人談）な性格に変わる。

ちなみに燈に関しては「何か、手を出すと危ない気がする」と話している。

髪型はショートで髪の色は赤。

普段は猫耳頭巾を被っている。

長さ的には燈よりは長い、耳が隠れる程度の長さ。

また、耳を隠す仕草が多くみられる。

桂花と同じ服装で背も変わらないのだが、氷花の方が温和な感じを受ける。

服に関しても赤色になっている。

久遠の恋成就の為に奮闘中（半分以上は楽しそうだから）。

姓：満

名：龍

字：伯寧

真名：葵^{あおい}

史実においては公明正大で法に厳しいが、傲慢でないため人に疎まれる事はなかったそうです。

初めの頃は洛南太守として領内の平定に手腕を発揮、その任務に忠実で信賞必罰を徹底する姿勢に。

曹操は大変喜んだそうです。

その後は軍事の職も経験し、後年は呉に対する守備の任を命じられる。

関羽・陸遜などの将とも戦い、それを撃退している。

曹氏四代に仕え、常に安定した能力を発揮した人物。

この作品内においては、自分自身の長所が見つからずに困り切っている。

ただ、周囲から見ると全てが高レベルで出来るという評価なのが。

本人は、それに気付いていない。

氷花同様、御使いの噂に興味を持ちやってきた。

髪型は腰と首の間ぐらいの長さで色は白でストレート。

姓：徐

名：晃

字：公明

真名：命みこと

史実では、曹操軍に所属しており数多くの武功をあげています。
ただ、最後は矢を額に撃ち込まれるという最期ですが（正史では病死になってます）

情報収集を重視し、戦闘時には敗戦の場合の対策を念頭に置いて

戦いを進めるといふ堅実派ですが。

好機と見れば、配下達に食事の暇も与えないほどの追撃を行う事もあった。

なお、三国志演義において徐晃を説得し曹操軍に引き込んだのは満寵という事になってます。

もちろん、曹操自身の策もあったようですが。

そして最期の時、孟達の討伐に向かっていたのは司馬懿だったそうです。

これだけ見ると、この軍の人と絡んでますよね。（まあ、全員曹操軍って言うてもいいですしね）

本来ならばこの時には既に仕えているいるのですが未所属になってもらっています。

氷花・葵と違い、御使いの噂を聞いて城に来た訳ではなく。

ただ、旅をしていて到着した時に募集があったので志願したという経緯。

武器は大斧を愛用している。

髪型は青のロングヘアをポニーテールにしている。

【データ】

身長順：命＞葵≡暢介＞久遠＞氷花＞燈

髪の長さ：久遠≡命＞葵＞氷花＞燈

オリキャラ紹介（後書き）

そろそろ、黄巾も終わり次に進めようかと思っております。

拠点は書いてはいるんですが、まとまらないという状況で。
まあ、本編を優先すべきと思いますので。

10話 噂は時として剣よりも鋭く刺す（前書き）

荀攸さんの耳の事です

叔父の不注意で怪我をしたという話があります。

ただ、その後は創作です。

ご理解をお願いいたします。

10話 噂は時として剣よりも鋭く刺す

（暢介side）

「……なんで、こうなつたかなあ」

黄色い布を巻いた集団、黄巾党との戦いも序盤こそ押されてはいたものの。

やはり、中盤以降は対策を練られたりなどで勢いは消えつつあった。

現在は一か所に勢力を集結させているらしく注目されていた。反撃を狙う為なのだろうか……

俺達かというと、集結に遅れた南陽黄巾軍の殲滅の為。南陽へ兵を出していた。

「ここで南陽黄巾軍の殲滅に貢献できれば、名声も上がり、何か恩賞を貰えるかもしれません」

と、言う軍師達の言葉に従い兵を出した。

ええ、兵は出しましたよ。

俺は城にいますけども。

そう、今回出陣していったのは久遠・燈・葵・命の4人。俺は留守番を命じられた。

まあ、留守番でも街を見て回って改善するポイントは無いとか。ここの建物密集してるから燃えると危ないから区画を考えなければと思います。

城に戻ってから同様に留守役になっている氷花と話したりしていた。

しかし、氷花はどっちが素の氷花なのか分からない。
仕事中は真面目で終わればお茶目。

最近は葵も被害にあっているらしく警戒しているらしい。

そんな氷花だが、燈と命には手を出さない。

燈に関しては「いやあ、燈ちゃんって小さいからさ……色々問題ありそう」

と、言っていた。

命に対しては「あれは、死にかなない」と命の危機を感じていたようだ。

まあ、斧で殺されかねんからなあ。

俺だって「荀攸様が徐晃様に悪戯した所、死にました」みたいな報告受けるのやだからな。

他国にも広まったら氷花の親族、別の意味で泣くぞ。

それと、久遠と葵が何か嬉しそうだったのは気のせいだと思いたい。

さて、現在俺は書庫に來ている。

この近辺の地図作成を行っているのだが、昔の地図を見てみよう
と思ひ来た。

書庫を歩き回っていると「んしょ、んしょ」と氷花の声が聞こえ
た。

声の方を見ると、氷花が背伸びをして上段にある竹簡を取ろうと
手を伸ばしていた。

ただ、どう見ても届いていないのだが……

しばらく見ていた俺は、氷花に近づくとその竹簡を取った。

「あつ」

そう言った氷花に竹簡を手渡す。

その際に、俺は氷花の右耳に視線がいった。

普段は頭巾で隠れていたが、上を向いていた際にずり落ちたのだ
ろう。

その右耳は少し変形しており傷の様なものが見える。

その視線に気づいたのか氷花は手渡された竹簡を落とし手で耳を
隠した。

「……」

氷花の表情はいつものそれとは違う。

何か、怯えている様な雰囲気さえ受ける。

「氷花？」

そう、俺が声をかけた瞬間、氷花は逃げる様に書庫から出て行った。

俺は落ちた竹簡などを棚に適当に置くと後を追いかけた。

氷花の後を追いかけた俺は文官や、侍女などに氷花を見たかと聞いたが。

皆、見ていないという返答だった。

街の方も探し、尋ねたりもしたのだが誰も見ていないという結果だった。

（そういえば、氷花って耳を見せない様にしてたからなあ）

頭巾を被っている際は見えていないが頭巾を取っていた時は髪で隠していた。

恐らく、あの傷は触れられない部分だったのだろう。

「……そりゃあ、あれだけ見てれば気付くよな」

知らなかったとは言え、その部分をジロジロ見てしまった。

「とにかく、氷花を見つけて謝らないと……」

その思いで俺は氷花を探し続けた。

辺りは薄暗くなり、俺は城に戻ってきた。
城に戻った後も探しまわった俺が最後に来たのは城壁の兵士達が見回る通路。

そこに氷花はいた。

声をかける前に氷花は俺に気付き、俺の方を向く。
互いに無言のまま、向き合っている。

「突然、逃げ出してしまい、申し訳ありませんでした」
そう言っ て氷花は頭を下げた。

「いや、俺の方こそ……ジロジロ見てしまった……ごめん」

俺も頭を下げる。

「暢ちゃ……鷺島様が謝る必要はありません。私が最初に言っ
ておけばよかった事なのですから」

氷花の言葉に俺は頭を上げる。

再び無言となる。

辺りはどんどん暗くなっていて、街の方は明かりが灯されていく
のが見える。

「聞かないんですか？」

氷花の声に俺はすぐに返した。

「氷花が話したいと思うなら話してくれ」

相手が隠したい事を他人が聞こうと頼むのはあまり良くは無いだろつ。

そう思い、俺は氷花に任せた。

氷花は少しだけ考えると話し始めた。

「……この傷自体は子供の頃に叔父が酒に酔いまして、その際に出来たものです」

「……それって」

嫌な予感がして口を挟もうとした俺に、氷花は首を横に振りながら言った。

「鷺島様の考えている事は分かります、ただそれではありません」

「……」

「酔った叔父の近くを通っていた際に、叔父が飲んでいた杯を割ってしまいその破片が耳に当たってしまい」

この傷が、と氷花は傷痕を指さす。

「叔父の前では隠していたんですが、誰かから聞いた様で……すまなかったと……」

傷が出来た経緯を聞いていたが、俺は妙な感じを受けた。

今の話だと、叔父は氷花に謝っている。

多分、氷花自身もあれは事故だったと考えている。

ならば、書庫で怯えた目で俺を見たあれは何なんだろうか。

俺が考えている事が分かったのか、氷花は口を開いた。

「鷺島様。書庫でのあれに叔父は関係ありません。あれは、その後の事が」

「その後？」

「はい」

頷く氷花、そして……

「私は鷺島様の前の主君、何進様の前にもある人に仕えていました」

「そこで私は、普通に仕事をしていました。誰かに恨まれる事も無かった……と思っていました」

「思っていました？」

俺の言葉に氷花は頷く。

「本人にその気は無くても、他人から見れば恨まれる様な事だったのかもしれませんが」

「始まりは誰か、それは今でも分かりません。ある時、こんな噂が流れました」

曰く、荀公達の右耳は変形しており、それは生まれつきで呪われている……と。

「全く根も葉もない噂でしたが、人と言うのは不思議なもので噂を信じてしまうものです」

「気づけば、私に向けられる視線は、化け物を見る様な、そのよ
うなものでした」

「ひどいな……」

恐らく、言い出したのは同じ様に仕えていた人間だろう。

氷花の能力を見れば優れている事は分かる。

それに嫉妬し、氷花の耳の変形を呪いだと言を広めた。

結果的にはそいつの思惑通りになった訳だ。

「この頭巾もあの頃は、一族が集まった時などに着ける程度だったんですが。噂以降は常に被っていました」

そう言う氷花。

ただ、それだと余計に相手に噂を信じさせたのではないだろうか
と俺は思った。

噂に対して疑う程度だった人達も氷花が隠しだして「ああ、噂は
本当だったのか」と思いだしたのかもしれない。

「周りに人が寄り付かなくなり、仕事でも手伝いはなく……挙句、

暴言も吐かれ」

近づくな！　そう言うのはまだ良かった。

中には面白がって近づいてきて、無理やり頭巾を取ろうとする者もいた。

その為、仕事中は常に上司の傍から離れず、終われば即座に部屋にこもる生活だった。

そう氷花は話してくれた。

「鷺島様を取った行動は、過去に耳を見られた時の記憶が蘇ったからだと思います」

面白がって頭巾を取り、右耳の傷を見る。

その後、噂は本当だと知り、中には指を指し、笑った者もいる。

「気持ち悪いと……」言った者もいる。

どんなにこれは古傷だと言っても信じもしない。

それが、書庫で俺が氷花の耳を見た事で思い出してしまった。そういう事らしい。

「そんな中で、何進様が私に自分の所へ来ないかと求めてくれたんです」

何進は政治の実権を握った際に、有望な人材を招聘し、その中に氷花が入っていた。

氷花からすれば、このような場所から出れるならばと求めに応じた。

ただ、運は氷花に味方してくれなかったようだ。
その人材の中には氷花と同じ場所にいた人間もあり、勿論、その噂も知っていた。

そして、噂は再び氷花を苦しめる事となる。
新天地に来たつもりが同じ噂が他の人々に伝わり始め、氷花はまた孤立し始めていく。

たかが噂、その噂が氷花を苦しめ続ける。

何か目立った事をするでもなく、他人を蹴落とすなどの行動を取った覚えもない。

ただの嫉妬から始まった話。

だが、その噂もある時に終わりを告げる事になった。

「その噂を聞いた何進様が私を呼びだしたんです」

そう氷花は噂の終わりの時を話し始めた。

＼氷花 side＼（回想）

「おい氷花。お前、自分の噂は知ってるのか？」

「はい……存しております」

何進様の部屋に入った私はその一言に固まった。
とうとう、噂は何進様の耳に入ってしまったんだと……

「そうか……氷花、見せてみる」

「え……」

見せてみる、その言葉に身体が震える。

嫌だ……何進様に見られたくない。

あの人達と同じ様な反応をされたくない……

俯き、震えている私に何進様は椅子から立ち上がると私の傍に来た。

「出来れば、お前自身が頭巾を取って見せてくれ」

「い……嫌です」

「氷花……」

見せたくは無い。

これがもし、私の右耳に傷が無いなら好きなだけ見せたっていいでも、実際に私の右耳には傷があつて、噂通りに変形している。

「いいか氷花。俺は別にお前の耳を見て笑ったり指を指すつもりはねえ」

「……」

「それを見て、お前を首にするつもりもない」

「……」

「ただ、その噂が嘘ならお前は苦しんでるはずだ。違うか？」

「そ、それは」

「だから、その噂の真意を確かめさせてくれ。無理やり取るのだけはやりたくねえんだ」

視線を上げると、何進様は普段見せない様な真面目な顔つきだった。

目線からも自分を信じろという思いが伝わってくる。

その真面目な表情に私は、この人を信じてもいいのではないかと思ひ、頭巾を取り右耳を見せた。

その後、右耳の変形は子供の頃の傷が原因である何進様に告げた。

何進様は、なぜこの噂を否定しなかったのかと私に聞いて来た。

噂が異常な速度で広まった事、実際に私の耳を見た人がすぐに噂と結びつけた事。

怖くなって頭巾を被った事で噂が本当なんだと思ってしまった人。

そういう人達に右耳の変形は傷のせいだと伝えても信じてもらえなかった。

その内、私自身が諦めてしまった。

「ふむ……」

話を聞いた何進様が考えるそぶりを見せる。

何かを閃いたのか一人で納得すると、私には、もう部屋に戻っていいぞと告げた。

～回想終了～

～暢介side～

「翌日、何進様は私を含めて今回招聘された人達の前でこう言いました」

「この中で荀公達の耳が変形してるのは呪いのせいだとふざけた噂を流した奴がいるみたいだな。荀公達の耳は古傷によって変形している、呪いなどではない」

「それを知らずに勝手な作り話で荀公達の名誉を汚す様な事をした者は誰だ！」

「今出てくれば、許そう。だが、隠れているつもりならば私自らが探し出す。そのつもりでいろ」

その時の言葉を全部覚えていたのだろう。
氷花はそう言うのと薄らと笑みを浮かべた。

「その日の内に、噂を話し始めた人物が出てきました。彼はその日の内に、郷に帰らされたようですが」

「そっか……」

「それからは、皆、私に謝罪してくれて元の生活に戻れました。何進様がいなければ今でも私は噂に怯えていたはずです」

恐らく、鷺島様の所に来て、噂は追いかけてきていた事でしよう。

そう言つて氷花は視線を俺から街の方へ向ける。

俺も同様に街に視線を移す。

夜間だと言つのに、街はまだ活気を失っていない。

今頃、酒や食事などを取る人々で賑わっている事だろう。

普段言えない上司への愚痴や待遇の不満を酒の力で言つて笑つ。そういう景色が見られるはずだ。

「そういえば、氷花はよく耳を隠す仕草をしてるけど」

「ああ……あれは私の癖で、止めるべきなのでしょうが……癖と言つのは治らないから、癖なのでしょう」

笑みを浮かべたままの氷花。

「そつか……」

「鷺島様は、もし私がここに来た際にその噂が流れてきたらどうなさっていましたか？」

「多分、何進さんと同じ事をすると思う」

噂とかそういうものを全く信じていないのもあるのかもしれない。実際に確かめて、それで理由を本人から聞いて。話したくない時もあるかもしれないが、噂を完全に鵜呑みにはしないだろう。

「そうですか……あの人と同じ様に……」

「それに、噂を信じたら久遠や燈が怒ると思うよ」

仲間の名誉を汚す奴はどのどいつだ!!　って感じで探し回ってさ。

その噂を最初に作った奴を見つけ出し……その後は怖いな。

「仲間ですか……」

「仲間だろ、俺達皆」

「ふふ……そうですね」

そう言って笑う氷花。

それを見ながら俺は、何かを忘れていた様な気がした。忘れていたそれを思い出そうと記憶を探る。

「あ……」

そして、思い出した俺は間抜けな声を出した。

「どうしたの?」

「いや……書庫で氷花が落とした竹簡、適当に棚に戻したんだ」

書庫は種類別で分けられている。

前の領主の頃は、適当に置かれていたそれを久遠や燈、文官達が分けた。

『絶対に、元に置いてた場所に戻してよね』

と言っていた久遠の顔を思い出す。

もしも、適当に直してたら分かってるよね……という怖い顔でした。

「あらら、しょうがない。私が直しますよ」

そう言っただけで氷花は俺に背を向けて階段の方へ向かっていく。

「いや、置いたのは俺だから俺が……」

その言葉に、氷花は足を止めて俺の方を向く。

「いいよ、元々は私がおとしたもの、自分で直すから」

それに、暢ちゃんじゃ全部直せないでしょ。

と、笑いながら言ってきた。

「……言い返せない」

「ふふ、まあ任せて。久遠ちゃんに怒られない様にしとくから」

そう言っただけで再び、俺に背を向けて歩き出す氷花。

だが、何かを言い忘れていたのかまた足を止めて俺の方を見る。

「そうだ。私の耳の事、久遠ちゃん達には私の口から伝えるから」

「ああ、俺から言う事はないよ」

その答えは予め知ってた様で、氷花は頷く。

そして、言い終わってたのだろう、氷花は階段を下りていった。

一人になった俺は、視線を階段から街に再び移した。

それを見ながら、俺は時間が流れていくのを感じていた。

その後、部屋に戻る途中に書庫を覗くと氷花の姿はなく、適当に置いていた竹簡は無くなっていた。

竹簡が正しい場所に戻っているか、確認は出来ないが氷花が仕事を適当にこなす事は無いと信じているので。

俺はその場を離れた。

数日後、南陽黄巾軍討伐を終えて久遠達が帰ってきた。

報告に來た燈によると。

葵は戦場を広く見る事が出来て、その時の最善の行動を取ってくれる。

また、味方の部隊が有利になる様に補佐の役割も果たす。

軍師からしたら暴走する恐れが無いのでとても助かるとの事。

命は慎重な戦い方を見せていたが、好機と見るや、先頭をきつて追撃を見せる。

状況判断に優れており、今回は無かったが撤退戦などでも上手く動いてくれると思われる。

彼女も暴走がなさそうなので、安心出来るとの事。

2人を獲得出来て本当に良かったですね、と燈は話す。

被害は少なくは無かったが、討伐にしっかり貢献できアピールで

きたとの事。

名声も上がり、これから兵士として志願してくる者も増えてくるでしょうと、燈は言った。

ところで、久遠達は？ と燈に聞くと疲れているらしくお風呂に向かったらしい。

それを聞いて俺は何か嫌な予感を感じた。
主に久遠に何かが起こりそうな……

く久遠sideく

目の前にいる氷花に思わず身構えてしまった。
見れば隣にいる葵も同様の姿勢をしていた。

「どうしちゃったの？ 2人して」

口調で分かる。

今の氷花は仕事状態じゃない。

「い、いや……反射的に」

そう言うが、僕も葵も姿勢は変わらない。

「そう。それより、3人ともお疲れ様。燈ちゃんは暢ちゃんの所かな？」

「え？ う、うん。燈は暢介の所だけど」

おかしい、氷花がおかしい……

僕が思っていたのは。

『会えなかった分、一杯やらせてもらうぞ』

って感じで飛びこんでくるかと思ったのだが。
手をワキワキさせながら。

しかし、現状を見るとその様子はなく至って普通だ。

「どうしたの久遠？ さっきから変だよ」

「い、いや……なんか、氷花の対応が普通だなあって……」

普通……そう言いながら氷花は俯き考える。

考える間、僕は周囲の空気が変わったのを感じた。
主に氷花の周辺が。

「……ひょっとして久遠ちゃんってこういう事を考えてた？」

そう言いながら手をワキワキさせながら近づいてくる氷花。

あゝそうそう、こういう感じなんです……って！

「い、いや……出来ればさっきの普通の方が」

そう言いながら後ずさる。

氷花の狙いは僕か葵だ、葵には悪いけど上手く葵の方に……って
ちよっと！

「何で、僕の方に来るの！」

「何でつて……流石にここで葵ちゃんを狙ったら命ちゃんに怒られるし、私も死にたくないから」

見れば、葵は命の後ろに隠れており、僕に対して手を合わせて「ごめん」と言っていた。

視線を氷花に戻すと、笑みを浮かべたまま近づいてくる氷花。怖い……こんな事なら燈じゃなくて僕が報告に行けばよかった……

どんどん近づいてくる氷花の威圧に耐え切れず、僕は逃げた。逃げた僕のはいいのだが、当然の様に氷花は追いかけてくる。

必死に逃げる僕に笑みを浮かべて追いかける氷花。それを呆れた表情で見る命とその後ろに隠れる葵。

日常に帰ってきたという思い。ただね……

「こんな形で思い出すのは嫌だ!!」

その声は空に響いた。

〈暢介side〉

久遠の悲鳴が聞こえる。

恐らく、氷花に捕まったのだろう。

見れば、燈も悲鳴の意味がわかったのか「ふわ」と顔を真っ赤

にしていた。

ふと俺は氷花の事を思う。

本物の氷花はどっちだ？ その思いがあった。

仕事中とプライベート、どちらが素の氷花なのか。

思えば、何進さんの元へ行くまでは悪意のある噂のせいで毎日が苦痛だったはずだ。

ストレスなど、多くのものをため込んでいたはずだ。

それが何進さんの所で噂は無くなり本来の自分に戻れたのだろう。ただ、ため込んでいたものがある分、弾けているようだ……

だから俺は久遠や葵に対してこう思う。

（多分、ある程度進めば落ち着いてくるはずだから……耐えろ）

自分には被害が来ないから言えるんだろうなと思いつながら。

10話 噂は時として剣よりも鋭く刺す（後書き）

荀攸さんの耳について。

どちらの耳を怪我したのか、調べたのですが分からないままでした。

今回は右耳と言う事にしましたが、もしご存じの方がいましたら。教えてくださいとありがたいです。

さて、話は黄巾から連合へと向かいますが。

その前に、荀攸さんにはもう1つダメージを……

あれ？ このssのヒロインって荀攸さんだっけ？

11話 自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね（前書き）

今回は恩賞を頂いて、少しレベルアップした暢介達。

そして氷花に取って悲しい出来事。

反董卓連合への檄文などがあります。

タイトルですが。

リアルでも自分の予想を超える様な物を貰う時は喜びよりも

「え？ こんなにいいんですか？」と畏まってしまいますね。

11話 自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね

（暢介side）

黄巾党の本隊が壊滅したという知らせが大陸中に広まった。

リーダーであつた、張角らは死んだとの事だ。

残党などが残つてはいるのだが、トップが死んだ事で賊を辞める者が止まらないらしい。

そんな中で俺は、南陽黄巾軍殲滅の協力を行った事への恩賞が伝えられた。

「えつと……今、何て言った？」

「南郷太守に任ずるそうです……」

そういう久遠も信じられない表情を浮かべる。

いや、久遠だけじゃないこの場にいる全員が同様の表情を浮かべている。

確かに、久遠達4人が率いた軍は殲滅戦で大活躍をしたらしい。

野戦においては葵の部隊の援護がバツチり決まり、官軍勝利に貢献。

攻城戦では命が一番乗りを果たし、官軍の将や兵達に強烈な印象を残したらしい。

「それにしても、いきなり太守に任命ってどうなんだ？」

出世しすぎだろと、俺は久遠に聞く。

街1つを治めてるに過ぎない俺が南郷郡を治めるって……

「うゝん、内政の事に関しては噂として中央にも広まってるし……それに」

「それに？」

「今回の殲滅戦で軍事に関しても活躍した事で官軍の将の人達からも称賛されましたから」

「太守として任命するに足りる人物と認識してくれたって事か」

その言葉に久遠は頷く。

「あ、言っておきますけど。お断りしますって出来ませんからね」

「分かってるよ。勿論、有難く受け取るよ」

断ると思ったのか、久遠が注意してきた。

流石に上からの命令を断る気はない。

その言葉にこの場にいた皆が笑みを浮かべた。

何だろう、ひょっとして「お断りします」って言うと思っていたのだろうか？

「なら、早速南郷郡にいる有力者の人達、そして荊州牧である王叡に挨拶に行くべきですね」

「同時に、郡の中にある街や村の状況を調べないと、賊などの攻撃で荒れたままの場所もあるはず」

燈と氷花がすぐに取りるべき行動を示す。

太守として土地を治めると言っても、元よりここにいる有力者の協力を得ない事には話にならない。

協力が無ければ、復興は上手くいかないだろう。

そして荊州のトップにいる王叡への挨拶もしておくべきだろう。

上の人間の印象は良くしておいて損はない。

俺のいた時代と違って、上が気に入らなければそのまま殺されかねない。

そんな気がする。

「幸い、僕達は内政と軍事で評価を得ている。恐らく、有力者の人達も友好的だと思うけど」

有力者には天の御遣い、その看板は通用しない。

彼らは現実的に考えてくるだろう、だからこそ久遠の言う、内政と軍事の評価は武器になる。

俺達なら、この地を豊かにしてくれるのではないかと……

勿論、それに応えられなければならないのだが。

「ああ、友好的なうちに挨拶は済ませておこう」

そう俺は言った。

王叡への挨拶は氷花と燈が行く事となった。

理由としては、まず王叡は武官を軽く見ている様で葵と命では話にならない。

誰にすべきかと話しあっていた際に氷花が自ら志願してきた。

「王叡への挨拶に失礼があつてはいけません。ここは私に任せてください」

そう、氷花は言った。

ただ、1人は危険なので護衛の形でもう1人付ける様に頼んだ所。

「なら燈で、賊程度で葵や命を使う訳にはいきませんので」

気のせいだろうか、久遠と葵が、ほっとしたのは。

流石に挨拶に行く時は常時真面目モードだと思うぞ。

残った3人は有力者達への使者として向かう。

そして、俺はというと文官達と相談して郡内にある街などに派遣する者達を選定していた。

統治範囲が広がり、今までなら目の前の街だけだったのが郡全体を見る事になる。

その為、郡内にある街などにこの街の復興などに携わった文官を向かわせて内政に取りかかってもらう。

また、俺からの指示を受けてからの行動が素早いという事もあるだろう。

向かわせる文官達を決め、その近くに若い文官と一緒につけて向

かわせる事も決めておいた。

過去に氷花がいた事で久遠と燈が成長を見せた様に、ベテランから若手への教育も忘れてはいけない。

いくら優秀な人材を揃えても育成に失敗すれば勿体ない。

若手を成長させるには経験を積ませる事が一番、いい方法だと俺は思っている。

そして、その近くには多くの経験を積んだベテランを置いておく事が効果的だと思う。

そういう意味合いを込めて、派遣する人材をあらかじめ決めていった。

派遣を決めた文官達を説得し、派遣状態の際の給与なども話をつけていく。

中には難色を示している者もいたが、しっかりとした補償を持たせる事で納得してもらった。

交渉と言えるものなのかは疑問だが、とりあえずは必要な事だから頼むと誠意を込めたつもりだ。

難色を示していたのが若い方に多かったのは、ちょっと意外だったかなあ。

普通はベテランの方が難色を示し、若い方が乗り気だと思っていたのだが。

まあ、若い人からしたら、まだここで勉強したいという事なのだろうか。

ベテランの人達も有望な若手見つけたから一緒に連れて行って育てるんだという思いが強いのかな。

まあ、そういう思いは大歓迎なんだけども。

ふと、思ったのだが案外この若手の文官の中に三国志とかに出てきた人が混じってるんじゃないかと思ってしまった。

本当にそうなら、嬉しいんだけど……名前聞いても分からないからなあ俺……

本当にこんな事なら勉強しとくべきだったと強く思う。

まあ、まさか三国志の世界に飛ばされるなんて思った事ないし、今更言っても遅い。

やがて、有力者達や州牧への挨拶を済ませた久遠達が帰ってくる。報告では州牧への印象は、悪くは無いの事。

まあ、悪い印象さえ与えなければ成功と言ってもいいだろう。

有力者達だが、本当に友好的な者もいれば、表向きな者もいたよ
うだ。

当然と言えば当然だろう、最初から皆仲良し何て事は無い。
そういう人達の信頼を得るには結果を残すしかない。

南郷太守となり、各地からの報告や有力者などの会談。
名を上げた事で志願してる兵士達も増えており、新兵訓練の体力
作りの時間も取りづらくなっていた。

久遠達とも仕事以外で会話らしい会話はしていない。
というか……ここ最近は朝議以外で殆ど会ってないような……

この間に変わった事と言えば、命の進言で間諜などの諜報部隊を作った事が。

いつの時代も情報を制するものが時代を制するという事なのだろうか。

学生時代の部活においても、他校の状況などを調べる役割の人間がいた。

中心選手や戦術などを調べ、ミーティングで発表する。それを持って、試合に臨んでいった事を思い出した。

まあ、少し違つかもしれないが情報の大切さは知っているので命の進言を受け入れた。

この部隊は命自身が訓練などを行い、間諜を育てている。金銭面や人材面で多くの間諜の育成は難しいが確実に育っている様だ。

そんな中で、ある話が大陸中に広まった。

漢の皇帝である、霊帝が亡くなったという事だ。

霊帝の死後、朝廷内では大將軍何進と十常侍の確執から争いが起こり始めた。

何進が争っている、その話が来た時、ある人物に変化が起こった。

俺がそれを知ったのはある日、葵からの報告だった。

「鷺島様、氷花さんの様子がこの所おかしいのですが」

という事だった。

氷花の以前の主である何進が争いの中心にいる。

別に仲違いで離れた訳でなく、氷花のわがままで離れたただけだ。何進の身を案じているのだろうと思った。

ただ、仕事のスピードが落ちると拙いので氷花の仕事量を削り、仕事に慣れて処理速度が異常な事になってる久遠に回しておいた。

恐らく、本人も「いつもより少し多め？」という感じでしかないだろう。

というか、それぐらいの速度になっているという事です。

そのスピードが俺にも欲しいよ、本当に。

争いはどんどんと泥沼化していき、互いに引けない所まで来てしまっていた。

いや、最初から引く気などどちらも無かったと思う。

結果から言えば、何進は十常侍によって暗殺され、十常侍はその後、何者かに暗殺された。

最終的には当時、地方領主であつた董卓によって一応の収束を見せた。

氷花の事に関しては何進が暗殺されたという報告を受けた際に、呆然となっていた。

それからしばらくは仕事が出来る状態ではなかったので、久遠や

燈に仕事を回し氷花には休みを与えた。

流石に、今の主は俺だ！ 過去の奴は忘れる。

何て事を言うつもりはないし、言っではいけないだろう。

どれだけ悲しんだかでその人が相手の事をどう思っているかが分
かると誰かが言っていた気がする。

それならば、氷花は何進という人物を慕っていたのだろう。

耳の傷、そこから生まれた噂で苦しんでいた氷花を救ってくれた
人だから。

氷花が再び政務に戻ったのはそれから1週間ぐらい経った頃だろ
うか。

「長い休みを取ってしまい、申し訳ありませんでした。 もう大丈
夫です」

そう、力強く氷花は言った。

さて、董卓によって収束を見せかけていた大陸であったが、あく
まで【見せかけていた】という事だ。

争いの火種は存在していて、それは言いがかりでも導火線へと着
火するのには十分で。

その導火線の先に居る運の悪い人物は他でもない董卓だった。

内政に一段落がつき、一日の流れが少しゆっくりし始めた頃。
俺達の元に檄文が届いた。

送り主は袁紹。

「董卓が洛陽で暴政を働き、民達が苦しんでいるから解放する為に兵を出してほしいという内容だね」

檄文の内容を見ながら久遠が話す。

その表情は、どこことなく釈然としないものだった。

見れば、大広間に集まっている皆が檄文を読み、そして首をかしげていた。

「普通なら信用すべきなのでしょうが……どうも、内容が」

「うん。董卓を一方的に悪者に仕立てあげているんだよね」

燈の言葉に葵も続く。

董卓は悪者だから皆で倒しましょうという内容。

これが本当ならば兵を出すべきなのだろうが……何か胡散臭い。

よく分からないけど……この檄文はあくまで仲間を集めるという口実で。

董卓を攻める本当の理由は違うんじゃないか。

そんな中、一人考え込んでいた氷花が口を開いた。

「袁紹は名門の出身、逆に董卓は辺境の出身……それで洛陽にいるのは董卓、これが原因なんじゃないか……」

氷花の言葉に、皆が驚く。

「まさか、洛陽に董卓が入っているという事への個人的恨みですか？」

燈が驚きの声を上げる。

そりゃあそうだ、もし氷花の言う通りならこれは完全な個人的な恨みでしかない。

洛陽という中心に名門の自分でなく辺境……田舎の人間がいるなんてという事。

「それも可能性として考えられるという意味……暢ちゃん、檄文の内容が本当か嘘か調べる必要があるよ」

氷花の言葉に俺は頷く。

俺は視線を命に移す。

命自身も俺から何を言われるのか分かっているようだった。

「命、間諜を使って洛陽を探ってくれないかな」

「……わかりました」

命はそう答えると、誰を出すのかを考え始めていた。

基本的に命は殆ど喋らない。

無駄な事は言わないという事なのだが、お酒が入ると多弁になるとは葵談。

未だに見た事ないけど。

とにかく、今回の檄文の内容が真実か、それとも袁紹の恨みから

来た自分勝手な事なのか。

見極める必要がありそうだ……ただ……

「暢介。この檄文は大陸全土の諸侯達に送られてるから、断つたら目を付けられるよ」

「……絶対参加かよ」

頭を抱える俺。

拒否すれば今度はお前の番と言われるか董卓に協力してるんじゃないかと疑われる訳だ。

新興勢力の俺達としてはあまり、巨大な戦力を敵に回す気は無いけどさ。

あくまで、今は敵に回したくない。

「だね……ああ、命。なるべく早く情報を取ってくる様をお願い」

久遠の言葉に頷く命。

「よし、兵糧も士気も十分なのは分かった。後は間諜が持つてくる情報が手に入ったらまた集まろう」

そう言つて、俺は会議の終了を宣言した。

今回の連合軍参加は将は全員出る事となった。

なので、文官達に不在の間の指示などを出す様にし後は、出陣の時を待つ訳だ。

そうして大広間を出た俺の横に葵が並ぶ。
身長が一緒なので、視線が同じになる。

「鷺島様。今回の連合軍にもう一人の御使いは来るのでしょうか？」

「ああ……確か、劉備軍にいるんだっけ」

そう、もう一人の御使いは劉備の元にいるらしい。
流石に歴史には疎い俺でも知ってる名前の人だ。

そんな所にいる御使いが今回の連合軍に参加するかどうか。

「はい。劉備軍にいるらしいですね」

「どうだろね。まあ、行ってみれば分かるさ」

「そうですね」

その後、少しばかりの世間話を行って俺と葵はそれぞれの持ち場に帰った。

劉備の元にいる御使いとはどんな人物なのか。

少しだけだが、会ったのがちょっと楽しみな俺だった。

11話 自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね（後書き）

本当は何進さんを死なせないでどこかに逃げさせようとしたんですが。

やはり、ここは亡くなってもらいました。

氷花が立ち直るまでの部分は幕間という形で出したい所。

あ、別に何進×氷花じゃないです。

2人の関係は親子みたいだなという設定にさせていただきます。

今回は反董卓連合集結という事で。

一刀君登場です。

ちょっと、ゲーム版と比べて性格が変わっているかもしれないですが。

その説明文は書いておこうと思います。

この小説内での一刀君（前書き）

タイトル通りなので、特に前書きがございません。

もうしわけない。

この小説内での一刀君

今作の一刀君は基本的には、何もやっておりません。内務や軍事に関しては「俺わかんねえし」という感じになります。

現状では天の御使いは自分だけで、南郷にいる御遣い（暢介）は偽者だと思っているよう。

その為、暢介の噂を聞くと凄く不機嫌になり苛立つ時がある。

勧誘などの失敗が無い為、自分には魅力があるんだという節がある。

（あくまで御使いという看板のおかげに気付いていない）

それが原因で、暢介陣営の有る人物に勧誘をかけて騒動となる（じゃっかんのネタばれです）

暢介が歴史を知らない為、自分が優位に立っているという事で暢介を下に見ている。

それでも劉備陣営内の人達からの信頼は抜群に高い。

この小説内での一刀君（後書き）

蜀✓をしていると一刀君って何かしたっけ？ という疑問にぶつかりました。

歴史を知っているのが果たしてプラスなのか。それとも、何も知らない方がプラスなのか。

この小説の重要ポイントです。

12話 長い話はいくつになってもきついものです（前書き）

筆者は学生時代に、テレビなどで紹介されるほどの選手と。

ある競技で試合をしました但那のオーラに完全に飲みこまれました。

カリスマとは違つかもしれませんが、優秀な人間と当たると。
こうなるのかと実感した時でした。

……まあ、曹操様のカリスマは別物でしょうけど・w・;

12話 長い話はいくつになってもきついものです

（暢介side）

なんだ……この状況は。

目の前に広がる光景に俺は頭を抱えるしかなかった。

ここは、反董卓連合軍の集合場所。

その場所にある大本営に俺は軍議を行うから来てくれと言われてきた。

現在は連合軍の総大将を決める事になっているのだが……

誰もやりたがらない……いや、正確には一名、淒くやりたそうな人はいるのだが。

その人物は決して自分から名乗り出ようとはしない。

他の諸侯達も誰かを推薦しようという動きは無い。

推薦したら、責任を取らせられる事を恐れているのだろう。

最悪、最前線に配置されてしまう恐れもあるからなあ……

そんな中、淒くやりたそうな人、袁紹が総大将に必要な要素などを話している。

家柄やら治めている土地の広さなど……うん、それだとあな

たしかいないねと言うぐらいに。

もう一人の天の御使いはまだ来ていないし……遅刻か？ それとも不参加か？

そんな事を考えながら俺は、他の勢力の人達を見る。

色々な人が来ているが、一番、俺が目に入っただのは曹操だった。

（凄いオーラだなあ……あれが、カリスマってやつかなあ）

見るだけでも圧倒的な威圧感を感じる。

もしあれが、本人が意識していない無意識のカリスマっていうなら本気になったらどうなるのだろうか。

きっと、足が震えてその場から動けなくなる……間違いないな。

彼女の元に居る者は、そのカリスマの元で働ける事を喜びに感じれるだろうし。

敵はその威圧感の前にすぐに膝を折るだろう……

そんな彼女も今では袁紹の言葉に呆れながら聞いている風に見せている。

恐らくは、右から左に聞き流しているんだろうけども……

そう言えば、カリスマといえば学生時代の部活でそんな風に言われている人と。

全国大会であたった事もあったなあ……

確かに試合で対面した時は身体がビクツとなって震えたからなあ。

卒業してから、その選手、国内リーグのチームに入団して今は代

表だもんなあ……

社会人になった俺が周囲に自慢できる話の一つになってるし……
って全然関係ないな。

そんな昔の事を思い出すほど、場の空気はしらけてきている。

「あの、鷺島様」

「ん？ どうした燈」

隣を見ると燈が呆れた表情でこちらをみている。
いや、表情の原因は俺じゃなくて袁紹だろうけど。

ところで、何で隣にいるのが燈なのか。

本来なら、こういう所についてくるのは久遠なんじゃないかと皆、
思ってるはずだ。

久遠は今、俺達の陣にいる。

というか、陣から出て来れない状態になっている。

なぜそうなっているのか、またこの連合軍内での俺達の考えを言
っておこうか。

……どうせ、袁紹の演説は終わりそうにないから……あと袁紹、
その言葉はもう3回目です。

（暢介side）（回想）

命が送り込んだ間諜が董卓の情報を手に入れたのは出陣する4日

前だっただろうか。

当時の俺達は反董卓連合の参加の為の準備が終わっており、その情報を皆で見ている。

「……なるほどね、これが暴君ね……」

間諜からの情報を見た俺達は袁紹からの檄文との内容の違いに呆れてしまった。

例えば、1だったものを5とか10と言うのならまだいい、一応1はあるんだから。

だが、これは0のものを10と言っている様なもの、つまりははっきりとした嘘。

「洛陽の民は、董卓の事を名君だと慕い、圧政などを行っている様子は見られないだってさ」

同様に呆れ顔の久遠が書状の内容を読む。

董卓は暴君などではなく、名君だった。

「……で、反董卓連合はこの子の首を狙う訳か……ひどいな」

俺の呟きに皆が黙りこむ。

反董卓連合、出だしは袁紹の嫉妬……だが、参加する諸侯達はそれに上手く乗ろうとしている。

これから先、乱世に突入した場合に名声は大きな武器となる。

その名声の為に董卓の首を取りに向かう。

董卓本人からしたら、訳も分からないまま、命を狙われている訳だから。

たまったもんじゃない。

嫉妬、名声、人の欲の為に狙われる董卓に俺は何をすべきなのだろうか。

ただ……その首が掲げられるのを見る為か？

……もしも、洛陽に一番乗りが出来れば……董卓を助けられるんじゃないのか？

でも、リスクがでかすぎる、諸侯達に気づかれたらどうする。次に狙われるのは俺達になるかもしれない……だけど、助けられる命がそこにあるなら。

「……董卓を助けるぞ」

俺の言葉に皆は予想していたのか頷く。

「まあ、この情報が来た段階で何となく予想はついてたけど……暢介、本気なんだよね」

「勿論、冗談でこんな事は言わないよ。それより、皆はいいのかい？ 危険な事に皆を巻き込む事になるけど」

董卓を助ける。

それは、言葉で言うほど簡単なものではない。

何しろ、連合に所属しながら連合を騙さないといけない。

もし失敗すれば、間違いなく次に狙われるのは俺達になる。

「董卓に手を貸した」とか、理由なんてのはいくらでもつけられる。

今回がそうだったように……

「鷺島様ならば、助けようとするのではないかと思っておりまして。逆に安心しております」

「まあ、これだけ分かかってて名声とかの為に董卓を討つなんて言ったら私は出て行ってたよ、暢ちゃん」

燈と久遠が言う。

葵と命を見ると、二人も頷く。

「皆、有難う」

俺は皆に向かって頭を下げる。
簡単に王が頭を下げるなどと言われそうだが、ここは頭を下げておきたかった。

「僕達の方針は決まったね。連合軍を出し抜いて董卓を助け出す……ついでに董卓軍の武将も手に入れちゃおう」

戦力も増やしておきたいしね。
と、久遠は笑みを浮かべて言った。

さて、方針が決まり出陣する当日、1名の人間にある変化が起こっていた。

「うえええ……」

「く、久遠さん。大丈夫ですか？」

葵が自分の背中にいる久遠に声をかける。

前日の事、久遠はどうみても張り切っていた。
いや、張り切りすぎていた。

同じ様な状況を俺は自分のいた世界で見た事があった。
運動会前日に張り切りすぎて、当日に体調を崩して不参加になっ
たという事。

まさかとその時は思っていたのだが。

当日になり、久遠は体調を崩していた。

流石に一人で馬に乗せる訳にもいかなかったので葵に任せる事に
なったのだが。

さつきから、久遠は呻き声を上げている。

「うゝ……あ、葵……」

「ど、どうしました？ 酔っちゃいましたか？」

「……先に謝っとくね。ごめん」

「あ、謝るって何を？ ……だ、駄目ですよ。今吐かないで」

そして背後で聞こえる声と悲鳴に俺達はため息をつく。
まあ、葵にはご愁傷様と心の中で言っておいた。

集合場所につき、陣を建ててその中で久遠を横にしておく。
葵は着替えをすませているが、テンションが落ちてる。
そりゃあ、自分の背中に吐かれてテンション落ちない奴はいない
わな。

命が慰めているけども……本当に君ら仲いいね。

久遠は吐いたおかげか、調子は多少上向きにいるようだが、まだ
外には出せない。
もう少し経つと大本営にて軍議を行う為、行かなければいけない
のだが。

「今の久遠だと、また吐きそうだよなあ……」

「そうですね。ここは私が氷花さんを選ぶべきかと」

流石にこんな状態の久遠を連れ出すほど、俺は鬼じゃない。

となると、燈か氷花になるんだろうけども……

あんまり警戒されたくないからなあ……氷花を知ってる人とかい
そうだし。

「燈、来てくれないか」

ここは燈を選んでおこう。

流石に、知名度の無さを理由にしたとは言いたくないけど。

「承知いたしました」

燈は頷く。

さて、諸侯達がどういう人物達なのか見てこないと……

そして、最初の状況へと戻るわけだ。

～回想終了～

袁紹の演説は未だに続いていた。

何と言つか、よくそこまで話が續くなあと素直に感心してるよ俺。

いい加減、総大将を決めないと話が進まないよなあ……

でも、推薦して最前線に出される訳にはいかない。

さてどうしたものかと考えていると。

2人の男女が凄い勢いで入ってきた。

「す、済みません、遅れてしまいました」

あ、演説を途中で切られてしまったからか袁紹の機嫌が少し悪くなつた気がする。

まあ、話の途中に割り込まれて不機嫌になる気持ちは分かるけども結構話してたからいいでしょ。

その後、遅れてきた2人の内、女性の方は劉備。

男性の方がもう一人の天の御使いと呼ばれている北郷一刀である

事が分かった。

北郷が着ているのは恐らく、学生服だろう。

あと、劉備が北郷の事を「ご主人様」って呼んでいたけど。

あれって北郷がそう呼ばせているのだろうか。

まあ、そう呼ばれて喜ぶならいいんだが……せめて場所を考えないか。

プライベートでなら、別に構わないけどこういう場面には相応しくないような。

周りの諸侯達の表情もなんか良くないし、最初から悪い印象だぞこれは。

そんな事を考えている時、北郷と目があつた。

俺が会釈をし、顔を上げた際に北郷の目を見て少し戸惑った。

（凄く睨んでるよなあ……俺、何かしたか？）

そう、北郷の俺を見る目は怒りの目だった。

まるで親の仇を見るかのような目に気付いたのか燈が俺の方を心配そうに見てくる。

「鷺島様……」

「大丈夫だ」

燈にそう返した俺は視線を北郷から袁紹へと向ける。

話は劉備が袁紹を総大将に推薦し、その責任を取って前線に回されている所だった。

総大将が決まれば話は早い。

作戦などを組み立てて行かなくてはいけないのだが……

結論から言えば、作戦なんてものではありません。

ただ、袁紹から言われた事を簡単に言うつと。

「勝手にやれ」

という事だ。

まあ、勇ましくとか華麗にとか言っていたけども。

具体的なものはない。

軍議が終わり諸侯達も呆れた表情のまま、天幕から出て行く。

作戦なんて無い、ただ進んで行けという総大将の元、不安な出だしである。

はあ……これを陣に持って帰って、氷花達に何て言えばいいんだろうか。

「素晴らしい作戦ですね、この作戦は袁紹様ぐらいしか思いつかないでしょうね」

帰って早々、軍議で決まった作戦を伝えると氷花はいい笑顔でこう言い放った。

褒めてる様で、実際は全く褒めていない訳だが……

「そして配置を見ると袁紹軍は真ん中ちょっと後ろ、うーん、素晴らしいぐらいに邪魔ですね」

氷花よ、その笑顔で言うと凄く怖いぞ。

ちなみに俺達は、袁紹軍からみて、左前に配置されている。
ようするに前線だ。

董卓を救出するには洛陽まで行かなくてはいけない。

？水関、虎牢関、この2つを損害を最小限に抑えて洛陽へ一番乗り。

そして連合軍にそれを悟られてしまつてはいけない。

董卓の協力者とか思われたいには、董卓軍とも戦闘をこなさなくてはいけない。

そういう点では？水関において、前線に配置されたのは幸いだっ
たかもしれない。

「まずは？水関の突破からだな……皆、気を引き締めて行くぞ」

俺の言葉に皆が頷く。

「でだ……久遠よ。お前はまだ体調が戻らないのか……」

「う、うめんなしやい……」

未だ、横になり弱々しい声を出す久遠に俺達は頭を抱える。

12話 長い話はいくつになってもきついものです（後書き）

一刀くんの暢介への怒りは？水関の突破後に書こうかなと思ってお
ります。

リアル生活が忙しさを増しています、PCの前に座る時間が少な
いです。

帰宅↓夕食↓お風呂↓寝るといいう流れが方程式になっています・w・
；

13話 相手の思い通りに動くのって嫌だよね（前書き）

この作品中の一刀君ですが、キャラ変わりすぎかも。

あと、暢介くんに対して偽者と思っているのは。

当初は現地の人が天の観使いを名乗ってるんだろという考えから。

不幸な事故でたまたま飛ばされたやつ。

だから、こいつは御遣いなんかじゃないという自分本位の考えです。

飛ばされ方は一緒なんです、その情報が無い為です。

はい・w・;

13話 相手の思い通りに動くのって嫌だよね

（暢介side）

？水関についた連合軍は決められた配置についている。
先陣をきる事になっている劉備軍は最前線に配置されている。

「劉備軍はどうするつもりなんだろうか」

兵力は少なく、袁紹から兵と兵糧を回しては貰っていたが。
それでも多い方ではない。

「多分、？水関に籠っている将を挑発して引きずり出すつもりなんじゃないかな」

「引きずり出すって、普通は籠城する方が得策だろ？」

打って出て野戦に持ち込んだって意味は無いと思うのだけど。

「普通はね……ただ、？水関を守る将の華雄は猛将で自らの武に誇りを持っている将で、あとは」

猪な所があるという。

要するに、自分の武を馬鹿にしたら切れて出てくるだろうという読みだそうだ。

「そんな都合よくいくか？」

「まあ、抑え役の将がいれば止まるかもしれないけど……まあ、居ても止まらないかもね」

「なるほどねえ……でだ、久遠、調子は戻ったみたいだな」

「すっかりね、今度からは前日に張り切らない様にしとくよ」

昨日までの体調不良が嘘の様に立ち直った久遠。

やっぱり、張り切りすぎが良くなかったのだろうか。

視線を？水関に移すと劉備軍の武将が2人、？水関の方へと進んでいるのが見える。

ひよっとして挑発でもするのだろうか。

しばらく様子を見てみると予想通り、2人は？水関に向かって挑発を始めた。

まあ、何と云うか……俺に向かって言っている訳じゃないのに……
…すげえへこむ。

対象となっている華雄からしてみたら、即飛び出して叩き潰すつてぐらいに怒り心頭だろうなあ。

「ほら、予想通り」

そう言っつて、久遠は胸をはった。

うん、本当にお前の言っただ通りだったな。

……ん？　？水関の門が開いたか。

どうやら、劉備軍の狙い通りになったわけだが……

「なあ、久遠。劉備軍の戦力で華雄を止められるのか？」

「難しいだろうね。装備は貧弱だし、借りてきている袁紹軍の兵士達の士気も高くなさそうだから」

久遠の言葉に燈が続く。

「逆に華雄の兵士達は上司を馬鹿にされた為、士気は高いはずですよ」

「って事は……」

「前線の維持が難しくなって後退して……色々な勢力を巻き込むといった所かな」

そして、乱戦になった所で一騎討ちで華雄を討ち取って戦功をあげる。

そう、久遠は続けた。

「乱戦にして、他の勢力の戦力を削る訳か……」

そう言っつて、俺は少し考え込む。

多分だけど、最前線に回された事への恨みとかもあるんだろうなあ。

「……面白くないなあ……なんか、劉備軍の考え通りに進んでるのが」

「そうですね、それに董卓の将の首を取るのを見たくはないです」

久遠の言葉に燈も続く。

確かに、董卓軍の將を討ち取られるのを見るのは俺達としてはいい話ではない。

助けようとしている軍の人間なのだから。

「？水関への一番乗りは止めて……戦線維持に兵を割こう」

「そうですね、その方が袁紹への印象もいいはずです。今は悪い印象は持つてほしくないですし」

袁紹への印象を悪くするのは色々と面倒だと、燈が言う。

確かに、あれだけの大軍を動かさせるだけの資金力と土地があるわけだしな。

ここは、印象を良くするように動く事にしよう。

俺達はいくまで洛陽に一番乗り出来ればいい訳だから。

それに、劉備軍の策に乗りっぱなしもよろしくない。

「燈、葵と命に劉備軍への戦線維持の援軍に向かう様に伝えてくれ」

「分かりました」

燈に指示を伝えると、燈は葵達の方へと駆けて行った。

「さて……この行動で劉備軍の策を潰せるか？」

「戦線を袁紹の元まで下げないのと、華雄との一騎打ちを阻止できれば成功ですけどね」

「一騎討ちか、命しかないな……」

この軍の中で武に長けており一騎打ちが可能なのは命しかない。
葵は個人の武に関しては自信が無いらしく、以前、久遠とした時は互角だったらしい。

軽くへこんでいたけども。

「命の判断に任せよう」

そう、呟いた久遠に俺は頷く。

命……無理だけはしないでくれ……

＼命side＼

私と葵の部隊が劉備軍の援軍に入ってから、戦線は多少の落ち着きを見せ始めていた。

多少は押し込まれているが、先ほどの勢いは無くなってきている様だ。

この様子なら、戦線を押し戻せるのも近いかもしれない。

どんなに華雄とその兵士達が強く、士気が高くても兵力差はどうしようもない。

いかに猛将でも何十人に囲まれればいつかは討たれてしまう。

さて……私はどう行動しようか。

現状のままでいれば、戦線維持だろう。

だが、あの情報をもう少し深く調べるとするならば……私は……私は視線をある人物へと向ける。

視線の先では、劉備軍と袁紹軍の兵士達が空を飛んでいた。私の目はその原因となっている人物を見ている。

「弱い！ あれだけの挑発をしておいてこの弱さとは何だ！ もう貴様らに様は無い、華雄隊、このまま総大将の首を」

「ちよつと待った！」

袁紹の陣へと向かおうとする華雄に対し私は声をあげた。我ながら、こんな声が出るとは思わなかった……正直、驚いている。

「貴様、何者だ？」

華雄の視線が私に向けられる。感じるのは殺気、もし普通の市民なら、これだけで死んでしまうかもしれない。

「鷺島軍の将が一人、徐晃と申します。流石に、総大将の元へ向かわせる訳にはいきませんので。どうでしょう、私と一騎討ちをしていただきますんか？」

そう言いながら、私は大斧を向ける。華雄の目つきが鋭くなる。

「ほお、斧使いか……良かろう。さっきまでの雑魚とは違うよう

だしな」

戦斧を構え、華雄は名乗りを上げる。

「我が名は董卓軍の将、華雄なり！ この戦斧の威力、その身でしかと味わえ！」

さあ……どう戦いましょうかね。

く一刀sideく

自分達の思惑通りならば、今頃は戦線は袁紹の所まで下がって乱戦になっていたはずだった。
そうして愛紗が華雄を一騎討ちで討ち取る、それで終わるはずだった。

それが今では戦線は押し戻されて一騎討ちも愛紗では無く、鷺島軍の将がやっている。

ならば、？水関への一番乗りを狙おうとしても既に孫策軍が向かっている様でそれも無理。

俺達がやった事は敵を挑発して？水関から出して、戦線を維持できずに乱戦一歩手前になってしまった事。
それを鷺島軍の援軍で押し戻した。

どうみても、高評価になるのは鷺島軍だ。

鷺島暢介、この名前が出てくる度に俺はイライラしていた。

この世界に来てから、ずっと俺はその天の御使いと比べられていた。

愛紗などは『天の御使いの名を騙っている者は多数おります』と言つ事で偽者だという考えだった。

それがしばらく経つと、『南郷という所で天の御使いが領主をしているらしい』という話になっていた。

そこから『南郷にいる御使いが治める街は復興し、夜も明かりが消えない賑いを見せている』とか。

『先の黄巾との戦いで配下が活躍し、太守となつたらしい』だと、そんな話ばかりだった。

そんな素晴らしい御使い、ならば自分達の近くにいる御使いはどうかと人々はみてきた。

俺に何を期待しているんだ？ 政治？ 軍事？ 出来る訳ないだろ。

俺は普通の学生でそんな経験は何一つない。

大体、天の御使いと言われる人物が複数いるのもおかしい話だろ。こついう、救世主つてのは1人ぐらいしかいるはずねえだろ。

そして今回の対面で、俺はもう一人の天の御使い、鷺島暢介を見た。

その服装は、社会人が着るスーツ……見間違ふ訳はない。

多分、あいつは俺と同じ世界から来たんだろ。

でも天の御使いじゃないはずだ、多分、何かしらの事故かなんかで飛ばされた不幸な人ってやつだ。

だから、こいつは天の御遣いなんかじゃない。

絶対にそうだ、本物の天の御使いは俺だ……俺なんだ！

桃香達は現状をどうするべきか話し合っている。

どうするべきか？ 簡単だろ、鷺島軍の将が負ければいいんだろ。

あるいは……狙撃でもして華雄もろとも消えてもらうか。

そういえば、鷺島軍の将の名前……徐晃って言ってたな。

丁度いいじゃないか、確か徐晃は矢が額に当たって死ぬんだよな。
ちよっと早いけども……いい事思いついたな俺。

だけど、こいつら……絶対、反対するんだろうな。

一騎討ちは武将にとっての神聖な舞台、そこを邪魔などしてはいけないと。

何が神聖な舞台だ、そんな舞台上がってる本人達は嬉しいだろうが。

それで負けたら意味が無い、それよりもどんな方法でも討ち取る方が いいはずだ。

さて……どうやって説得するか……

（命side）

戦場に相応しくない様な静けさが辺りを包む。

互いに肩で息をしている状態ながら、間合いを測っている。

（情報はすべて正しかった……これで私の方は満足なんだけど）

何度か鰐迫り合いになった際に、華雄と互いに聞こえる声で会話をしていた。

初めの時は華雄の方が大声で答えそうになっていたのでその時は無理やり間合いを詰めていたが。

華雄の方も理解できたのか、途中からは上手い具合に会話が出来ていた。

その中で私は、自分達が持っている情報が正しいのかを確認していた。

既に董卓という情報は持っていたが、それが真実か否かを知りたかった。

間諜の情報がもしかしたら偽情報の可能性も考えて……

結果としては間諜が持ってきた情報は正しく、董卓は名君であった。

もしも、偽情報ならばそれを鷺島様に伝えるのだが、そうでないなら私達の行動の真意を伝えるべきかもしれない。

そう考え、再び鰐迫り合いの態勢に持っていく。

流石に回数重ねすぎて怪しまれそうだけど……

「あなたの話は私の知っている情報と一致しました、ですので、あなたに伝えたい事があります……我々は董卓を助けるつもりです」

「なんだと！　だが、助けるならなぜ連合に参加している」

「表立って董卓側に立てば、我々も狙われてしまう。そうなれば

助ける事が出来ないと考え、この方法をとりました」

そこまで話、一旦互いに後方に飛ぶ。

（さて……これでは、華雄が引いてくれれば助かるが……戦闘は別だ）

猛将といわれる華雄だ、決着がつかなければ引かないだろう。私としては引いてくれて董卓にこの事を伝えてほしいのだけだ。

「……」

「……」

互いににらみ合いが続く。

私の方は『引いてくれ』という思いの入った視線だったかもしれない。

その時、華雄が私の懷に飛び込んでくる、完全に反応が遅れた。思わず目を閉じる。

「この件、董卓様にお伝えしよう」

「え？ ……あ、お、お願いします」

「分かった。だが、何もしないままに引く事は出来なくてな、すまん」

「え？」

次の瞬間、腹部に激痛が走る。

どうやら柄の部分で思いつきり突かれたらしい。息が出来ずにその場にしゃがみこむ。

「華雄隊、これより戦線を離脱する」

そう言っつて華雄は隊を纏めると素早く離脱していった。

それを見ながら私は呼吸が落ち着くのを待つ。

未だに腹部の痛みは引いてはいないが多少はマシになってきていた。

近くにいた兵士に肩を借り、私は立ち上がる。

さて、陣に戻ったら鷺島様に伝えておかないといけない。

董卓へ、私達が助けに行くという話を伝える使者をたてましたと。

く一刀sideく

弓での攻撃をすべきだという案はすぐに却下された。

やはり、一騎討ちは戦場の華だのそういう理由だった。

そうこうしている間に華雄は撤退するし？水関は落とされるしで

俺達には何も残らなかった。

？水関への一番乗りの戦功は孫策軍へ。

華雄の件では鷺島軍に対しての評価が上がっていた。

討ち取れなかったが猛将といわれる華雄と互角に戦えたのが大き

かったようだ。

愛紗か鈴々なら確実に仕留められてはずなのに……倒せないならするんじゃないよ。

と、口から文句が次々出てくる。

それに、さっきの軍議で次も俺達は最前線だ。それもあの鷺島軍の軍師のせいだ。

あいつが『あの時に我々が援軍を出さなければ、戦線は下がり袁紹様への被害を免れたかもしれません』
何て事を言うから、袁紹の奴がもう一回最前線に配置してきやがるし。

鷺島軍は最後方に配置される形になるし、何か散々だ。

だいたい、徐庶……なんでお前がそっちにいるんだよ。

お前は蜀の人間だろ、さっさとそいつから離れてこっちくればいいんだ。

……そうだ、今から説得しに行けばいいんだ。

俺が本物の天の御使いだって言えば、絶対にこっちに来るはずだ。それだけ、この天の御使いの名前の威力はあるんだ。

そう考えながら、俺は鷺島軍の陣へと歩を進めた。

この行動が俺自身の名前を潰す事になるとも知らずに。

13話 相手の思い通りに動くのって嫌だよね（後書き）

今回は一刀君、勧誘に向かって大失敗。

そして徐庶を大激怒させる言葉を吐きます。

あと、葵が久遠と武力が一緒というのは。

某SLG（最近新作が発表されましたね）内において

葵：64 久遠：63という事でこうなりました。

……燈も64で互角なんですけどね、戦える軍師2名。

ちなみに、徐晃が矢で死ぬのは演義の方です。

14話 引拔交渉（前書き）

【注意書き】

同作品内で、一刀君ですが鷺島軍の将の情報は持っておりません。
ですので軍議で会っている燈や？水関攻略戦で活躍した。
命、そして葵の事だけを知っているようです。

久遠と氷花に関しては全く知らない状態です。

……ふつうは情報で流れてくるんでしょうけどね。

14話 引拔交渉

〔燈side〕

「……兵糧も十分な状態か、今のままであればいいんだけど……」

兵糧の確認をしながら私はそう呟いた。

現在、？水関を攻略した連合軍は次なる標的である虎牢関へと向けて進行中です。

今は夜なので進行は止まり休息を取っている。

私達鷲島軍は、連合軍の中で最後方に配置されています。

どうやら、戦功をあげた我々を袁紹さんが不満に思い戦線から一番遠い位置に配置。

自分達の陣を少し前に出す形になってしまいました。

総大将が前目に位置するってどうなのでしょうね？

恐らく、？水関をあっさり突破出来た事で袁紹さんに持つてはいけないものを与えてしまったようです。

”慢心”を。

まあ、私達からすれば次の虎牢関は激戦地となるのは必至。

董卓軍も主力を配置し抵抗してくる事でしょう。

呂布・張遼・陳宮……名前を見ただけで並の兵士なら逃げ出す事でしょう。

……私だって、逃げたいですよ。

戦闘が始まれば、一番被害が少ないのは最後方に居る事になる私達なんですが……

流石に総大将が敗走、最悪討ち取られるという展開だけはあつてはならないので。

（そうならないように、久遠さんや氷花さんと話をしておかないと）

そんな事を考えていた。

さて……確認も終わつたし、鷺島様に報告しに陣へ……
そう思い、歩を進めようとした私に……

「ちょっといいかな？」

と、声がかけられる。

振り向くと、そこには劉備軍にいる天の御使いが立っていた。

「えっと、君って朱里や雛里と同じ私塾なんだよね？」

話したい事があると言ってきた彼が私に言った一言目がこれだ。
何となく誰の事なのかは分かりますけど……

「それは真名ですね、私の知っている範囲でその真名を名乗っている人は知りませんが」

そう言つと、彼は驚きの表情を浮かべた。
なぜだろう、私があゝの2人の真名を知っていると思つていたのか
な。

「その真名、恐らくですが孔明と士元ですよね」

「ああ……えつと、君は2人とは真名を交換してないのかい？」

どうやら、目の前の彼は真名の重要性がいまいち理解できていないようだ。

2人は教えなかったのだろうか……ため息をつきたい。

「真名と言うのはその人物の全てです、学友というだけで交換するものじゃありません」

「そうなんだ……てつきり……」

話が長くなりそうな気がします。

流石に、これ以上は時間をかける訳にもいかないでしょう。

「申し訳ありませんが、私に言いたい事は何でしょうか？ 別に孔明達との事を聞きたい様でもありませんし」

そう言つと、彼は少し考える仕草を見せる。

「……うん、このまま話を続けてても意味ないか……」

「ええ、私も早く鷺島様に報告すべき事があるので」

考える仕草のままの彼は、目をつぶると一回頷いた。

そして目を開くと。

「じゃあ、言わせてもらおうよ。徐庶、俺達の所や来ないか」

「……はあ？」

まさかの言葉に、私は少しだけ思考が止まった気がしました。
引き抜きだなんて、それも私を……

「君はここより、俺達の所に居た方がいいよ。朱里や雛里もいるんだしさ」

「……」

「絶対にここから離れた方がいいよ」

どうやら、彼は私を鷺島様から遠ざけたいらしい。
なんだろう、凄く腹が立ってきた。

「その話、孔明達にしましたか？」

「え？ いや……」

突然の言葉に、彼はまた、少し驚きの表情を浮かべた。

「そうでしょうね。もし、しているのなら2人はあなたを止めるはずですから」

「な、なんで……」

「私は2人が旅立つ時に、こう言っただけですよ」

そこで、一旦言葉をきり一呼吸入れて、再び口を開いた。

「次会う時は味方より、敵で会って2人の知略と戦いたいなあって……私は、2人を超えたいんですよ」

それは私の思い。

もし、2人とまた一緒に居たいと思っていたなら、あの時の鷺島様からの要請にも断っていただろう。

『会わなくてはいけない友人がいるんです』と。
恐らく、そう言っていれば鷺島様も久遠さんも説得はしなかったと思います。

そういう2人なので。

「ですので、私はここを去る気もありませんし、あなたの元へ行く気もありません」

そう私は断りを入れる。

これで、終わりだろうと思……ただ、気づいていなかった。

彼、北郷一刀の雰囲気が変わっていた事に。

（一刀side）

こんなはずじゃなかった。

俺の予想にこんな展開は無かった。

説得して、すぐに引き抜きに応じてくれるものだと思っていた。

目の前に居る少女、徐庶は俺の説得を断りやがった。

朱里と雛里を超えるだって？　ありえねえだろ。

そんな奴らと戦うぐらいなら、一緒に居た方がよっぽど楽が出来るってのに。

そういえば、朱里達に話したら止める様に言われるだろうって言うってたな。

そんな訳あるか！　あいつらは俺の事には絶対YESしか言わない。

多少は修正点は言うてくるけど、基本的に俺に逆らわない。

兎に角、徐庶を手に入れる、これは絶対だ。

あいつの所から軍師を無くす、鷲島の所には軍師は徐庶しかいないんだろ。

あとは武将の徐晃と満寵ぐらいだろ。

名前の知られてる将って言えば。

だが、徐庶に説得は無意味に見える。

何か手は……あ。

あるじゃないか……徐庶といえば、母思いで有名だったな。あれすれば一発じゃね？

「話は終わりです。では、私はこれで……」

そう言っ
て俺に背を向ける徐庶。

「ちよつと待てよ!!」

歩を進める徐庶の右手をつかみ、引つ張る。
引つ張られたはずみで徐庶の帽子が落ちる。

「痛! 何をするんですか」

そう言っ
て怒る彼女に俺はこう言っ
た。

「いいのか、お前の母親がどうなつても!」

く
燈 s i d e く

「いいのか、お前の母親がどうなつても!」

今この男は、何と言っ
た? 私の母親? どうなつても?

「ど、どつ
という事ですか」

「お前の母親、豫州の潁川郡に
いるんだろ……俺は、知
つて
るんだよ」

そう言っ
て、彼は笑みを浮かべる。
見ている人が不快になるその
笑みで。

「母は何の関係も無いでしょう!」

私は声を荒げる。

そんな私を彼はにやにやしながら見ている。

「おいおい、大きな声出すなよ。それに、交渉では使える物は何でも使わないとな」

「……そんな事、孔明達が許す訳が無いでしょう」

そうだ、あの友人2人は思いついてもそれを口に出す事はないだろう。

そして劉備という人物はこの様な事を嫌うと聞く。

ならば……

「ばれない様にやるよ。こっちに来てもらう訳だから、君の母親にね」

何が来てもらうだ…無理やり連れて行くつもりなのだろう。

この大陸、金さえ貰えれば何だってやる奴らがいる。

母を見捨てる? そんな事、出来る訳ない……

鷺島様を捨てる? 私は……

視線を彼に移すと、さつさと決めるよと言わんばかりの不機嫌そうな表情。

選択の余地は……ない。

「私がそつちに行けば、母に危害は……」

その言葉に彼の表情は勝利を確信した表情に変わる。

「ああ、お前がこつちに来るなら何をしないさ」

その言葉の真意は分からない。

だけど、母の事を考えれば……

申し訳ありません……鷺島様、久遠さん、みんな……

「わ、私は……」

後は、あなたにお仕えいたします。

そう言うだけだった、でも、私は言えなかった。

なぜなら。

「ちよつと待った！ 燈、そんな事を言う必要はないよ」

という声が聞こえてきたから。

声の方を向くと、そこには久遠さんが立っていました。

久遠 side

いやあ、本当に、間に合ってよかった。

何か燈の帰りが遅いから心配して見に来ただけ。

もう少し遅かったら、燈が劉備軍に引き抜かれる所だったわあ。

「く、久遠さん」

「大丈夫だよ燈」

そう言って、僕は燈の所へと近づく。

彼、北郷の力が弱まったのか燈は少し暴れて拘束から逃れた。

僕は落ちていた燈の帽子をとり、手渡す。

「全く、同じ天の御使いって言われてるのに暢介とえらい違いだねえ」

「だ、誰だよあんた」

暢介と比べられたからかな、ちよつと怒って彼は言ってきた。

こついう点も暢介とは違うんだよねえ。

「僕？ この鷲島軍の軍師をやらせてもらってる司馬仲達という者です」

名前を聞いて彼の表情は驚きに変わる。

ほんと、コロコロ表情が変わるなあ……

「人の名前で驚くのは後でいいからさ、今からそちらの陣へ参りましょうか」

「は？ 何で俺の陣へ？」

おやおや、こいつは自分のやった事が分かっていないようだ。

「あなたの行った事を劉備殿に伝えないと。我が軍の軍師を引き抜こうとし、その者の母を人質に取ろうとしたと」

そう、彼が行った事は脅迫だ。

引き抜きを断ったらお前の母親がどうなるか分かってるかという訳だから。

これはしつかりと、劉備陣営の方々にも説明しなければ。

どんな風な目で見られるんだろう。

今まで信頼していた御使いが実はこんな人でしたと分かった時。何だろう……少し見てみたいかも。

「ちよ、ちよつと待てよ」

「ああ、それとも次の軍議の時に全員の前で発表してあげましょうか、さぞ評判が落ちる事でしょう」

軍議でこの事を報告すれば、皆が彼を見る視線が変わる事だろう。まあ、同時に身内からの評価も大いに落ちるだろう。

「それと、これが一段落ついたら大陸中にこの話を広めようかな。どう？ 君のやった事はこんなに大きな事になるよ」

私の情報網、甘く見ないで下さいよ。そう続けると、彼の表情が変わる。

どうやら、自分の立場が分かって来た様で彼は焦り始めていた。まあ、それだけの事をやったただけどさ。

どう考えても、北郷一刀だったか？ 彼の名声は地に落ちるとい
うか決るね。

自業自得なんだけども。

「ま、待つてくれ。それは勘弁してくれ」

「いやいや、燈にあれだけの事をしておいてまさか黙ってろって
？ そんな事出来る訳が」

「頼む！ さっきの事は、俺もカツとして言っただけなんだ、本
気にしないでくれ」

どうやら、自分の中では都合のいい様に話を作っているようだ。
さっきの事は断られたからイラッとして言っただけで本心ではな
いとの事らしい。

……納得できないけどねえ。

イラッとしたら相手の母親を使って脅迫に近い事をやるっていう
のかねえ。

その後も、『言う！』『言わないで！』の言い合いが続く。
そんな中で。

「……母に危害を加えないと誓うなら……私は構いません」

燈の言葉に彼は何度も頷く。

まあ、燈自身がいいというなら私がどうこうするつもりはないけ
れど。

言わないでと何度も念を押し。
彼は自分の陣へと帰って行った。

天幕へと戻る途中。

「燈、今回の戦いが終わった後に燈の母親を南郷に連れて帰ろうか」

そう、僕は燈に言った。

燈も同じ事を考えていたのか頷く。

さて、今回の件は鷲島軍内に留めておくでしょう。

一応、それが約束なのだから。

く一刀sideく

もう少しだった、もう少しで徐庶を手に入れられたのにあの女、邪魔しやがって。

それにしても何であいつの所に司馬懿がいるんだよ。
あいつのせいで何もかも滅茶苦茶だ。

ただ、今回の事は言わない様に出来たのは大きい。
こんなのがばれたら間違いなく俺は桃香の所にはいられないからなあ。

それにしてもあの女……司馬仲達って名乗ったよなあ。

それって司馬懿の事だろうし、何でそいつが鷲島の所にいるんだよ。

絶対、あいつもこの時代の事を知ってるはずだ。

だからあんなに人材が集まるんだ、そうじゃなきゃ偽者の天の御使いの元に来るかよ。

そう思いながら俺は、陣へと戻っていた。

14話 引拔交渉（後書き）

どんな状況でもこの交渉方法で上手くいくわけがないですね。
という見本な形。

一刀君は暢介が三国志を知っていて優秀な人材を集めていると思っているようです。

まあ、そう考えないとおかしい配下に見えなくもないですね。

次は虎牢関と行きたい所ですが、暢介達は殆どからまないんですよ・w・；

なので洛陽に行くぞという所までになるかと思っています。

洛陽に入って董卓救助に向かう暢介達。

そこでまた、一刀君が入り込んできて大混乱という展開・w・；

あら、孫策や曹操達ともからみ書きたいのになあ……

15話 大事な時に限って邪魔は入ります（前書き）

董卓への説得文。

考えれば考えるほど、妙な感じになっていきます。

練れば練るほどに駄目になっていくってどういう事よ？

と、自分に疑問視。

さて、後書きにちょっとアンケートの様なものを置いておきますね。

15話 大事な時に限って邪魔は入ります

（暢介 side）

現在、連合軍は虎牢関攻めの真っ最中。

しかし、俺達は後方にいるので戦闘に加わっていない。

まあ、袁紹の救援という形で命の部隊を向かわせているが、本隊の俺達には影響がない。

「しかし……北郷がねえ」

そんな中で俺が考えていたのは昨夜の燈の引き抜き騒動の事だった。

劉備軍にいる御使い、北郷一刀が燈に対して脅迫に近い形で引き抜こうとしていたらしい。

結果的には久遠が来た事で引き抜きは失敗したらしいが……

「まさか引き抜きがあるとは思わなかったからなあ」

「まあ……うちに来ないか？　みたいな感じでの話しはあるかもしれないけどさ、まさか脅迫される事は考えないからね」

隣に立つ久遠が顔を顰めながら言う。

「どうやら、昨夜の事を思い出したようだ。」

ちなみに、燈は昨夜のショックが引きずっているようで休んでい

る。

さきほどの軍議にも久遠を連れて行っただけだ。

いや……良く考えたら、久遠はうちの筆頭軍師の立場だ。

本来は最初の時から軍議にいなきやいけないのに……あの状態だったからなあ。

そういえば、軍議の際に久遠が名乗った際、曹操の視線が気になったな。

久遠もあからさまに視線を逸らしていたし、何かあったのかねえ。まあ、今聞かなくてもいいか。

「あの時は流れで約束したけど、やっぱりあの軍議の時に昨夜の事を言った方が良かったかもなあ」

昨夜の約束、それは北郷が行った事を劉備軍、および連合軍の誰にも言わない様にというものだった。

「燈の様子を見てたら、あんなのの相手をする気も無かったし」

「まあ、約束してしまった以上は話してしまえば、約束破りで色々言われそうだけどな」

「それが嫌なんだよね。あいつと話す気にもならないし……」

そう言っている最中も、連合軍は虎牢関への攻撃を続けている。

「ああ……この位置からじゃ、張遼や呂布の捕縛は無理だよねえ

……」

暗い雰囲気を感じたのか、久遠は話を切り替えた。

「そうだな……呂布は劉備軍、張遼は曹操軍に当たってるみたいだな」

「ゲツ……もし、呂布を撃退出来たら、あの御使い。絶対自分の手柄の様に言ってくる……間違いない」

また北郷の名前が出た事で久遠は頭を抱える。

うん……俺も、何となくその映像が見えてくるな。

撃退したのは武将なのに……ああ、北郷も最前線で呂布と打ちあったなら別にいいんだけども。

流星にないよな……

「張遼に関しては、曹操は絶対に欲しがってるから何があっても捕縛するだろうし……後は陳宮とか賈馱か……」

「高望みは止めた方がいいぞ。俺達はいくまで董卓救助が最優先なんだから、人材求めすぎて助けられませんかって展開はやめてくれよ」

「分かってるよ。ああ……でも、軍師の賈馱は董卓の傍にいるだろうから助けられたら2人とも手に入るかも……ってまた軍師が増える」

武将の量は変わらないのに軍師は増える。

喜んでいいのか、悪いのか。

というか、話を切り替えるつもりが、また久遠が悩み始めてるし。

「……あ、虎牢関が落ちてる」

視線を前に向けると虎牢関に「孫」の旗が見える。
どうやら、孫策軍が一番乗りで落としたらしい。

連合軍は無事に虎牢関を突破した。

かなりの被害は出てるが、それは相手も同じ事だろう。

虎牢関を抜ければ次は洛陽……董卓がいる。
俺達は洛陽に向かう為にこの場所に居るんだ。

「ここからが本番だ……」

そう、俺は呟いた。

袁紹軍に救援に言っていた命によると、袁紹軍が戦闘を開始した際。

袁紹は馬から落ちて頭を打って気絶していたらしい。

ここまで聞いたら、『何やってんだ』で終わるのだが……
命曰く、袁紹が馬から落ちた瞬間、今までいた所に矢が撃ち込まれていたらしい。

落ちていなければ頭を射抜かれて即死だったでしょうと命は言った。

なんて運がいい人なんだろう……鷺島軍、全員の思いが一致した。そしてもう一つ、命は戦闘中に華雄の部隊の兵士と戦闘になったらしい。

その際に「華雄様より、伝言は伝えた」と言われたそうだ。つまり、俺達が董卓を助けるという話は本人に伝わったらしい。

「張遼は曹操軍が捕縛したみたいだね。あと、呂布は戦線離脱してる、陳宮も一緒に離脱したようだね」

天幕内で氷花が報告を行う。

現在、久遠以外の全員がここに集まっている。

久遠は連合軍の最後の軍議へと向かっている。

総大将の袁紹が気絶中なので、軍師のみ集まって下さいという知らせが来たからだ。

「任せておいて、洛陽への一番乗りは僕らに任せる様に仕向けてくるよ」

そう、久遠は笑みを浮かべて言った。

一番乗りじゃないと董卓救出の難易度は跳ねあがる。

否、不可能と言ってもいいかもしれない。

洛陽に入り、董卓の首を取る。

それこそが自分達の名声を上げる最高の代物と考えている者もいる。

そういう奴らと鉢合わせになる訳にはいかない。

一番手で洛陽に入り、董卓を救出……そして、董卓は自害したとかそういう理由をつけて袁紹を納得させる。

「まあ、久遠ちゃんに任せておけば何とかなるんでしょうけど……」

「どうした氷花？」

「ちよつと劉備軍が面倒かもしれないなと」

「劉備軍が？」

劉備軍が面倒、その言葉に葵が氷花に聞く。

「はい。劉備軍も洛陽への一番乗りを狙ってるらしく……まあ、単純に董卓の首狙いみたいだけどね」

「確かに、一番大きな名声を手に入れる事が出来るだろうからね」

「そうならない為に、私達だけが一番手で洛陽に入る。これが必須になる訳ですが」

「それは……久遠次第か」

「ええ、上手く持っていてくれればいいのですが」

そう、氷花は言う。

く久遠sideく

だー！！　なんで軍議の席にあの北郷がいるの。

あいつ軍師なの？　軍師じゃないでしょ。

ただの看板が何、えらそうな事を言っただけで自分達が洛陽に一番に行くんだって発言してるの。

何か、俺が呂布を追い払ったみたいな話に聞こえるけども……何もしてないよね。

勝手に話を自分中心にしている……なんなんだろ、この人。

ああ、軍議内の雰囲気が悪くなる……どうしたもんかな。

劉備軍の軍師も「はわわ」って言って慌ててるし、同情するわ……

…馬鹿が上司だと。

自慢話が終わったのか、北郷が黙ると軍議が再開された。

ただ、勝手に発言する事があり、その都度、軍議が止まって効率が悪すぎる。

ああ、曹操軍の軍師さんが殺意の目で見てる……って氷花と良く似た服着てるなあ。

それにあの猫耳頭巾も……氷花の知り合いか何かかな？

まあ、今調べる事じゃないね。

軍議の方は、最終的には鷲島軍と劉備軍を最初に向かわせる事になった。

本当は、僕らだけが先に向かう様に行きたかったのだけど。

「1軍だけ向かわせるのは良くない、俺達も行く」と御使いが勝手に発言。

もう、相手をするのも面倒になったのか袁紹軍の人が。

「では、劉備軍にも先陣を任せます。鷲島軍もよろしいですね」と、『お願いします』と目で訴えてきたので頷くしかなかった。そういう目に淒く弱いのも……僕。

満足そうな表情で戻って行く北郷と僕の視線に気付いたのか何度も頭を下げる軍師。

いい子だ、きつとこの軍師は淒くいい子なんだろうな……

そして僕は半分は成功し、半分は失敗したこの結果を持って自分の陣へと戻って行った。

……はあ……

〈暢介side〉

「そっか、劉備軍も一緒か……どうする」

「どうもこうも、とにかく素早く董卓救出、そして身代わりを立てて董卓が亡くなった事を伝えるという事でしょ」

軍議の結果の報告を受けた俺達はどう動くべきかを考えていた。

が、結論は全く出てこなかった。
まあ、元々が一発勝負の場面だ……その時に最善な道を選んでいくべきなのだろうが。

「皆、董卓を救出する事が俺達の最大の目的だ。絶対にやり遂げよう……」

その言葉に全員が頷く。

これを失敗してしまえば今までの事が全て無駄になってしまう。
失敗だけは許されない……

～洛陽～

洛陽へ向かう鷺島軍と劉備軍。

その道中で、暢介は劉備から何度か話しかけられる機会があったのだが……

事あるごとに北郷一刀に邪魔をされてしまい、暢介は劉備軍の間とは会話をする事もなかった。

洛陽が視界に入るとそこから煙が立っているのが見え、両軍は急いで洛陽へと入った。

洛陽の中では賊が入りこんでおり、強奪などを行っており悲惨な状態だった。

鷺島・劉備両軍は急いで賊殲滅戦へと入った訳だが……その中で暢介は氷花と共に宮廷へと向かう事になる。

宮廷へ向かう2人の背後に誰かがついてきている事も知らず……

〈暢介side〉

俺は今、董卓を見つける為に宮廷内を走り回っていた。
何と言うか……凄く広いです。

「流石に大声を出す訳にもいかないし……」

「当り前です……しかし、どこに隠れているのやら……」

隣にいる氷花も息が荒い。

猫耳頭巾も今は取っており、炎の様な赤髪が見えている。

「人っ子一人いなさそうだし……ん？ どうした氷花」

辺りを見回していると、氷花の視線がある一点を見つめていた。
俺もそちらを見ると……そこには2人の女の子の姿が見える。

「氷花……あれは」

「董卓と賈駆ですね……やっと、見つけた」

氷花の言葉に俺は急いで2人の元へと走り出した。

2人の元まで走った俺は、2人に自分が君達を助ける為に来た鷲

島軍の人間だと告げた。

まあ……俺がその鷺島なんですけど、それは言わなくても通じるだろうから。

服はまたスーツなもんで。

後ろではバテバテの氷花が呼吸を整えている。

悪いな氷花、でも、ちよつと体力ないみたいだな。

南郷に戻ったら体力強化な。

「なぜ……私を助けようと……」

その内、とても儚げな印象を持つ少女が呟くように話す。

氷花の話だと、こちらが董卓らしい。

そして、董卓の横に立ち、今でも警戒心全開の子が軍師の賈馱らしい。

「檄文の中身が真実かどうか、調べた結果。君はその内容とは正反対の人物だった……それが理由かな」

「ですが……」

彼女の言いたい事が分かる。

例え、檄文の中身が嘘でも自分を殺し、その首を取れば名声が手に入る。

もし、失敗すれば董卓を助けようとしたとして名声を無くし、次の標的にされるかもしれないのだ。

直接的な関わりの無い自分を何故助けるのか、そういう事なのだろう。

「俺は、無実の人間の首を取って名声を手に入れる気も無いし、殺す気も無い」

「それに、もしも自分の近くで助けられる人がいるなら助けて上げたいって思うから……ここにいるのかな」

それにさ……そういうと俺は少し呼吸の落ち着いてきた氷花の頭に手を置く。

「よ、暢ちゃん」

お、氷花の驚いた声が聞こえるとはレアケースかもしれない。
まあ、今はそういう話じゃないな。

「信頼できる仲間がいる……だから、失敗する事なんて考えてなかったよ」

そう、笑顔で言う。

実際は失敗することだって考えている……普通は、そうだろ？

俺は、ヒーローでも神様でも無い。

普通の人間で、今までの人生で沢山の失敗をしてきた訳だから。

だから今回も失敗の恐怖をずっと抱えながら動き続けた。

そして今、その恐怖が無くなってきているのも感じていた。

その答えに董卓は少し呆気に取られていたが。
何かを感じ取ったのか少しだけ笑みを浮かべた。

「分かりました……わた「ちょっと待って」」

董卓が逃げる事を告げようとするのを賈馱が遮る。
そつえば、さつきから賈馱の警戒心が変わっていない。

「詠ちゃん……」

董卓が賈馱の恐らく真名を呼ぶ。

多分、彼女も俺への警戒心が解けていないのに気付いたようだ。

賈馱は董卓に対して首を横に振る。

ああ……駄目だったか、と俺は思ったのだが。

「違うよ月。僕もこの人達は信用してる……でも……」

そついうと賈馱は俺達の後ろの方を指さす。

その位置は董卓からは死角になっており見えない。

だから、董卓は賈馱の警戒心が俺達に向けられていると思い込んでいた。

それは俺達も同じで、まさか背後に誰がいるとは思っていなかったからだ。

「あいつは……あんだ達の仲間？」

その言葉に、俺と氷花は振り返る。

そしてそこに居る人物に驚く、そいつはここにいるはずの無い人物だからだ。

白く輝く服を纏ったそいつ、北郷一刀が久遠曰く「人を不快にさ

せる笑顔」と評されるその表情で立っていた。

「へえ、そいつが董卓か」

その声が宮廷内に響く。

どうやら……董卓救出は、まだかかりそうだ……

15話 大事な時に限って邪魔は入ります（後書き）

さて、こんな状況でも登場してくる一刀君。

ある意味で主人公補正？ それとも嫌な奴補正？

でも、こういう場面で出てくる人ってよくいますね。

さて、アンケートなのですが。

連合軍編は次回で終わりなのですが、その後のオリキャラについての質問です。

質問：登場するオリキャラは。

？：少なくとも、その当時に存在している人が好ましい

？：まだ産まれていない人でも構わない。

どちらがよろしいでしょうか？

16話 一時的な別れ（前書き）

アンケートありがとうございました。

結果としては2の満票でした・w・；
さて、色々な将を探してくるか。

あ、登場はまだ先になると。

そして、今回はちょっとした別れが。

16話 一時的な別れ

〈暢介side〉

「へえ、そいつが董卓か」

目の前に居る北郷に俺は、自分の不注意を呪った。

俺と氷花がここに向かうのを見て追いかけてきたのだろう。

俺はこういう状態にならない為に背後に気をつけておかなければいけなかったはずなのに。

全く、警戒もしていなかった。

「お前ら、董卓を助けるって言ってたよなあ。それってまずいんじゃないの？」

未だにヘラヘラしながらそう言ってくる北郷に思わず。

（まずいに決まってるだろ）

と、脳内で突っ込みを入れておいた。

「俺が一言、袁紹に『鷺島軍は董卓を助けた』って言えば、どうなるかなあ？」

「そ、それは……」

「とりあえず、次の標的はお前らになるよなあ」

優位に立った事を理解している様で、北郷は脅しに入る。

恐らく、こちらからどうすれば見逃してもらえるかの条件を貰おうとしているのだろう。

見逃す為の条件、まずは董卓を殺し、その首を自分の手柄として差し出せとか。

あるいは前の失敗から燈を渡せという事になるのかもしれない。

いや……もしかしたら、久遠や氷花も出せと言ってくる可能性も考えられる。

こちらが完全不利な状況だからだ、こっちはどんな条件でも受けざる得ない。

それに……

「……」

「おいおい、何とか言えよ。まあ、俺としてはこのまま黙っててもいいんだぜ。俺を探しに誰か来るかもしれないからな」

そうだ、北郷がいなくなった事に気づけば劉備軍の誰かが探しにここに来る可能性が高い。

それが、関羽か張飛なら余計に厄介な事になる。

もしも戦闘になれば俺と氷花では即、殺されるだろう。だから……この話はすぐに決着させないといけない。

「望みは何だ？」

「ん？ 望みねえ……とりあえずは、徐庶を頂こうかな」

「燈を……」

予想通りか、よっぽど燈を手に入れたらしいな。

「ああ、それと董卓は助けてやってもいいぜ」

「え？」

「ああ、ついでにその隣に居る子も一緒に……流石に俺も人を殺すのは気分良くないしな。俺が保護してやるよ」

「……」

意外な答えだったが、北郷の表情を見れば何故董卓を助けようとするのかが分かる。

その目つき、どうやら2人に興味があるらしい……もちろん、良い意味じゃない。

こいつ……人を、女性をそういう目でしか見れないのか。

思い出せば、連合の軍議の際にもこいつはこの目をして周りを見ていたな。

おかげで……こいつの評判が落ちっぱなしだったけれども。

「俺の望みを一つでも断ったら俺は袁紹、連合軍の全員に、この事をばらす」

もとより、こいつは俺に拒否させる選択肢を与える気は無いらしい。

燈を差し出して、更に董卓も北郷に渡す。

「どうするんだ？ 答えは一つしかないと思うんだけどな」

確かに、答えは一つしかない。

正直、「ふざけるな！！」と叫びたいぐらいだ。

だが……

「ククク……」

そんな時、俺の横にいる氷花が笑い始めた。

その姿に北郷は『こいつ壊れたか？』という感じの表情を見せる。

「フッフ……ハハハ……」

笑い続ける氷花。

ただ、笑いながらもその目の光は消えていない……正常だ。

「いやあ失礼。北郷さん、あなたの考えが全て叶うといいですね

……まあ、無理でしょうね」

その言葉に北郷の表情が変わる。

「無理だと」

「ええ、あなたは私達がその願いを聞かなければ袁紹に伝えと言いましたね。でも、それを袁紹が信じるでしょうか」

「どういう意味だ」

「簡単な事です。話す本人と相手の信賴關係が内容の信用性を左右します……あなた、連合内で信用があるとでも？」

確かに、信用されている人間からなら明らかな嘘話以外ならその話の信用性を高く取ってくれるはずだ。

逆に全く信用されていない人間からだ、信用性の高い情報でも『本当か？』と疑ってしまうだろう。

北郷の連合内での評判は悪い。

さつきも言ってたが、いやらしい目つきや言動などなど。

その為か、多くの勢力は劉備軍と話す時は北郷がいない時を狙って行っているらしい。

そうでないと北郷がいちいち口を出してきて面倒になるらしいからだ。

「それに、その話に出てくる相手は鷺島様です。その彼とあなたは天の御使いと言われています」

「天の御使いは俺だ！ そいつは偽者なんだよ」

そう叫ぶ北郷に氷花は首を横に振る。

「それを決めるのはあなたじゃなく私達です。劉備達があなたを天の御使いと言った様に。私達は鷺島様が天の御使いと考えており

ます」

「だから！」

「あなたは事ある事に彼を敵視しているのは連合内でも知られています。そんな中でこの様な事を言えば袁紹もこう思つでしょう」

……嘘をついてまで彼を落とし入れたいのか……とね。

氷花がそう言うと、北郷の表情が怒りに変わる。

「俺は嘘はついてないだろ！」

「そうですね。ただ、相手が信じるかと言うとそれはまた別の話でして……」

そこまで言うとき氷花の表情が少しだけだが、曇る。

そうだが、ここまでで北郷を優位な立場から引き摺り下ろしている。まあ、彼が普通にしててそれなりに印象が良かったらこんな話にはならなかったわけで。

ただし、だからと言って彼がこのまま見逃す訳がない。

氷花……何かあるのか？

視線を北郷に移すと、少し変化が見られた。

先ほどまでは怒りの表情だったが、少し冷静になったのか表情は落ち着いて見える。

「北郷さん、あなたは先ほどこう言いましたね。董卓とこの子を助けてもいいと」

「あ、ああ……確かに言ったけど。」

氷花の言葉に北郷が頷く。

「では、こうしましょう。あなたと私達、それぞれに彼女達の1人を助けるという形を取るというのは」

「え？」

氷花の提案に北郷が声を上げ、驚きの表情を浮かべる。

声は出さなかったが、俺も後ろに居る2人も同様の表情を浮かべる。

「私達が2人を助ければ、あなたがそれを良しとしないでしょ。逆もまた同様です」

ならば……そこで氷花は一呼吸を入れる。

「互いに1人を助けるようにすれば互いに他の勢力に隠さなければならぬ事を抱える事になります」

要するに、董卓と賈馱を俺と北郷がそれぞれ助けて匿うという行為を行う事で。

互いに知られてはいけない部分を持つという事になる。

しかし……それは、董卓を助けた方にしか意味がないのではないだろうか。

賈馱に関して言えば、仕える場所が無くなったので今はここに仕えているで言い逃れが出来るが。

董卓はそうはいかない。

「……分かった、それでいいじゃないか」

北郷の答えに氷花は頷く。

「ありがとうございます。どちらに向かうかは彼女達に任せても構いませんか？」

2人に選択権を与えようと言う氷花。

北郷も頷く、恐らく、どちらでもいいという事なんだろう。

「董卓……賈馱、ごめん。今の状況を抜けるにはこの案で納得させるしか無くて」

2人の方を向き、氷花は頭を下げる。

その表情は暗い。

「いえ……そんな事は……」

董卓の表情も暗い、賈馱は何かを考えている様子だった。

「決まった以上は、どちらかが劉備軍に行かなくてはいけない」ボクが行くよ」

俺が喋っているのを遮って、賈馱がそう宣言した。

「詠ちゃん」

董卓が驚きの表情で賈馱を見る。

「月をあんな男の所に行かせる訳には行かない、絶対に助平な事をするに決まってる」

まあ、ああいう目つきで見ればそう思うよな。

……北郷本人もそのつもりかもしれないが。

「だからボクがあいつの所に行つて、月は鷺島軍に行くんだ。それが一番いいから」

そう言つと賈馱は少し笑みを浮かべて董卓を見る。
その笑顔は弱々しい。

「ごめんね月。最後まで一緒のつもりだったけど……少し離れ離れになるから」

「詠ちゃん」

「大丈夫。別に取つて喰われる訳じゃ……喰われるかもしれないけど、ボクは大丈夫だから」

「……」

賈馱は視線を俺と氷花に移し頭を下げる。

「鷺島、荀攸……月の事、お願いします」

「分かつてる。俺達が責任を持って董卓を守るから……」

「ええ、私達が彼女を守るわ」

俺達の言葉を信じてくれたかの、賈馱は頷くと北郷の方へ歩き出した。

董卓じゃない事が少し不満なのか一瞬、表情が曇ったが、まあいいかと思っただのかその表情は消えた。

「分かってると思うが、董卓の事、他国に流す事は止めてくれ。それが約束だ」

「ああ、分かってるさ。約束だもんな」

約束という言葉に、少しだけ力を入れて返してきた北郷。何だろつか、淒く嫌な予感がする。

「じゃあ、俺はこの子連れて行くぜ。さあ、行くぞ」

「分かってるわよ」

そう言っただけで2人は俺達の前から去って行った。

少しの時間、無言の俺達だったがこのまま、ここに居る訳にも行かず董卓が自害したという状況を作り、宮廷を後にした。

連合の勢いに、もはやこれまでと考えた董卓は自室に火を放ち自害して果てたという設定にしておいた。

その為、まずは董卓の部屋に向かう最中に宮廷内にある遺体を部屋に入れて火を放った。

これで、調べて行けば部屋の中にある遺体が董卓のものとなるだろう。

この時代には鑑識も無いし、DNA鑑定なんて代物もない、偽者の遺体が本物になる事も出来るはずだ。

次に董卓の服を文官の着る服に着替えさせて外に出ていく。
流石に彼女の服のままでは目立ってしょうがない。

そのまま、俺達は自分達の陣に戻ってきた時、皆は俺達が無事である事を喜んだ。

ただ、内容を聞いて少し落ち込んだけど。

「何であいつは、僕らの邪魔をするんだろ」

タイミング良く乱入してきた北郷に嫌悪感を抱いている久遠。

「私にもっと武があれば……」

自分の武の無さがあの状況下において早期決着を狙わざる得なかった事を悔やむ氷花。

普段なら率先して暗いムードを払う2人が落ち込んでいる中で。

「で、でも董卓さんを助けられたんですから良かったと思うべきじゃないでしょうか」

と、葵が言う。

確かに、俺達の目的は董卓救出でそれは成功しているんだ。

あとは董卓を無事に俺達の本拠地である南郷に移せれば終わり。

ただ、北郷の乱入と賈馱が北郷の所へ行つた事で失敗したと思つたのだろう。

成功だつたはずですよと葵が久遠と氷花を励ます。
すぐに2人は立ち直りを見せ始めていたのだけれど……葵よ。

「氷花さん、南郷に帰つたら武を磨く為に私と命ちゃんと一緒に訓練しませんか？」

それは酷つてもんだぞ。

氷花の奴、凄い嫌そうな表情だ……初めて見た。

その後、袁紹の元へ董卓は自害し部屋に火を放つたため、消火後に入ると既に遺体は真黒になっていた。

ただ、近くにこれが董卓が頭に乗せていた物を見せる事で納得してもらつた。

その際に「やはり袁紹様を恐れて、これまでと思つたのかもしれないですね」と久遠が言つたのが良かったのかもしれない。

凄く機嫌よかつたからなあ……

その日の軍議で洛陽をある程度復興させてから、帰る事になり配置が伝えられた。

俺達の担当の隣は……曹操か……知つた瞬間に久遠が凄く嫌な顔

をした。

曹操と過去に因縁でもあるのか？

〔華琳 side〕

「鷺島軍の隣ね……都合がいいわね」

復興の配置を見た私は、そう呟く。

あの軍には私の欲するもの、優秀な人材が多く存在している。

徐庶・満寵・徐晃・荀攸、彼女達は私の所においても優秀な分類に入と思う。

そして何より……

「やっと会えたわね……司馬懿」

あの時の事を忘れる事は無い。

今までは、優秀な人材を見つけた際に手紙を送る、もしくは実際に会って話すなどを行えば成功が多かった。

だから彼女にも手紙にて仕官要請を行ったのだけれど……

『お断りします』

という、一行で終わってしまったのだ。

本来なら激怒するべきなのかもしれないけれど、これはこれで面白いと思っただけ。

代わりではないが、彼女の姉である司馬朗が私に仕官し十分な働きを見せている。

この連合の直前に司馬朗に会い、鷺島軍にいる司馬懿を引きぬけるだろうかと相談をした所。

『無理ですね』

という、一行で返された。

何の言つのか、司馬家の返答はこれが基本なのかしらと思ってしまったわ。

無理と言われているが、本人と実際に面と向かって話してみれば引きぬける道が見えるかもしれない。

待つてなさい司馬懿、私は、狙った獲物は逃がさないのよ。

特に、優秀な人材となればなるほどにね。

翌日、私は配下である春蘭、秋蘭、桂花を伴って鷺島軍の天幕へと向かっていた。

鷺島軍へ向かうと言った時に桂花が凄く嫌な表情を浮かべていたけど。

まあ……男嫌いだからしょうがないわね。

そして、鷺島軍の天幕に入った私達は目の前の光景に思わず目が見えなくなったわ。

そこには……

「だから！ 私の胸を触らないでよ氷花！」

と顔を真っ赤にして叫ぶ司馬懿。

それを見て顔を真っ赤にし、「ふわ〜」と言っている徐庶。
別の所では呆れた表情を浮かべる鸞島と満寵と徐晃。

「む！ 久遠ちゃん、少し大きくなった？ お姉ちゃん、ちょっと嬉しいかも」

と、司馬懿の背後から出てきたのは……桂花？ 桂花に良く似ている。

服装なども桂花のその色違いで猫耳頭巾。

その子が楽しそうな表情を浮かべている。

まさか、彼女が荀攸？ 桂花とは全く違う感じを受けるわ。

「あ……ああ……」

横から変な声が聞こえたので見てみると、桂花が荀攸を指を指していた。

荀攸も桂花に気付いたのか、笑顔で手を上げる。

「あゝ久しぶりだね、桂花おばさん」

その言葉に、桂花は。

「あんた何してるのよ！！ 氷花！！」

と、大声を上げていた。

16話 一時的な別れ（後書き）

桂花からしてみたら、自分の姪が同じ軍の将の胸触ってる最中。
怒鳴りたくなりますわな・w・;

さて、董卓と賈馱をバラバラにしてみました。

あの状況ではああするしか道は無かったのではないかと思つての判断です。

もうちょっと粘つて関羽辺りが来るのを待った方が良かったかしら？

17話 忠告する際は信用を持っておきましょう（前書き）

今作に置いて、鷺島さんと北郷くんは仲が良くなる事は無いのであしからず。

休みの日に書けばよかったのに色々大変でした・w・；
それに、何かあんまりいい出来じゃない気がします

17話 忠告する際は信用を持っておきましょう

（暢介side）

いやあ、曹操にとんでも無いものを見せてしまったなあ。

まあ、俺達からすれば日常的な光景だった訳だが。
だからって見慣れちゃいけないよなあ……流石に。

現状では頭に大きなタンコブを作った氷花が。

「うおおお……」

と、呻きながら蹲っている。

そして、拳骨をした久遠の顔は真っ赤になっている。

まあなんだ……氷花よ、自業自得って事にしとくわ。

曹操がここに来た理由は、久遠達に興味があり自分の所へ来ないかという誘いだった。

まああれだ、引き抜きてやつだな。

流石に相手の天幕に来てそれを告げてくるとは思わなかったが。

引き抜きの為、話をさせてもらえないかと言う曹操に対して俺は。

「ああ、構わないよ」

と、そう返した。

その答えに皆、曹操軍の人達も含めて驚きの表情に変わる。

勘違いして欲しくないのと言っておくけど、別に俺は皆が引き抜かれてもいいとは思っていない。

ただ、曹操は久遠達を高く評価していると言う事。

それは久遠達の主である俺にとって嬉しい事。

それに対して俺が出来る事は曹操に彼女達と会話をする機会を与える事。

それぐらいしかない。

何も頭ごなしに「彼女達を出す気は無い！」と言うつもりもないので。

「ただ、選ぶのは彼女達だ。無理やりに連れて行くのは勘弁してくれ……例えばだが、彼女達の親を使ったり」

と、俺は北郷の取った策を曹操が使わないか確かめる為にそう言う。

すると曹操の後ろに居た3人の内の2人、荀？と夏侯惇が怒鳴る。

「貴様！ 華琳様がその様な卑怯な方法を取るはずがなかつ！」

「そうよ。そんな事を考えるのはただの馬鹿のやる事よ！」

という答えが返ってきた。

北郷……どうやら、お前は馬鹿らしいぞ。

「2人が言った通りよ。私はそういう方法は取らないわ」

曹操もその様に返してくる。

「分かりました。では、俺は外に出ておいた方がいいでしょう。その方が彼女達もいいでしょうし」

そう言つて俺は天幕の外へ出る。

彼女達がどういう進路を取るか、それは彼女達自身が決める事なのだから。

〔華琳 side〕

引き抜きの機会を与えられた私は早速、鷺島軍の将達と話をした。結果から言つと全滅、誰も話に乗って来なかったわ。

まず司馬懿、彼女は以前断られており今回も難しいだろうとは予想していた。

案の定、開口一番。

「僕は、鷺島様に忠誠を誓っております。ですので、あなたの元へは行けません」

と言われ、私は説得する間も無く拒否をされた。

他の徐庶、満龍、徐晃の3人も引き抜きを拒否、忠誠心の高い将達ね。

何が彼女達を鷺島暢介への忠誠心に向かわせるのかしら。

残るは荀攸。

彼女はまだ頭を押さえていたわ……結構本気で叩かれたみたいね。

あと、桂花が頭を抱えている。

まあ、自分の親類が仲間に悪戯して頭にコブをこさえるのを見れば抱えるわね。

「大丈夫かしら荀攸？」

「いてて……全く、私は久遠ちゃんの成長を確かめたかったのに……」

そう言つて荀攸は苦笑を浮かべ私を見る。

「ああ、曹操様。私もあなたの引き抜きに応じる事はありませんので話すだけ無駄ですよ」

私も鷺島様に忠誠を誓ってますのでと荀攸は続ける。

「ねえ荀攸、一つだけ聞いていいかしら」

「はあ。何でしょうか？」

「あなたが彼に忠誠を誓ってるのは……北郷一刀の噂と同じなのかしら？」

「ん？ 北郷とですか？」

北郷という名前が出た瞬間、鷺島軍の将達の表情が変わる。

心底、嫌いだという雰囲気。

「ええ、北郷一刀に関する噂で一つね」

その噂を彼女達に告げる。

曰く、北郷一刀は劉備軍の将達のほぼ全員と関係を持っているとの事。

しかも1、2度ではすまないらしく既に骨抜きにされているとの事。

当初はこれを聞いた時は正直、怒りと呆れがどっちも来た感じがしたのを覚えている。

まあ、噂なので多少の嘘もあるだろうが。

怒りも呆れも結局の所、男というのはやっぱりこういうものかというものであった。

所詮、天の御遣いもそういう男かという。

「なるほど、つまり曹操様は鷺島様が北郷と同じ様に私達と関係を持っていると思っておられるんですね」

荀攸の声に少し怒気が含まれているのを感じる。

表情も先ほどまでと違い、少しだけ険しい。

「ここに来る前はね。ただ、さっき彼を見て北郷とは違うというのを理解したわ」

ここに来るまでは、彼も同様の人間なのだろうと思っていた。しかし、彼女達の言葉には何かをされた事での忠誠ではなく、心からの忠誠が感じられる。

「それは良かった……私達としても自分の主がその様な見られ方をするのは心外ですのぞ」

荀攸の声から怒気が消える。

表情も元に戻っている。

「少し長居をしてしまったわね。交渉が失敗したんだから私達は自分の陣に戻るわ」

これ以上、ここに居ても何も得られないわね。

説得する以前に彼女達の鷺島暢介への忠誠心を揺るがす事は不可能のようだし。

そうして私達は自分達の陣へと戻った。

そういえば、天幕の外にいるはずの鷺島がいなかったわね。

一言、言っておきたかったのだけぞ。

『優秀なのは分かっていたけれど、忠誠心も高い、いい将達を持つたわね』

と、ただし。

『余計に欲しくなつたわ』

と、付け加えておきたい。

私は欲しい人材は何が何でも手に入れる主義だから。

……ただ、流石に親を人質とかそういう手段は取りたくないわね。人としてどうかと思うし。

久遠 side

「ふう……」

曹操が天幕を出て行くのを確認し、僕は息をはく。
見れば皆も緊張が解けたのか同様の行動を取っている。

曹操の威圧感、尋常じゃないなあ。

あんな雰囲気じゃ、もし僕が在野なら絶対に首を縦に振るよ。
断つたらその場で殺されそうだし……

「そういえば、久遠ちゃんって曹操と知り合いだったの？ 久しぶりねって言われてたけど」

思い出したように氷花が聞いてくる。

「ああ……初対面なんだけど、手紙でやりとりがあつて。以前、仕官要請が来てそれを断つたの」

「ええ、曹操からの仕官要請をですか」

燈が驚きの声を上げる。

まあ、確かに曹操の仕官要請を断るのは珍しいか。

「うん。まあ、曹操の噂でちょっとね……」

「「「「？」「」「」」

全員が首をかしげる。

あれ？ 皆、曹操の噂知らないんだっけ。

「曹操は優秀な人材は好むけど優秀すぎる人材は警戒する。でし
ゃばり続けると身を滅ぼすとか……」

それにも色々あるのだけれど。

って、別に僕が優秀すぎる人材だって事じゃないからね。
勘違いしないでよね。

「あとは……その……」

残り一つの噂、それを言おうか言うまいかで悩む。
結構有名らしいんだけど……ああ、どうしようか。

「どうしたの？ 久遠」

珍しく命が口を開く。

「いや……あのね。曹操は女性好きだって話が……」

「……あゝそれが」「」

全員が頷く。

やっぱり有名なんだね、その噂。

曰く、曹操は美しい女性が好きで夜な夜な閨に連れて行っ
ていかないとか。

まあ、優秀すぎる人材を警戒するとか美しい女性好きとかそういう噂を聞くとちよつと仕官する気も……

「ほおゝつまり久遠ちゃんは自分が優秀すぎて美しすぎるって言うんだね」

ねえ氷花、僕の心の文を読まないでほしいんだけどさ。
というより。

「僕は一言も自分が美人とは言ってないよ……僕は大事な事なし」

そうだ、僕なんかより美人と言われる人達は大勢いる事だろう。
対して自分の容姿に自信があるとも思っていないし。

「なあゝにゝ、久遠が美人じゃなかったら私とかどうなるんですか、街人1とかだよ」

葵が凄い勢いで詰め寄ってくる。
いやいや、葵は美人だと素直に思う。

髪も綺麗だし、顔も整っているし。
僕は……

「どうせ、自分には何も魅力は無いって言いたいみたいだねえ」

氷花が笑みを浮かべながら言う。
ただ、その笑みはいつものそれとは違い、母親が子を見る様なそんな感じだった。

「久遠ちゃんは美人だよ。綺麗な髪してるし、顔も整ってるよ。もっと自信持っていていいと思うけどね」

何と言うか、面と向かって言われると凄く恥ずかしい。

「それにさ……久遠ちゃんには破壊力抜群の武器があるじゃない」

訂正、氷花の笑顔はやっぱりいつものものでした。それと氷花、もうあなたはただの助平でいいよね。

「そういう話ばかりしないでよ」

「そういう話をしたいぐらいの魅力的なものだって言いたいんだよ」

私とか葵とかには縁のない魅力なんですね。と、氷花は続けた。

「え？ 私も氷花さん側」

葵が呟くのが聞こえたが無視しておいた。

「大丈夫、葵は無い方がいいから」

命……それは慰めにならないからね。

余計に落ち込んでるし、命は焦ってるし……何だろこの状況。

「……ねえ氷花、あれが武器だっていうなら燈も破壊力あるよ」

氷花と2人で燈へと視線を移す。

「そうなんだけどさ。何て言うか、燈のあれは触れると危ない気がするんだよね」

「僕は危なくないっての？」

「見た目的にはね」

……僕と燈は同い年なんだけどさ。
何だろう、凄く損してる気がする。

その後、天幕に戻ってきた暢介に引き抜きには応じない事を告げた。

聞いた当初は喜んでいた暢介だったのだけれど。

その後は何かを考え込んでしまい、話しかけずらい状態になってしまった。

何かあったのだろうか？

〈暢介 side〉

夜になって俺は天幕を出てある場所へと向かっていた。

久遠達が曹操と話をしている際に俺は天幕を出て外にいた。その際に、劉備軍の兵士が一人俺の所へ手紙を届けてきた。

手紙には今日の夜に会って話があるという北郷からのものだった。俺は兵士に行くという旨を伝え、その場は終わった。

天幕に戻り、何の話だろうかとずっと考えていた。

（もしかして、今更董卓がいって言うんじゃないだろうな）

という考えが浮かぶ。

それを言われると俺は「無理だ」としか答えられない。

既に董卓は先に南郷へ向かわせているからだ。

流石に一人だという訳ではなく、信頼できる兵士達を同行させているけれど。

（……それ以外は思いつかないんだよな）

指定された場所につくと、既に北郷が立っていた。見渡すが誰もいる様子がないので1人なのだろう。

まあ、間諜みたいな人がいても気付かないけど。

「北郷、俺を呼び出して何の用だ？ 董卓の事か？」

そう聞くと、北郷は首を横に振る。

ん？ 董卓の事じゃないのか。

「いや、董卓の事じゃなくて、お前の事についてなんだ」

「俺の事？」

「ああ、お前はこの時代の事。どれぐらい知ってるんだ？」

この時代の事？ 三国志の歴史の知識って事か。

「悪いが全く知らないんだ。歴史つてのに興味が全く無くてな高校の時は赤点ギリギリだったんだ」

苦笑しながらそう返す。

まあ、武将の名前は知ってるやつはいるけどそいつが実際は何したのかとはまるで分かん。

「冗談だろ？ それであれだけの武将を集めたって言うのか？」

北郷は俺が嘘をついてると思ってるのか、少し怒った表情をする。

いや、これで嘘をついてもな。

「嘘じゃないさ。それに武将を集めたのもその武将が優秀と知っていたからじゃないよ」

確かに三国志に詳しければ。

（この武将、凄く強いんだよね）とか（こいつ裏切るんだよねあ）とか分かるかもしれないけどな。

「まじかよ……」

「要件はそれだけか？ なら、俺は帰らせてもらっぞ」

そう言って、俺は北郷に背を向け、陣へ戻ろうとしたのだが。

「さてよ、本当に歴史を知らないんだな」

そう言ってきた北郷にうんざりした表情を浮かべて振り向く俺。

「何度も言わせないでくれ。俺は三国志ってのは名前しか知らないんだ。これから何があるかもまるで分からない」

そついうと北郷は何やら思いついたのか笑みを浮かべる。

「そうか、俺は三国志好きでさ、色々知ってるんだ。だからお前にも一言言っておくぜ」

「いや……そんなのは」

いらなと言おうとした俺を遮って北郷が言う。

「司馬懿には気をつけた方がいいと思うぜ」

「え……それってどういう意味だ」

俺の問いに北郷は答えず、そのまま去って行った。
一人残された俺はひとまず陣へ帰る事にした。

久遠に気をつけろって何だ？ 何を気をつけるんだ。
裏切りか？ まさか……歴史でそうなってるってのか？

いや、あいつの言う歴史はあくまで俺の時代であってこの世界じゃないだろ。

それに、あいつの話すのが本当とは限らないしな。

俺と久遠の仲を悪くさせようとしてるのかもしれないけれど。

そもそも、あいつの事を信用出来るかという話になる。
答えはNOだ。

あいつの行った、燈への脅迫に近い形での引き抜き。
これだけで信用出来るはずが無いからな。

気にする事ないか。
そう思いながら俺は陣へ戻る。

天幕に戻ると、久遠がいて『勝手に一人で出ていかないでください！』って怒られた。

本気で心配してくれてたみたいだ……何か、少し涙目っぽいし。

こんな彼女が俺を裏切るか？ そんな事は絶対に無いはずだ。
そう、俺は思った。

く一刀sideく

三国志の歴史を何一つ知らないらしい鷺島。

それであれだけの武将を確保とか、運がいいとかそういうレベルじゃない。

ただ、知らないからこそあいつを抱えてるんだろうな。

「司馬懿なんて、おっかなくて俺だって持っておきたくないからな」

司馬懿って暗いイメージしかないからなあ。

まあ、どうせ朱里の噛ませ犬程度にしかならないだろうしな。

こっちには天才軍師様がいるんだから安心だな。

それに、さっきの言葉で鷺島は司馬懿を警戒するはずだ。

そうなって仲違いが起こればしめたものだな。

後は内部分裂して崩れて行けば苦労しないで倒せるだろう。

そして鷺島は即死罪……最高の計画だ。

そう思いながら俺は陣へと戻って行く。

北郷一刀は理解していない、鷺島暢介が自分を全く信用していない事を。

司馬懿は暢介に忠誠を誓い、決して裏切る事は無い事を。

彼の考えは成就する事はない事を。

17話 忠告する際は信用を持っておきましょう（後書き）

2人の仲を悪くするような展開になっていましたので、修正いたしました。

18話 久遠ちゃん、相談する（前書き）

さて、董卓さんの扱いについては本作の様な侍女はありませんので、
そういうの、暢介くん嫌ってる様なので・w・;

オリキャラはもう少し先で2〜3人出てくる様にいたします。
登場時期にズレはあると思います。

18話 久遠ちゃん、相談する

＼氷花side＼

どもども、荀公達こと氷花です。

洛陽の復興も終わり、南郷へ帰ってきました。
董卓も無事、南郷に到着したので良かったですね。

まあ、久遠ちゃんが『ああ董卓軍の武将、一人も手に入らなかった』

なんて、今でも嘆いていますけどね。

さてさて、その久遠ちゃんただけど。

どう見ても、暢ちゃんに惚れてると私は思っている。

だって、そうじゃなかったらおかしいでしょ。

洛陽復興の際に、夜に1人天幕を出てどこかへ行ってた暢ちゃん。

その後、戻ってきた暢ちゃんに『勝手に1人で……』って感じで
説教してた。

目にちよつと涙を溜めてね。

あれは反則だね、並の男ならコロッと引っちゃうとおもっよ。

え？ 何で知ってるかって？

そりゃあ、覗いていたから……あ、久遠ちゃんには内緒だよ。
って、私は誰に言ってるんだ？

南郷に戻っている時に聞くと、北郷から歴史に関する事を言われたそうで。

なんでも久遠ちゃんに気をつけろとの事。

ただし、『俺は久遠を信頼してるからさ、あいつの言う事は信用してないんだよ』とそう言っていました。

まあ、あいつの世界での久遠ちゃんはそうなんだろうけどね。

今の久遠ちゃんを見て、そんな事が言えるかねえ？

「……」

「……」

流石の私もこの展開は予想していなかった。

仕事上がりで部屋に戻っている途中で久遠ちゃんに会って。

『相談したい事があって』

と言われたので、どうせ聞くなら部屋がいいかと思って、私の部屋に招いた。

そして今、机を挟んで向かい合っているのだけど。

うん……久遠ちゃん、様子がおかしい。

何か、顔が少し赤くてモジモジしてる……
まさか……相談って

「えつと……恋愛の相談だね」

「え！ 何で分かったの」

分からない方がおかしいよ。

そんな表情でモジモジしてたら誰だって『ああ～恋愛関係だな』
って思うよ。

多分、恋愛対象は暢ちゃんの間違いない。

他に久遠ちゃんが惚れそうな男がいたら誰か私に教えてほしい。

「分かった理由はさ、後で考えたら分かると思うから言わないけど」

「？」

「なんで……私なの？」

そこが一番、私が聞きたい所。

何故私？ 私は別に恋愛慣れした女性では無い。

断言できる、言ってて悲しくなるけど。

「うん……こう言う事は一番の年長者に聞くべきかと思って」

「……年長者って、私よりも年上はいると思うんだけど」

例えば、食堂で料理作ってくれてるおばちゃんとか、文官でもいるし。

「そうなんだけど、こういう相談が出来るのって氷花ぐらいしか思いつかなくて」

何だろっ、嬉しさ半分と良く分からない感情が半分って気持ち。とりあえず、次の久遠ちゃんを悪戯する時は、胸を触る時に思いっきり揉んでやる。

痛いって言ってもしばらくは止めないつもりだ。

「なるほどねえ……暢ちゃんがどう思ってるのかが知りたいわけか」

その言葉に久遠は頷く。

しかし、顔を少し赤くしてモジモジしてる様子が何とも言えない。

まあ、単純に言うとな久遠ちゃんは暢ちゃんに完全に惚れている様だ。

確かに暢ちゃんは性格はいいからなあ……凄く優しいし。

それに努力を惜しまない姿は見る人によっては凄く魅力的に見えるから。

恐らくだけど、実際に告白しようものならもっと混乱した久遠ちゃんが見られそうな気がする。

告白するべきだと促してみるか？ いや、止めておこう。

今は真剣にこの相談に乗ってあげよう。

「なら、私が聞いてみようか？」

「へ？」

「だってほら、私なら普通に会話してて聞く様な流れに持ってい
きやすいし」

多分だけど、将の中で一番暢ちゃんと世間話をしているのは自分
だと思う。

そんな自分なら『そう言えば、暢ちゃんて久遠ちゃんの事どう思
ってるの？』って会話も出来そうなものだ。

他の将がそれやると凄く違和感があるんだよね。

まず、燈はそういう話はまずしないし、葵も世間話はあっても恋
愛事じゃない。

命は……そもそも、世間話を暢ちゃんとするのか？

「大丈夫だって〜お姉ちゃんに任せなさい」

そう言つて、私は自分の胸をポンつと叩いた。
骨に直に当たった気がした……地味に痛い。

「う、うん……お願い」

だから、そんなモジモジしない。

しかし……久遠ちゃん、乙女だねえ……

とりあえず、久遠ちゃんを部屋に戻してから私は暢ちゃんを探し
て回っていた。

探し回って書庫にたどり着くと、そこに暢ちゃんはいた。
何やら探し物をしている様で、その表情は真剣そのもの。

しばらくは隠れて見ていたけど、このまま居る訳にもいかないの
で。

「暢ちゃん、ちょっと話があるんだけど、いい？」

と言って暢ちゃんに近づく。

私の声に気付いた暢ちゃんは竹簡を置くと私の方を見る。

「ん？ どうした氷花？」

私の言葉遣いで仕事関係で無い事が分かったのか口調は軽い。

まあ、仕事関係なら私も言葉遣いは変わるからなあ。

「うん、ちょっと気になった事があってさ」

「気になる事？ 何？」

うーん、自分の事じゃないけど恋愛関係を聞くのは恥ずかしいな。
それに、暢ちゃんって何となく交してきそうだしなあ。

まあ、行ってみるか。

「暢ちゃんって久遠ちゃんの事どう思ってるのかなあ、ってさ」

「久遠の事？ そりゃあ、信頼できる仲間だけど」

その答えに私はずっこけた。

何と言つか、この質問にこの答えって王道な感じが。

「そ、そうじゃなくて……久遠ちゃんを女性としてどう見てるか何だけど」

「女性として……はあ!？」

私の質問を理解したのか暢ちゃんが大きな声を出す。
書庫には誰もいなくて良かったよ、誰かいたら迷惑だしね。

そもそも、ここで会話する事も迷惑なんだけどね。

「……」

そこで考え込む暢ちゃん……何か上手い逃げ道は無いかって探してるのかな？

それともまさか……『女性としては特に見てないなあ』なんて言うんじゃないだろうか。

いや……もしかしたら。

「ま、まさか暢ちゃんって女性よりも男性の方が……」

「それはない!」

おお、強く否定してきた。

まあ、それだったら久遠ちゃんにどう報告したらいいか分からないしね。

「なら、答えてほしいなあ」

「……分かった答える」

「わーい、さあ答えて頂戴」

「正直、いい子だと思うよ」

「お」

おつ、この展開は久遠ちゃんに報告できそうだとその時は思っていた。

ただ、話を聞いていくと褒めてる内容がちとおかしい。

……ああ、これはあれだ。

一個人としての評価では無くて上に立つ者として見た女性としての久遠ちゃんの評価だ。

一個人、鷺島暢介としての評価はまだ聞けない。

こつちとしては一個人の意見を手に入れたいのになあ……

「って事でいいかな？」

「あーっん。まあいいや……ありがとうね暢ちゃん」

期待した答えが手に入らず、私は暢ちゃんに感謝の言葉を言うと言った。書庫を出て行った。

その後、久遠ちゃんの部屋に行ってこの事を報告。

がっかりするかと思ったけど。

「暢介らしいなあ……」

って、笑ってるよ久遠ちゃん。

暢ちゃんの事を本当に理解してるんだろっなあ。

まあ、私としては2人が一緒になった方が嬉しいからねえ。

お似合いな感じがするし……これからも世話をかけてあげようかな。

鷲島軍のお姉ちゃんとして。

ん？ 私はまだいいや。

……今誰かが、最年長なのにつて言つてた気がする。

落とし穴に落とすぞ……って、私は何を言ってるんだろっか。

疲れてるのかなあ？

＼暢介side＼

昨日は氷花から、変な質問をされたなあ。

あれってどういう事だったんだろっか。

あと、時々久遠が俺の事をチラチラ見てるんだが……何か変なのか？

髪が爆発してる訳じゃなさそうなんだけど。

さて、俺達の前にはちょっと扱いづらいものがある。

「董卓をどうするか……」

董卓は現在、俺達のいるこの城の中に居る訳だが、どうするべきかを考えていた。

当初は董卓を生まれ故郷に戻らせるべきかという話になったのだけれど。

現状で董卓の故郷へは遠いし、俺自身の支配地でも無い。そこへ董卓を帰らせておしまいという訳にはいかない。

それに……

『私は、ここに残り鷺島様の進む道を見届けさせて頂けませんか』

と、董卓本人が言ってきた。

その強い決意の目を見て、断る訳にもいかない。

そして、今に至るわけだ。

「さて、どうする暢ちゃん？ 流石に何もさせないで置いとく訳にはいかないよ。本人もそれは嫌がってるようですので」

「分かってる……だけど、何をさせていいのか分からないからなあ」

現状では董卓に仕事を与えられていないので部屋に居るはずだ。ただ、本人は力になりたいと言っているのだけだ。

与えられる仕事に限られてしまう。

さてと……何か無いか。

「内政関係は文官達が処理できるし、武関係は董卓には無理だろうから……」

「外交で出す訳にもいかなからね。そもそも彼女は私達と同じ鷺島軍所属じゃないから」

そう、董卓の扱いはあくまで保護した人という扱い。鷺島軍に所属している訳ではない。

なので、置ける範囲は限られている。

どうしようかと思っていた俺の頭にふと、ある事が浮かんできた。

「……あつ。そういえば、最近、街の人から何か要望が無かったっけ？」

「要望？ ああ、動物関係のでしたね」

俺の問いに氷花が答える。

そう、最近、街中で野良猫や野良犬によって被害が起きているようだ。

まあ、狙うのはあくまで食料品なんだけども、たまに猫同士や犬同士での喧嘩で色々と壊されているそうだ。

まだ人間に対しての被害は出ていないが、時間の問題かもしれない。

ただ、流石に兵士達で処分なんて強硬手段は取りたくは無い。

「うん。今はまだ子供とかに被害は無いけど……このまま放置は出来ないからさ」

「そうですね。ただ、それが董卓の事と関係が？」

董卓と動物、これが繋がらないので皆が首をかしげる。

「ああ、そういう野良になっている動物をこちらで預かって見てはどうかと思ってるね」

「預かるんですか？」

「うん。そして、世話をする事で動物達を人に慣れさせ、そして馴れ、その後街の人達の中で飼いたいという人がいればその人に譲るって具合だね」

要するに、動物の調教師という所なのだろうか。

実際にそういう職場に就職した友人がいないものでどういう事をしているかは分からない。

「その役目を董卓に任せると？」

「俺はそのつもりなんだ、最近だけど彼女が猫の世話をしてるのを見てね」

世話をされている猫がとても気持ちよさそうで董卓の傍を離れよ

うとしなかった。

完全に心を許している状態だったわけだ。

そういうのって才能だと思っんだ。

「ふむ……恐らく、董卓は断る事は無いと思いますが……そうなのと場所と建物を建てる資材が必要になりますね」

場所、これは城内に建てるしかない。

董卓をあまり街に出すと、誰かに『董卓は生きている』みたいな噂を立てられてしまう恐れがあるからだ。

まあ、他人の空似だろ？　って言えばいいんだけど。

ただ、そういう話になるのが嫌なので城内で探す様にする。

資材などは調達するしかなく、建物の見取図も専門家に頼まないといけない。

さあ、やろうと言ってすぐに出来るのはあくまでゲームの世界……って最近ゲームでもすぐには出来ないか。

あとは……

「ああ、預かる動物の種類も決めておかないと……猫と犬でいいかな」

猫や犬ならまだ可愛い。

これが虎とか来た日にはこっちも笑えないからな。

そもそも、董卓に万が一があってはいけないわけだし。

その後、董卓にこの話をすると快く引き受けてくれた。

最近まで君主としていた人が動物の世話を仕事にする人になるとは……

普通の人から見たら、信じられない様な光景なんだろうな。

でも、その後、小屋が完成し野良猫や野良犬が入ってくる事になるのだが。

董卓はそれらの動物達をしっかりと面倒を見て、彼女が世話をした動物達が街の人達の元で幸せに過ごせる様になっていくのは。

もっ少し、先の話。

18話 久遠ちゃん、相談する（後書き）

大幅な書きなおして、ほぼかなり変わってしまいました。

さて、ハーレム関係ですが、それは無いという形をとりますね。

その方がいいかなと思いますし、ハーレムなんて書けませんし・w・

；

ただ、本編でそういう関係になるのは無いので。

拠点でそのあたりが書ければいいかなと。

拠点1 頑張れ久遠ちゃん（前書き）

拠点関係は、暢介×久遠の流れになります。
他の将は応援の形で出てきたりです。

間違っても久遠の邪魔をするわけではありません。
本人たちは「よかれと思って」やっているはずです。

拠点1 頑張れ久遠ちゃん

く久遠sideく

「だからね、暢ちゃんを手に入れる為には色々な技術が必要になると思うよ」

あの日、僕が氷花に相談してから氷花は僕の為に色々と助言をしてくれたりしている。

凄く感謝してるんだけど……

氷花ってそういう経験あるのかな？ でも、聞けないよね。

聞いて怒らせたら……また、胸を揉まれそうだし。

前の時は本当に痛かったからなあ……

ちなみに、今、僕と氷花は仕事が一段落がついたので昼食を食べに食堂へ向かっている。

「聞してる？」

「う、うん。聞してるよ」

凄い世話をしてくれる氷花、でも……

（絶対楽しんでるよ）

でも、後が怖いから言わない。

絶対言わないよ。

「そういえばさ、久遠って料理とか出来るの？」

「料理は……そこそこかな。実家に居る時に色々と教わったから」

料理は母上から教わって練習とかしていた。

本当は永遠が凄く上手だったから、実家に居て永遠がいたら頼んで作って貰ってたからなあ。

そう言えば、そろそろ永遠も誰かに仕える頃だなあ……

あっそうだ、実家に手紙送って仕えないかって仕官要請しようかな。

暢介も嫌って言わないだろうし……永遠も嫌って言わないだろうなあ。

あの子、基本的に断る事しないし。

「うーん、料理で暢ちゃんを落とすって手段もあるけど。それだと燈ちゃんぐらいの腕が無いと」

「無理無理！ 燈ぐらいの腕ってあの子の腕はちよつとした料理人より上だよ」

「あゝ久遠ちゃんも燈ちゃんの料理食べた事あるんだね。確かに、彼女の腕は確かだよ」

しかも……そこで氷花は一旦言葉をきる。

「そうなんだよね、未だに上達中って僕、信じられないよ」

恐らく、氷花の言おうとした事を先に言う。

「まあ、作ってあげたい人がいるからだろうね。結構な期間、会って無かつたらしいから」

そう、現在燈は母親と一緒に暮らしている。

連合終了後、燈と数名の兵士達を燈の実家に向かわせて母親を連れて来る事になった。

北郷の言った事が実行される訳にもいかないからねえ。

結果としては母親は了承して南郷へと来てくれた。
いやあ、断られたらどうしようかと思ってたけど、成功して良かった。

それから南郷に来た母親と燈は一緒に生活している。

そこで毎日料理を作っている様なんだけど……その料理の腕がとてつもない。

一番凄いのはお菓子作りでそれは商品として売れば即完売は間違いないと思う。

財政に悩んだら売って稼ごうかと本気に思ったぐらいだ。

聞けば、劉備軍にいる軍師の2人に料理を教えていたらしい。

そして今でも成長中……もう、料理で天下統一してみてはいかがですかと言いたい。

「作ってあげたい人がいる……おっ、私閃いたかも」

隣にいる氷花が何やら閃いたと言っているが嫌な予感しかない。

「……何を閃いたの」

「久遠ちゃんが暢ちゃんに、『僕の作る料理を毎日食べてほ』」
却下！」「えゝ何で」

「何でって、そんな恥ずかしい事出来るはずがないでしょ」

やっぱりロクな事を閃いてなかった。
そんな事……僕が暢介に……うわあ、想像出来ないよお。

「久遠ちゃん、顔真っ赤っかだねえ。想像しちゃったんだね」

「そ、そんな事は……って、あれ？」

視線の先の出来ごとに思わず足を止める。

僕の視線の先、食堂のある所から暢介と燈が一緒に出てきた。
2人とも笑顔で……

「ん？ どうしたの……あら」

氷花も僕の視線の先を見て、2人を見つける。

暢介が視界から消えたのを確認した僕と氷花は燈の所へと進む。
燈は再び、食堂へ入ろうとしていた。

「ちよつと燈」

入ろうとしていた燈を呼びとめる。
声に気付いた燈は僕の方を見る。

「あつ、久遠さん……それに、氷花さんもどうしたんですか？」

「いやぁ昼食取りに来ただけで燈ちゃんが暢ちゃんと一緒に居たみたいだから何してるのかな……って」

こういつ時に氷花がいると凄く助かる。

凄く自然な感じで会話をするから……

「ああ、実は食堂で料理を作ってくれる人が急病で休んでまして」

聞くと、食堂で作ってくれる人がいなかったのだが。

燈は自分で作れるので厨房を借りて料理をしていたらしい。

そこに暢介が来て、自分の分も頼めないかと燈に頼んで作ってもらったらしい。

そして、その料理の出来は良くて暢介は満足したらしい。

確か、今まで暢介は燈の料理は食べた経験が無かった様に思うんだけど。

「へえ〜燈ちゃんの料理をねえ……」

そう言って氷花は僕を見る。

今は食堂内で椅子に座っている。

「はい。暢介様に満足いく料理が出来て良かったと思います」

そう、笑顔で言う燈……ん？　ちょっと待って……
今何か聞いた事ない名称が出てきた様な……

確か、燈が暢介を呼ぶ時は『鷺島様』だった気がするんだけど。
氷花も表情が変わっている。

「え〜つと……燈ちゃん。いつから暢ちゃんの事を暢介様って呼ぶ様になったの？」

「え？　ああ、これは最近なんです」

聞けば、『付き合っても長いし、そろそろ鷺島様つての变えてほしいなあ』と暢介が言ったらしい。

それに燈が『では、暢介様とお呼びいたします』という事らしい。

ちなみに、葵や命も既に『暢介』もしくは『暢介様』と呼んでいるらしい。

……知らなかった

「お二人が早い時期から名前でお呼びだったので、私や葵さん達が鷺島様と呼んでいるのが片っ苦しかったらしいです」

「……」

確かに、僕や氷花は最初から『暢介』と『暢ちゃん』と気軽に呼んでいた。

……軍議の時もそう呼んでたような……今思えば、大変な事だよ

ね。

「それより、久遠さん。表情が凄く暗いんですが、何かあったんですか？」

燈が心配そうな表情でこちらを見る。
ちなみに彼女はいつも付けている帽子を今は外している。

「まあ、何かあったならその原因は……燈ちゃんなんだよね」

そう、氷花が言う。

「ふえ？　わ、私が何かやりましたか？」

燈が慌てる。

自分の取った何かしらの行動が僕を落ち込ませたという事を言われたからだ。

「久遠さんが暢介様の事を……なるほど」

なぜか、燈にまで僕が暢介をどう思っているかが知られてしまった。

本当はこういう気持ちは一人で持つておくべきなんだろうけどなあ……

「つまり、私の料理を食べた事で暢介様の中での味の基準が上がってしまったと思ってるんですね」

その言葉に頷く。

思いたくは無いけど、例えば、何かの機会に暢介に料理を食べてもらおうしよう。

その際に燈と同じ料理を出して『燈の作った方がおいしかったよな』と言われてしまったら……

僕は燈と比べたら全然料理の腕は下の方だから。

……ああ、でも暢介はそんな事言わないかもしれない。

でも、そう思われたくない……自分でも、何てめんどくさい性格なのかと思ってしまう。

「手っ取り早いのは、明日の昼食を久遠ちゃんが燈ちゃんと同じものを作れば分かる事なんだけどね」

「それは、そうだけど……」

そう言って考え込む僕。

さつさと、『よし、やるぞ！』って言えればいいのに……

そう考えている僕に燈が声をかける。

「私は、母に喜んでもらいたくて料理を学びました」

「燈？」

「母に美味しかったよ、そう言われたくて……久遠さんは今までそれがありませんか？」

「……無いね。僕は、ただ教わっていただけだから」

「それでも構わないんですが……本当に暢介様に美味しいと言ってもらう為には、彼の為に作ると思う事です」

燈の顔を見る。

真剣そのもの、まるで戦場にいるみたいだ。

「それだけで変わる？」

「だいぶ変わると思いますよ。心が入っている事は最大の調味料だって……私に料理を覚えてくれた人の言葉です」

「心か……」

「それがあれば、暢介様に美味しいと言ってもらえると思いますよ」

そう言っで燈は笑みを浮かべる。
心を込めるか……

「分かった。やってみるよ」

「おっ、やるんだね久遠ちゃん」

氷花の言葉に頷く。

絶対に暢介に美味しいって言わせるんだ……あつ、そう言えば。

「ところで燈、今日は何を作ったの？」

そもそも、その料理を作れないと意味が無いんだった。

（暢介 side）

今日も食堂のおばさんは休みか……大丈夫なのかなあ。

仕事中の際に、氷花からその情報を聞いた俺。

昨日は燈がいたから昼食は取れたからなあ……今日は街に出るか。

そんな事を考えながら歩を進めていた俺。

食堂の前を通った際に美味しそうな匂いがしたのでふと足を止める。

（あれ？ おばさんいないんだよね？）

そう思っただけで食堂の中を覗いてみると、厨房に立っている見慣れた銀髪。

（久遠？ あいつが作ってるのか）

久遠が料理をしている所は初めて見た様な気がする。

久遠の家に居る時は司馬孚が作ってくれていたし、そもそも久遠は試験で出ていたし。

旅に出てからも基本は宿に着ける工程を組んでくれてた為か、そういう機会はなかった。

調理が終わったのか、料理の乗った皿を持って厨房を出てきた久遠と目が合う。

「あつ、暢介。どうしたの？」

何か、久遠の様子がいつもと違う様な……まあ、気のせいかもしれないが。

暑い厨房にいたからだろう、顔が少し赤い感じがするけど。

「いや、昼食を食べに街に行こうと思ってたんだけど」

久遠の持っている皿には湯気が立っている炒飯が見える。

「食堂のおばさんが今日、いないって聞いてたんだけど。美味しい匂いがして」

「覗いてみたら、僕がいたと……」

そう言われて頷く。

「久遠が料理してる所、初めて見たからさ」

「ん？ 僕が料理してたらおかしいって？」

少しムツとする久遠。

俺は、首を左右に振る。

「いやいや、そういう意味じゃなくて……」

その先を言おうとした所で。

グー！とお腹が鳴ってしまった。
まずい、想像以上に空腹状態らしい……っていつか、凄く恥ずかしいぞ俺。

「えっと……た、食べますか？」

「え？」

「ですから、これを食べないかと聞いてるんです」

そう言ってくる久遠。

あら？ また顔が少し赤くなった気がする。

「いやでも……それって久遠が自分で食べる為に作ったんだろ」

「そうですね、また作ればいいんです。それに、今から街に行ってもすぐには食べられないでしょ」

確かに、今から街に出て店を選んで入店して品物頼んで出てくるまで考えると結構かかる気がする。

「……うん」

「何で悩むの！ 食べるのか食べないのかはつきりして！」

「は、はい。食べます」

久遠の剣幕に押されて俺は急いで席に着く。
目の前のテーブルに皿が置かれる。

「ば、僕はもう1個作るから先に食べてもいいよ」

そう言つと久遠は厨房に戻つて行つた。

「御馳走様でした。美味しかったよ」

「そ、そうですか……わざわざ待たなくても良かったのに。冷めてたんじゃないですか？」

そう、俺は久遠が自分の分を作り終えて席に着くまで待っていた。その為に炒飯は少し冷えていた。

「いや、どうせなら一緒に食べる方がいいかなと思ってね。それに、冷めてても十分美味しかったよ」

「そ、そうですか……良かった」

安堵の表情を浮かべる久遠。

ただ、最後の方は聞こえなかったけど。

だけど、久遠って本当に凄いやなあ。

頭はいいし、剣術もそれなりに使いこなせて。

料理も出来て、掃除は前に久遠の部屋を訪ねた時は塵一つない状態になってたし。

これで後は洗濯とかも完璧なら非の打ち所が無いやなあ。

「あ、あの暢介」

久遠の声に俺は考えを一旦止める。

「ん？ どうした？」

「燈に聞いたんですが、昨日、燈の料理を食べたそうですね」

「ああ、昨日も食堂のおばさんがいなくてね。で、たまたま燈が作ってくれるって言うてくれたんだ」

あれ？ そう言えば、昨日、燈が作ったのも炒飯だったような。偶然の一致ってやつかな。

「そ、その燈と比べて……ば、僕の料理はどうだったかなあって……」

「燈と比べて？」

燈の炒飯と久遠の炒飯……食べてみてどっちが美味しかったかって事か？

特に考えて無かったな……そもそも、人の作った料理を比べるほど、俺は料理を知ってる訳じゃないからな。

自称食通って訳でもない。

だから……

「俺に人の料理を比べる事なんて出来ないよ。俺は食に精通してる訳でもないから」

「そ、そうなんですか」

「うん。2人とも凄く美味しい料理を作ってくれたし、俺は感謝してるよ」

おかげで、食事代が浮いたしなと笑いながら言う。

「はあ……」

久遠がため息をつく。

あれ？俺なんか呆れさせる様な事、言ったか？

「いえ……ちょっと納得してただけです。これが暢介なんだって」

「？」

「気にしないでください。さてと……僕は食器洗ってくるから。暢介は仕事に戻った方がいいよ」

そう言って、席を立つ久遠。

俺も立ちあがると久遠の左手を？む。

「え？よ、暢介？」

久遠が驚きの表情で見る。

「えつとな。洗い物は俺がやつとくから、久遠がしなくてもいいよ」

「え？でも、料理を作ったからには最後までやるよ」

「いや、美味しい物を食べさせてもらったからさ。さめて食器洗いぐらいはしておきたいんだ」

美味しい物を食べて、はいさよならって言うのは駄目だ。せめて食器洗いぐらいはお返ししておきたいからな。

「べ、別にそんな事をしてほしくて料理を作った訳じゃ……」

初めての対応なのか久遠も焦っている様だ。

「任せろ、俺は実家では食器洗いは一番うまかったんだ」

これ本当だから。

「えっと……それじゃあ、お願いしようかな」

久遠が折れる形になり、俺が皿を持って流し台に向かう。そして食器を洗っているわけだが。

「うわぁ〜暢介って本当に食器洗い得意なんだね」

後ろから久遠が見ている。

あの〜仕事に戻るわけじゃないのね？

「まあね……あっそうだ、久遠」

「ん？ 何？」

「また機会があったらでいいんだけど。また、飯を食べさせてくれないかな」

何気なく言った、また食べたいなという言葉。
その言葉に久遠は一瞬で、顔を真っ赤にした。
そして……

「えっと……僕の料理で良かった」

と、俯き加減で答えるのであった。

（氷花 side）（番外）

私は今、食堂の入口から隠れて2人を見ている。
いい雰囲気な2人を見ながら私は、こう思った。

（いけいけ久遠ちゃん！ 今なら告白もいけるはずだ！）

ただ、そう思いながらも久遠ちゃんの性格を考えると告白はなさ
そうだ。

……しかし……

「苦しいなあ……」

私はお腹を押さえる。

凄い満腹感で動くのも苦しい。

全ての原因は目の前の久遠ちゃんだ。

今日の昼食で暢ちゃんに久遠ちゃんの料理を食べてもらおうとい

う事で。

午前中に『食堂のおばさんが今日も休みらしい』という情報を言っておいた。

これで、暢ちゃんは今日も街に行こうとするはずだ。

燈ちゃんと同じ様に匂いで引き寄せるわけだ。

条件は全て同じにという久遠ちゃんの謎の対抗心な訳だが。

ただし、いつ暢ちゃんが来るか分からないので久遠ちゃんは何度か料理を作っていた。

それが無駄になって捨てるのも何なので。

私が全部処理しました。

……今日は夜食べなくてもいいや……というかこれ消化するのかな。

せめてこの栄養分が胸に行ってくれればなあ……はあ。

そう、ため息をつく私だった。

拠点1 頑張れ久遠ちゃん（後書き）

この拠点が終わる時が、成立する時なのでしょう。

まあ、この拠点は、たまゝにやるぐらいなので注意を。

さて、次はオリキャラ1名様追加となるかと思えます。

19話 人材不足（前書き）

今回の作品で、オリキャラ3名登場ですね。

1名（永遠）は大分前にちよろつと出てましたが。

これもある程度集まったら新しくオリキャラ紹介作りますね

19話 人材不足

（暢介 side）

連合が終了し、南郷に戻った後の俺達は内政に重点を置いて活動をしていた。

まず取りかかったのは、領内の道の整備。
物の流れをスムーズにする為に行っているのだが。

分かっていた事だけど、人員とお金が飛ぶ飛ぶ。

削れる所は無いかと、久遠達は文官を巻き込んで調査をしている。

……流石に、この時代にアスファルトなんかある訳ないしな。
原料見つけても俺には何を出来ないけどさ……

さて、領内の街や村などに転勤状態になっている文官達からも手紙が届いている。

中身は『ここまで復興が完了しました』とか『指導している。。。の様子』などが記されている。

復興に関しては、文官達の力を信じているので心配はしていない。
指導に関しても、しっかりと次の世代が育っていれば安泰なのでいいのだが。

中には手紙の内容が嘘の者も存在している可能性がある。
そこには命の育てている間諜を訓練という形で送り込んでいる。

もしも、内容と違う。

または、私腹を肥やしているならば報告が来る様になっている。既に何人かが報告を受けて処分している。

送る時は、理想があつたはずなんだが……誘惑つてのはどこにでもあるって事か。

さて、そんな時に俺達は少しの問題にぶつかっていた。

「将の数か……」

「はい。武将に関して、私と命しかない状態では、少なすぎると思います」

軍議の際に葵が発言した『将の数』。

これは、俺も思っていた事だ。

現状では武将と言われるのは2人。

これでは少なすぎる。

小規模な戦闘ならいいが、これが大規模になると間違いなく足りない。

関係ないけど、一騎打ち出来る将も命しかない現状。

「確かに、将の数は俺も心配していたんだけど……」

「誰も来ないからねえ……これじゃあ、増やす以前の問題だよ」

俺の言葉に続けて久遠が繋ぐ。

「まあ、現状は私と命で上手くやりますが……なるべく早めに武將をお願いします」

そう、葵が言う。

2人にかかるウエイトが凄いからなあ……楽にしてあげたいのだが。

「そういえば、久遠ちゃんの妹ちゃんがここに向かつてるんだよね？ 武はどうなの？」

思い出したように氷花が久遠に向かつて言う。

その言葉に久遠は首を横に振る。

「永遠は武はからつきしなんだよね……そもそも、戦場に出す様な子じゃないから」

そう言うのと、氷花は「そっか」と言って考え込む。

久遠の妹、司馬孚が現在この城に向かつてきている。

ん？……ちよつと待てよ。

「なあ久遠。司馬孚って武芸の心得はあるんだよね？」

「護身程度はね、ただ戦で使える様なものじゃないけど」

「いや、賊の集団に出くわしたら一人じゃ危ないんじゃないかな

？」

そうだ、司馬孚の家からここまで結構な距離がある。それを一人で歩く、もしくは馬でもいいが賊に会った時に大丈夫なのかと思っていた。

各地の王によって治安向上は行われているが今でも賊は出てきている。

やはり、簡単に金や物が手に入ると思い行動している様だが。

捕まった代償は自分の命の訳だが。

（俺が捕まる訳ないじゃん）みたいな感じの根拠のない自信で自滅するんだろうな。

「流石に一人は無いと思う。方向が同じなら商人と一緒に向かってもいいだろうから」

「そうですね。私も商人の人と方向が一緒に乗せてもらってましたから」

久遠の言葉に葵も続く。

そうか、それならいいんだけどさ。

「兎に角、司馬孚は内政担当になるだろうから。武将に関しては立て札などと呼びかけておこう」

俺の言葉に皆が頷く。

誰でもいいって訳でもないが、武将が欲しい所だなあ。いや本当に。

＼？side＼

「へえ、嬢ちゃんの姉貴があのだ司馬懿なのかい？」

そう言つて俺は隣を歩く少女を見る。

少女は笑み浮かべると頷く。

お嬢ちゃん、司馬孚と出会つたのは、ついさっきまでいた街の宿屋。

南郷郡に向かおうとしていた所、宿屋の亭主から。

『あんた南郷郡に行くつて言つてたよな。この子も南郷郡に行きたいらしいから良かったら連れて行つてくれないか』

と頼まれた訳だ。

いやいや、俺は子守りをするつもりは無いんだがな。

つてその時は断ろうとしたんだが……司馬孚を見ると断るのが悪いと思つてしまった。

小柄で可愛いらしい雰囲気。

髪は水色で腰まで伸ばしそれを髪留めで止めている。

聞けば、姉を真似ているらしい。

そついつ子に『お願いできませんか』と言われて『無理だな』とは言いつらい。

なので『分かつたよ』と言つしかなかった。

やれやれ、俺はもうちょっと大人な女性が好きなんだがね。

目的地へと向かう最中、司馬孚と話していると色々な事が分かった。

どうやら、彼女は南郷群を治める鷺島暢介の右腕と言われる司馬懿の妹らしい。

確か、司馬懿は河内郡の出身だったよなあ。

河内郡にいる司馬家…… すごい名門の家柄じゃないか……

そんな所の子が1人で行動してたのか…… 危ないじゃないか。いや待てよ…… もしかしたらこの子、凄く武芸があるんじゃないのか？

…… いや、それはねえな。

この子からは武に長けているという感じがしない。せいぜい、護身程度だろう……

もし、この子が武芸に長けていたら俺の目が節穴ってこつたな。

「そういえば、あなたの武器は珍しいものですね」

司馬孚に話しかけられた俺は自分の獲物を見る。

他人と武器が似てるのが嫌だなあと考えに考えて作ってもらったものだ。

まあ、大陸中探せば、どっかで似た様なものがあるだろうって思うけどさ。

俺の身長をゆうに超える高さ、そして重さも結構ある。

槍の穂先に斧頭、反対側には突起物をつけておいた。

これで斬る、突く、突起物に引っかける、叩くという行為が可能となっている。

おかげでこいつの使用用途は物凄く多い。

それこそ、相手を引っかけて馬から引き摺り降ろしたり、足を引っかけることだってできる。

やろうと思えば、相手の兜や鎧を破壊する事だって出来る。

ただ、重いんだこれ……だから使いこなすのに大分時間が掛っちゃうんだけどな……

「ああ、こいつは斧槍って言ってな。俺が作らせたものなんだ」

「作らせた？　と言う事は、あなただけの武器なんですね」

そう言つと司馬孚は興味深く俺の武器を見る。

まあ、珍しいからなこれ。

「ああそうなるな。あと、斧槍ってのも俺がつけたんだけどな」

これを作った際に何て名前にしようかなと考えた事があった。

色々浮かんだが、しっくりこない中でふと浮かんだのが『斧槍』だった。

「いいですね、自分だけの武器で名前も自分が付けるといのは」

「まあな。ただ、大陸中探したら似た様なの使ってる奴いそうだけだな」

似てるのは探したら出てくるもんさ。

問題はそれを扱う人間の技量ってやつさ。

違つかい？

その後、司馬孚と歩き続け南郷に到着。

司馬孚は既に話が付いているのか、先に城へと入って行ってしまった。
った。

まあ……ここからは別行動の方がいいだろうな。

俺がここに来たのは仕官する為という訳ではない。

目的は俺の主君だった、董卓、月様の死の真相を知る為である。

袁紹が各勢力に出して檄文のせいで始まった反董卓連合。

虎牢関の戦いで離脱をした俺は、部隊を立てなおす最中に入ってきた情報は。

連合に追い詰められた月様が自室に火を放ち自害したというものであった。

こうなってしまうては部隊を維持する訳にもいかず、俺はその場で部隊の解散を指示した。

去って行く彼らを見ながら俺は一つの決意をする。

その決意が月様の死の真相を知ろうと言う事だった。

それから先は、商人達の護衛や村を襲う賊の討伐など色々な仕事を
していく中で。
立ち寄った街や村で何か月様の死に関する情報は無いかと聞きま
くっていた。

中には金銭を要求してくる奴もいたが、そういう奴にも金銭を渡
し情報を手に入れる。

まあ……嘘情報を掴まされるのが多かったけどな。

別に、月様が自ら命を絶ったというのならばそれで構わない。
連合の連中に捕えられ、処刑に遭うぐらいならば自ら命を絶つ
も考えられる。

ただ、もし自ら命を絶ったのでは無かったら？ それならどうだ。
誰かが月様を殺し、その後部屋を燃やしたならば……話は違って
くる。

燃やす理由、例えば月様の部屋から物を盗み、それがバレルのを
恐れての火か。

月様の部屋には価値のある物があつたはずだからな。

もしも、月様の死が自害で無いのならば俺は月様を殺した相手を
許さない。

常に民の安息を願っていた月様に暴君という汚名を着せ、その命
まで奪っている。

しかも、ただ殺しただけでなく、部屋に火までつけて……

俺は、そんな事をした人物を必ず殺す。

それが、俺に出来る主君への仇討ちだ……まあ、月様は『その様な事はしないでください』って言いそうだな。

……流石に、今回ばかりは月様が言っても止める訳にはいかないよな……

そんな中で、つい最近聞いた情報が月様が死んだ証を持ち、連合軍へ知らせた人物の情報であつた。

その人物は南郷郡を治める、鷺島暢介という人物だ。

『2人いる天の御使い』の1人で劉備軍に居るのとは違うようだ。

それを聞き、俺は南郷郡へと向かう事となつたわけだ。

玉座の所まで、文官に案内され歩いている。

流石に斧槍は置いて行つてほしいと言われたので門番に預けている。

まあ……素手でも殺す方法はあるから別にいいんだけどな。

そんな事を考え、俺は文官の後ろをついて行っている。

本当なら月様を殺したかもしれない相手に会うというのに、やけに落ち着いた自分がいる。

……何でだろうな。

やがて、玉座の部屋の前に着き、文官が下がる。

さあ……入ろうかと思った俺は何気なしに左を見た。

そして……俺の動きが止まった。

視線の先に死んだはずの月様がいた。

俺が仇討ちなんて行動を取るから、死の世界から止めに来てくれたのかと思ってしまった。

いやいや、俺はそういう類は信じないんだが……それに、月様は俺に気付いてないみたいだし。

俺は、部屋に向かわず月様の方へ向かう。

一步、二歩、歩いた所で一旦止まりもう一度月様を見る。

月様は、普段見せていた穏やかな笑みを浮かべながら動物の世話をしていた。

それを見て俺は……

「月様ー!!」

と、大声を出し月様の所へ駆けだしていた。

そして、もう少しという所で……誰かに押さえつけられる結果になる訳だが。

ああ……動物が逃げてしまいましたか……ごめんなさい、月様。

＼暢介side＼

「へえ、その男と一緒にねえ……」

司馬孚の話を聞いていた久遠がそう言った。

先ほど、真名を交換し司馬孚、永遠は俺の事を「暢介様」と呼んだ。

どっちかというと名字で呼ばれるよりかは名前の方が楽な気がするよ。

さて、その永遠はここに来る際に一緒に来ていた男性の話をしてる。

見た事の無い武器などの話をしている。

「彼は、武に長けた者だと思います」

そう、永遠は締めくくった。

「……暢介。永遠と一緒に来てくれた人に仕官を持ちかけたらどうかな？」

「それは俺も考えた。ただ、こういう話は氷花や燈にも通しておかないと」

そう、流石にこういう話は仲間に伝えておく必要がある。もしかしたら誰かの知り合いという可能性も捨てきれない。

あるいは、危険人物などの可能性も考えると……勝手に2人で決める訳にはいかない。

「そっだよ。ね。なら……」

久遠がそこまで言っていた瞬間。

「月様ー！！」

という声が響いた。

「「「！？」」「」」

その声に俺達は顔を見合わせる。

「暢介！ 今のは」

「董卓の真名だ。と、とにかく外に出るぞ」

そう言っただけ俺達は玉座の外へ出る。

「本当に申し訳ない」

目の前で綺麗な土下座をする、赤髪の青年。

髪の色は氷花と似ているが、青年の方が暗い感じの赤の気がする。

彼は月の姿を見て、思わず叫び駆け寄ったらしい。

ただ、月の近くに居た命に取り押さえられた。

その後、事情を説明され月からも『彼の言う通りで間違いありません』

せん』と言われて。

そして彼は今、土下座をしている。

「いやぁ……まさか、月様が生きてるとは思ってもいなかったの
で」

そう話す青年の目には少しだけ涙が見える。

「しかも詠も生きてるとは、良かった……」

そういう青年は本当に良かったと思っている様だ。

「あの〜月さん。彼は……」

聞かない訳にもいかないので、燈が月に聞く。

「はい。彼は……」

月がそこまで言うと、青年が遮る。

「月様。俺が自分で言いますので……」

そう言うと、月は頷き、口を閉じる。

「では改めて、私は高順と申します。月様を助けて頂き、感謝しております」

青年、高順はそう言うと俺達に頭を下げる。

ただ、まだ正座してるからどう見ても土下座なんだけど。

「それで、高順さんはこれからどうするんですか？」

ふと、氷花が高順に問う。

「俺は、月様の亡くなった時の事を知りたくて来たからなあ……
これからか……」

そう言っただけで考え込む高順。

お、これはもしかして……これはいけるかもしれない。

「高順さん、良かったら俺達の軍に来てもらえませんか？」

「俺に？ それは仕官要請という事でしょうか？」

「もし、高順さんが良ければ何ですが」

そう俺は彼に伝える。

彼には断る権利だってある、それは尊重しなければならない。

王だからと言って『よし仕えろ、拒否は認めない』なんてのをやる気は無いよ。

考える高順は視線を月に移す。

月は微笑むと頷く。

それを見た高順も、月に頷き返すと俺の方を見る。

「そのお話、お受けいたします」

「そ、それじゃあ」

「はい、私はこれより鷺島暢介様にお仕えいたしましょう」

そう言つて高順は片膝を折り頭を下げる。

「高順さん、仕官要請を受けて頂きありがとうございます」

そう俺は彼に言つた。

さて、高順こと駿と永遠が加入したが未だに俺達は人材不足に陥っている。

人材はあつて困るものではないのだけれど。

こればかりは運だよな……と、俺は思っている。

だから、運がいいならば人材は集まってくるはずだ……氷花・葵・命が立て続けに來た様に。

｝？side｝

「……やつと着いた」

陽も落ちており、空は暗くなっているけどこの街はまだ明るい。
実家を出て徒歩だったり、同じ方向だった商人などと一緒に行動

しやつと到着した。

「……ここなら」

ここは将の数が少なく、困っている状態だと言つ事を聞いた。ならば、採用される可能性も高いのではないか。そう思い、ここまでやってきた。

別の所の試験に行った際に私は全く喋れなかった。

いや、喋ろうとしたのだけど……上手く話せずに言葉はつかえたりして。

焦る余りに更に深みにはまるという結果になってしまった。

いつも、こんな形で試験に落ちてしまう。

筆記や実技はいいのだが……面接になればその失敗を思い出してしまう。

「今回は……ちゃんと……」

試験は明日だ、それに備えて今日は休もう。そう考え、私は宿屋へ向かった。

19話 人材不足（後書き）

さて、高順こと駿の武器ですが。

斧槍と日本語訳されるんですが「ハルバート」の事です。
一応スペックとしては。

- ・ 高さ ≒ 2.5 m
- ・ 重さ ≒ 3 kg

という所です。

本当はこの時代の武器がいいのでしようが。
あんまり私自身が武器に詳しくなかったので。

次回でもう1名加入です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1958w/>

真・恋姫無双 2人の御使い

2011年10月10日12時16分発行